

---

# 月 ~ルナ・ドーム~

田中 遼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月～ルナ・ドーム

### 【NZコード】

N4483D

### 【作者名】

田中 遼

### 【あらすじ】

世界中で人が増えていた。日本の人口が10億人である。ついに人は宇宙に飛び出した。月に移民しようというのだ。それが“ルナ・ドーム”。 “地球の人口を減らす”ための場所である。

## プロローグ

人口は増えるばかりだ。60億人？そのころは快適だつたろうな…！

今では、一つの大陸にその人数が押し込まれている。何処に行つても、人、人、人。

地球で一番イカレた種類だけが増えてしまったのだ。

わが国日本は（総人口10億人）、その中でも選りすぐりのイカレた連中が集まり、一つの結論を出した。

“ 地球の人口を減らす ”

宇宙移民時代の幕開けだ。

政治家は秘密裏に開発した“ルナ・ドーム”の全容を国民に公表し、移民を要請した。通常ではあり得ないほどの低価格で半永久的に住居を提供する、というのだ。しかし、彼らが思つたほど、希望者が出ない。

ルナ・ドーム最初の住人は、職を失つた人がほとんどだった。

総勢2億人を収容できる、月の住宅地に向かつたのはたつたの2千万人。

その後も政府は希望者を募った。徐々にその数は増大し、定員を超えてしまう結果となる。そこで政府は希望者を篩いにかけ、ルナドームの人口が1億8千万人以上にならないよう調整し、募集を中断した。

僕はルナドームへ向かう、最終便に、忍び込んでいた。

## 第一話 ··· もやか！？

何で忍び込んだんだ？ そう思つたる？

なあに、簡単な話さ。月に行つてみたかつたんだ。

自己紹介しようか？僕の名前は石井 哲。年は17。高校生なんだ  
けど、バイトのほうに熱が入つてゐる。コンピューターがあれば、出  
席日数をどうにかするなんて簡単だからや。

本当はきちんとした手段で月に行くつもりだったんだ。家族みんな  
が行きたがつてた。・・・・・親父を除いて。こう言つんだ。

「地球が一番だ」

全く嫌になる。親父自身が“ルナドーム”開発チームのメンバーな  
のに。

結局、頑固な親父の説得は諦めてこうして忍び込んだ。幼馴染がこ  
の便で発つから、見送りにいくところを出て、ね。まあ、無事  
に乗れたんだが・・・・・

「お兄ちゃん、ホントにこゝ、大丈夫なの？？」

一つ年下の妹がついてきてしまった。名前は未来。

「・・・設計上、こゝは客席と直接つながつてるから」

「真っ暗で怖いんだけど」

「だからついて来るなって言つたのに・・・」

「しようがないじゃん、ついて行きたかったんだから。ねえ、ライ  
トかなんかもつてないの？」

僕は懐中電灯を取り出し、自分の顔を下から照らした。

「ギヤーーー」「ドゴーーー

「イテツ！何すんだ、馬鹿！」

「やめてよーーー私ホラー系に弱いんだからーーー」

「蹴りかますこたあねえだろーーー」

ガターーー

何処からか音がして、僕らは口をつぐんでさつと身を寄せ合つた。

しかし、何事も無く、静寂が続く。不意に笑いがこみ上げてきた。  
未来も同じだつたらしく、二人で必死に声を出さないよううに笑つて  
いた。

やはり、誰かが調べに来た。それでも笑いが止まらない。上のほう  
からの光が、端の方を照らし、そこから入念に調べ始めた。流石に  
危機感が芽生え、笑いがおさまった。今にもライトが未来の体を照  
らしそうになつた、その時

「おい、そろそろ発射するそつだ。席に着かないと……」

רְנָה  
מִתְּבָא

ライトがパチッと音を立てて消える。僕らはホッと息をついた。遠くでアナウンスが聞こえる。

“ただいまより、乗務員がシートベルトの確認を・・・・・”

「ねつす、父ちゃん」

「え？ 電話？」

未来が画面を覗き込んだ。

「・・・・何処にいるんだ・・・?・・・まさか!?

「ダイジョーブダイジョーブ。ちゃんと帰つてくつから」

「・・・・・！何も知らないんだ・・・・・お前は・・・・・！」

「え？」

親父はちょっと躊躇つかのよつた間をおいた。しかし、思い切って息を吸い込んだ。

「ルナ・ドームの本物の田舎は……」バシュウー……ドーパーパーパー……！

轟音がどどりき、親父の言葉がさえぎられた。僕と未来はものすごい力で床に押し付けられた。

“発射した……！”

親父がなにやら叫んでいるが、何一つ聞き取れない。音量を最大にして耳に押し付けると、これだけ聞こえた。

「お前たち…………生き残るんだぞ…………！」ブツツ

しかし、限界だった。下からなだれ込む轟音と、上からのしかかるようなG。僕と未来の気を失わせるには、十分だった。

## 第一話 もひれたせ

地球

「お前たち・・・・生き残るんだぞ・・・・！」

ブツツ

彼は一階に下りた。

「・・・・」

「哲たち、何処にいました？」

彼の妻が手を拭きながらきいてきた。

「・・・・シャトルの中だ

「あい、やつぱつ

「何！？知っていたのか！？」

彼女は肩をすくめた。

「あんなに行きたがってたから・・・・あの子ならやりかねないし

石井氏はソファに沈み込んだ。

彼の頭の中で、“健康診断”の後の“お偉いさん”的言葉が反響し

た。

“君たちは國家機密を担うことになる。君たちがその機密を漏らせば、混乱、無秩序、戦いをもたらす”

「…………帰つてきますよ」

妻の笑顔が目の前にあつた。

「…………そうだな…………」

彼は無理に笑つて見せ、ソファから立ち上がつた。そして自室に向かう。

“機密を漏らしたものは…………抹殺されるだらう。もちろん、それを知つたものも。君らの行動は監視される。24時間、ずっとだ”

どういうことが、彼にはわかつていた。体に盗聴装置や、超極小の監視カメラを植えつけられたのだ。自分の開発したもの。彼だけが知つているやり方で破壊したが。電話をかける寸前に。

“我ながら、勘がよかつたな”

彼はニヤツと笑つた。

石井氏は部屋に入り、ドアを閉めた。

「誰か、いるんだろう?」?

闇の中で、黒光りしているものを握つてゐるはずだ。・・・・この  
部屋のどこかで

「・・・・やすがですね、石井さん」

正面から声がした。田の前に立つてゐるらしく。

「一つ、頼みがある。妻には全く何も知らせていらないんだ・・・・・

バスードサ！

階下で音がした。

「・・・・・残念ながら命令は、『この家にいるもの全員の抹殺』で  
す」

「・・・・・この・・・・」バシュ！

サイレンサーつきの拳銃からの弾丸が、石井氏のこめかみを貫いた。  
真横からの弾丸だった。

・・・・・ドサ。

彼の体が重々しい音を立てて床に転がった。

刺客は彼の正面に置かれたスピーカーを自分のポケットにしまい、

石井氏の手に拳銃を握らせた。

その仲間がその部屋に銃を投げ込む。・・・・・石井夫人を撃つた拳銃を。そして、ガス栓をひらき、自動発火装置を 石井氏の開発したものを使掛け、スッと闇に溶けるように消えた。

3人目の刺客は、とうに石井宅を離れていた。石井氏のコンピューターを持つてスポーツカーを走らせていく。適当な場所に止まって中身を調べる。

「・・・・・おつと・・・・・これだな・・・・?」

キーを2、3叩くと、一つのメールアドレスが表示された。

「さてと・・・・・」

助手席のノートパソコンを開き、表示されているアドレスを打ち込む。

「完了!」

エンターキーを押すと、まず老人の顔写真が表示され、そのデータがその下に順々に表示される。

「何!?」

顔写真のすぐ下に「こう書かれていた。

“正田 賢治 現職内閣総理大臣”

男は荒々しく舌打ちすると、携帯電話を取り出した。

“ プルルルル ガチャ。 . . . ビリした? ”

「やられたぜ。石井がルナ・ドームと輸送シャトルのデータを送つた奴、ただもんじゃない」

“ . . . . . だれか分かつたのかね? ”

「どうやつたか知らんが、あんたの名前や経歴を使ってアドレスを取得している!」

“ 何! ? ”

「なんて奴だ! 『本人を探すなら . . . . . 』、三日は軽くかかるな」

“ 電話とほぼ同じタイミングだったはずだ。その相手は? ”

「同一人物だ! それ以上は何も . . . . . 」

“ 電話の内容は! ? ”

「あのおっさん、電話の前に盗聴器をぶち壊しやがった。何も分からん! 」

“ 八方塞か . . . . . 一刻も早く見つけ出して始末せねば。君も早く本部に戻つてくれ。政府のコンピューターを総動員して調べ

るで”

電話が切れると、男は携帯を助手席に投げつけた。そして車のキーを回し、アクセルを踏み込んだ。鋭くシャーインした後、彼は猛スピードで“本部”に向かった。

ふと目をあげると、空を何かが横切る。

「フン・・・・最終便か・・・・」

男は、なにやら不吉な笑みを浮かべ、さらにアクセルを踏み込んだ。

## 第二話 まだ早い

「…………む…………？」

真っ暗だ。目を開じてるのか、開けているのか、自分で全く分からぬ。目の前に手をかざしても、全く見えない。

“…………いじめじだ？…………何も見えない…………まさか…………”

だんだんと焦りが生れる。まさか、まさか、目が…………？

その時、視界の隅で何かが光った。それと同時に記憶も戻つてくる。

“ そりゃ、シャトルの中で…………”

僕は手探りで携帯を見つけ、画面を開いた。あまりのまぶしさに反射的に目を瞑ってしまった。

「…………お兄ちゃん？」

未来も目を覚ましたようだ。目がくらんでいて、顔が見えなかつたが、声は相当不機嫌だ。

「…………な？ついてこない方がよかつたろ？」「…………まあね」

未来はしぶしぶ同意した。

“ それにしても、親父は何を言つていたんだろ？ ”

携帯の画面は相変わらず明るすぎたが、目を細めれば何とか見ることが出来る。

「 ・・・なんだあ？？」

「 どうしたの？」

「 莫大な大きさのデータが・・・これは！？」

「 え・・・？」

未来が覗き込もうとしたので、僕は画面を切った。

「 ちょっと。見せてよ」

「 お前には・・・まだ早いよ」

「 え・・・まさかアダルト！？」

「 ・・・まあ、そんな感じ・・・って違うー！ほれ

僕はクスクス笑いながら画面を開いてやつた。

「 ・・・何これ・・・？ シヤトル？」

画面には僕らの乗っているシャトルの設計図が映し出されていた。出発前に見たような茶々な物ではなく、本当に事細かに示されたたとえば扉のパスワードとか 僕はニンマリ笑つて間接を2・3鳴らした。

「さてさて・・・やつてみよつかね・・・」

「ちょっと、まさか・・・」

「まずは明かりをつけようか」

携帯のキーを2、3押すといとも簡単に明かりがついた。そしてバッグからノートパソコンを取り出す。

「やっぱパソコンは明るいところでやう」とねー。」

「・・・またハッキング??」

「・・・そりで最後かも知れねえけど

「え?」

僕は無言でキーを叩き続けた。

我ながら上出来だった。携帯の画面をあの一瞬でシャトルの設計図に移し変えたんだから。ルナ・ドームの設計図は、まだ、未来には早い。

シャトルの制御コンピューターの中を覗いて、今の状況を確認しながら、ちょっととした計画を立てた。大方成功しそうなんだけれども・・・・

もう一度シャトルの設計図を確認する。ついでに乗客名簿も。

「おい、未来」

「終ったの？」

「いやいや、これから始まるんだ」

「え？」

「出るぞ」

僕はノートパソコンを閉じてバッグに放り込み、立ち上がった。未来は睡然として僕を見上げている。

「せっかく忍び込んだのに!？」

「もう出発したんだ。とつぐの昔に大気圏外。放り出されはしないや。」

「まあ、やうだけど・・・・」

僕はこの部屋に入ったときに壊した通風孔に、再び入った。さつき、警備員がここを見つけてたらアウトだったな・・・・

「お兄ちゃんーー！」

「ん？」

「電気、消してこいわよ」

「…………うむでもこここ」と呟くやうだな

電気を消すと、辺りは再び闇に包まれた。

## 第四話 人々は神意に逆らつた

さつきの通り、照明なんざ簡単にいじれる。ボタンをちょっと押すだけだ。

客席に出るとき、僕は全ての明かりを落とした。こんな風に。

「・・・・・3」

「・・・・・2」

「・・・・・1」

カタカタカタ

「・・・・・0!—」パシユウウウ

「はい、安心して通れるな!」

「・・・・カウントダウンの意味は？自分でスイッチいじってるようなもんじやん」

未来は完全に僕を馬鹿にしていた。

「・・・・お前、ホントにかわいくない妹だよ」

「ホントに、ダサい兄貴を持つてますから・・・・才ホホホ

「オホホホ、アーオモシロイオモシロイ。で、未来」

「ん？」

「出て、右。22メートル先左折。それからさらに13メートル先の右側の部屋だ。全速力で駆け抜けるからな、しつかりついてこいよ」

「了解」

未来が敬礼のポーズをとった。完全な闇の中、僕は駆け出した。

未来が部屋に入ると同時に照明を回復させる。未来はある機械を使

い、非常用のアナウンスを流せる。

“ただいまの停電はコンピュータの信号ミスでござります……すでに修復いたしましたので、ご安心ください……”

仕事を終わらせてから、未来が口を尖らせた。

「人使い荒いんだから、全く……」

「い苦労、い苦労！」

僕はここで初めてこの部屋の住人に目をやった。

「おっす、アオ」

僕らを啞然としてみていた3人の一人が激しく反応した。

「…………哲！？何であんたが！？」

彼女の名前は日向葵。ヒュウガ  
アオイ 言い訳に使わしてもらつた、幼馴染。冷静

に彼女の顔を見るとかなりの美形で、スタイルもなかなか……  
親父は、僕が月に行きたいつて言つたのは葵がいるからじゃないか  
と本気で疑つていた。

まあ、少しほそうかな？

「諸事情つてやつ？・・・・そんなことより、今は葵じやなくて、日向さんに質問があります」

「私に？」

葵の隣の人によさうなおつさんが驚いた顔で僕を見た。何度かあつたことはあるけど、話すのは初めてだと思う。

彼、日向 政史マサシは葵の父であり、親父の親友であり、元、国會議員であり、現・ルナドームのトップだ。

「P・Pピーピーって、ご存知ですか？」

「P・P？それは何かの略かね？」

「・・・・そうです。ご存じないんですか？」

「・・・・全く知らんよ。・・・・P・P? People tem  
pted Providenceとか？」

「何ですか？」

僕が聞き返すと、彼はふつとミステリアスな笑みを浮かべた。

「People tempted Providence . . . .  
人々は神意に逆らつた」

「. . . . そしたらPTPになるのでは？」

「おお、確かに」

「. . . . .しかし、俺はそっちのほうがいいと思いますね . . . .  
詩的で . . . . では、失礼します」

僕は立ち上がりて部屋から出て行こうとした。もう、用事はすんだ。  
ドアノブに手をかけたとき、日向さんが鼻を鳴らした。

「ふむ、悪くないだらう? で、本当は何の略なのかね?」

僕はちょっと迷つたが、いつかは話さなければならぬこと、ドア  
に向かつて吐き捨てた。

「単純ですよ? “Purge Plan” 追放計画」

「それは、私のことかね?」

「さあ、ね。内容を聞きたいからいろいろな人に伺つてるんですよ」

では、とこつて僕は部屋から出た。未来は戸惑いながらもついてき

た。

「お兄ちゃん」

「あ？」

「実は内容も知ってるでしょ」

「どうかな？……む、お次は機長にでも会おうかね？」

「…………はー？」

未来とは違つ声が重なつた。振り返ると葵がいた。

「哲、まだ聞いてないよ。何であんたがここにいるのか

「さあな」

「…………ふん…………ま、いいわ」

彼女の目がギラリと光つた。うん、慣れてきたけどやっぱり恐ろしい。

「…………何か問題でも？」

「ルナ・ドーム最初の逮捕者になりそつただけ…………“密入国”

“ハッキング”あとそれと……

「まだあるのか？」

葵はニンマリ笑つた。

「私が襲われたことにするとか？」

ダメだ、こいつはたちが悪い。

「…………分かった、ついてこい。…………未来。」

「ほいほい」

「悪いがこいつの部屋で待つてくれ

未来はキヨトンと僕を見た。

「…………なんで？」

「お前らは一緒にいないほうがいい

女どもはクスクス笑いあつて分かれた。

全くおめでたい。

僕は一人の笑い方に妙に腹が立つた。

しばらく歩くと、初めて障害らしい障害にぶち当たった。施錠された扉だ。

「哲、ホントに機長に会いつもつ？」

そこで葵が再び聞いてきた。3度目だ。

「ああ」

「でも・・・！」でストップ。ロックかかってるよ？』

「へえ？」

ピ、ピピピ。ガシャン

「何処に？」

唖然とした表情の葵を見るのは實に面白い。



僕はやつをひと同じやり方で操縦席までたどり着いていた。  
・・・隣にいるのが未来なり。

「・・・葵は」

「え？」

「暗い中でも、まっすぐ走るへりこないうまく走れなかった。」

「無理」

「即答ーー?」

予想通り、あっさりと斬られた。

「無理は無理。できない。・・・なんで?」

「照明落として突っ走らつかと・・・」

「ハイ、ボツ。次の案」

「やつこえば、こいつがいても、得する」とはあんまりない・・・?

「・・・お前、ここ待ってる?」

「さて、着いたらすぐに警察に動いてもらおうじゃないか。何ならさうしてから罪ふつかけてあげようが？」

葵はにじつともしない。本当にやりかねないから危ない。

「…………しようがない。ちゃんと書いてこよ？」

「了解。で、ルートは？」

僕は天井を指差した。

僕らは身をかがめてやっと通れるような、狭くて暗い空間を歩いていた。通気孔らしいんだが……。

「最ッ低！－こんなとこ通るなんて……！」

「五月蠅い－俺だつてこんなとこ通るつもつはこれっぽっちもなかつたんだ！」

いい加減いらいらしてきた。この野郎（？）、せっかくブーブー言いすぎだ。誰のせいでこんな埃だらけの小汚い空間を通る羽目になつてつか、わかつてんのか？

「だいたい、アオがまっすぐ走ることあら……」

「違つ！－“暗い中”つてのが重要なポイントでしようが！」

「視覚に頼つてんじゃねえよ。」

「あんたと未来ちゃんが異常なんでしょうー?」

「異常とは何だ、異常とはー。」

やつとのことで通気孔が終わつた。僕らは格子状のふたをこじ開け、下の部屋に何も考えずに飛び降りた。

「動くなー!」

・・・・・すつと怒鳴りあつてたんだもんな。部屋に侵入した僕たち、警備員が銃を向けてたつて不思議じやない。

「・・・・・おい、葵のせいだぞ」

「はあ? あんたが大声でしゃべりながら手を上げた。

「・・・・・手を上げる」

警備員は冷静沈着で、ホントに迷ひなく撃ちやつだ。僕はおとなしく手を上げた。

「あのや、アオ」

「え？」

「暗い中、  
“アレ”は出来る?」

「・・・・暗くなれば

「喋るな！」

Γ . . . . . Good night . . . . - Γ

電子音の後、電気が切れた。

ミシシ「グッ...」デカシ

「もしもに備えてよかつたな」

すぐに電気を復旧せると、警備員は床に伸びていた。その傍らに葵がいる。

「今の、何？」

「俺の声紋とパスワードを登録してあるんだ。俺のいる部屋の電気が自動で切れるように」

葵は怪訝な顔をした。

「…………準備良すぎない？」

「なあに、葵のその護身術と同じだよ」

実際は“護身”よりも“攻撃”に使われているが。

「ねえ、ほかにも何か仕込んでんじゃないでしちゃうね？」

「備えあれば憂いなし。何かあったら、何か出てくる

「・・・・・なんかやな予感がする・・・・・」

僕も同じである。

## 第六話 やな奴だな

泥棒と、所持者との戦いは、いたむじつに他ならない。

ハッカーとセキュリティの戦いも同じだ。

まず、無防備な場所から盗られ、壁が築かれる。それを乗り越えて盗る。

さうして壁を強固にする。それも乗り越える。

今度は完全に覆いつ。しかし、その頃には壁を通り抜ける方法が見つかってしまっている。

そこでようやく防ぐのが困難だと気付く。ようやく、ね。ここからはサイバー・ポリス（SP）が動く。

簡単に言えば指紋で特定するのと同じだ。それで犯人までたどり着ける。

ただ、指紋は拭けば残らない。ネット上でも、自分の指紋を消すことが出来る奴が続々登場した。

さあ、大変だ。SPはさうに知恵を絞り、今度は“誰かが触った瞬間に警報が鳴り、指紋を採取できる”セキュリティシステムを作った。

あくまでイメージだけど。

そのセキュリティシステムが導入されてから、国家機密がハッキングされるって事はなくなつた。

「俺さ、サイバー・ボリスSPは面白い奴らの集まりだつて思つよ」

コンピュータへの指令が完了するのを待ちながら、葵に話しかけた。鍵のかかつた部屋にいる限り、何やつても安全だかい。“プライバシー”がどうたらこうたら言ひ連中のおかげだ。

「・・・何で? あんまり仲良さうじやないけど? そつきの行動を見ると」

「だつてさ、ハッカーと渡り合おうなんて、不可能に決まってるじやん。それを仕事にしてるなんて、面白い奴らだよ」

「そういうけどさ、ちょっと前にコンピュータのセキュリティシステムが切り替わつてから、ハッキングはなくなつたつてお父さんが言つてたよ」

「壁をすり抜けられるなら、触らずにして物を盗む」ことが出来る。・  
・  
・

葵は首をかしげた。「ノンピュータが完了した」と知らせた。

「や、行くぞ」

「…………まさか、また上?」

「まさか、俺ももつ懲り懲りだよ」

「じゃあ?」

「堂々と歩く」

「…………は?」

通路ですれ違った乗務員がお辞儀してきた。笑顔でお辞儀を返す。  
何回目かで葵が口を尖らせた。

「…………最初つからうすればいいんじゃないの!?」

「違う。俺たちがここにいるから、あいつらは警戒しないんだ」

「…………?」

「…………に入るのに、何重にもなったセキュリティシステムが動いてる。それを突破するのはまず不可能」

「へえ」

「もし突破できたとしても、必ず何らかの騒ぎになつているはず」

「まあ、ねえ」

「やつなつてないってことは、このガキジもは許可を得ている相当なVIP!って考える。だから何も言つてこないんだ」

「ナルホド。でもさ、さすがに操縦席までは入れないよね?」

「さあね」

「まさか・・・」

何の変哲もない扉が通路の突き当たりにあつた。扉は特別ではないが、そのセキュリティの複雑さと、その中の重要性は群を抜いている。

「IJPへこいつのだつたら、勝機はあるぜ?」

僕にいわせれば、こんな物、ただの砂山だ。

「ホントに?」

まだ疑うか、この女は!

「・・・・」

僕は親父から送られてきた設計図を見せてやった。

「へえ……」の、扉のところに書かれてるのは何?」

「おお。まあとこな……これが我らを部屋に招き入れる、魔法の言葉ですぞ!」

葵が僕を冷たい目で見て言った。

「…………パスワード?」

「おー、雰囲気つてもんがあるだろー。」

「じつでもいいけど早く入るわよ。外にいたつてしょうがないし」

「…………やな奴だな、お前」

「なんか言つた?」

「氣のせいだろ」

僕が扉の前に立つと、じょりくじて扉の高さの部分がタッチパネルに切り替わった。

「おおー!」

葵が歎声を上げた。内心苦笑しつつも、パスワ……じゃなくて、

“魔法の言葉”を打ち込んだ。

このシャトルでもつとも強固な守りに固められているのであらう扉は、音もなく、そして、いつも簡単に開いた。

## 第七話 “South·Pore” ····

このシャトル、セキュリティは欠陥だらけだとこいつことが明らかになつた。操縦席に直接つながる扉が開いたといつて、パイロット達が気付いていない。

銀行だつて職員用の入り口が開けば警報が鳴るのに、だ。

どうなつてゐる？まるで……誰かが来ることを知つて……

僕は頭を振つて、余計な考えを追い出した。もう、機長のすぐ後ろにいるんだ。例え罠でももう遅い。

「機長」

なるべく穏やかな声で、と思つていたら、作ったような声になつた。葵が変な顔をした。

二人のパイロットがはじかれたように立ち上がつた。年老いたほうの つまり機長っぽいほつのパイロットは、動搖をまるで隠せていない。

「な、な、何だ、貴様らは！？」

もう一方の若い 20代後半といったところか パイロッ

トはさわめて冷静だった。

「動くな」

すでに拳銃をこちらに向かっている彼の目が、微妙な光を宿している。

先ほどの警備員とは違い、明らかにこちらを消そうとしているように感じた。

葵は僕の腕にしがみついてくる。僕は、喉から何とか言葉を絞り出した。

「何もしませんよ。ただ、機長にお伺いしたいことが……」

「ここに入った時点で犯罪なのだ。両手を上げて、壁に向かって……

・・・

僕の声に言葉をかぶせた、若いパイロットの声に負けないよう、精一杯大きな声を出した。

「P・Pについてお聞きしたいんですが！」

全ての時が止まつた。ただ、計器が点滅していること以外、全てが

動きを止め、息を殺した。

パイロットは機長を睨みつけたが、機長は気付かず、囁くような声を出す。

「…………？」

「Please plan it again.」

機長はようやく“彼”を見た。

「斎藤君、銃を下ろしたまえ。彼とはじっくり話す必要がある」

斎藤は僕を憎々しげに見つめ、ゆっくりと銃を下ろした。すぐ傍の葵が安堵の溜息をつく。

機長は計器に向かい、何やら打ち込んだ。

“自動操縦”

モニターにそういう表示されるのを確認してから、機長は僕らについてくるよつ合図して、操縦席から出て行った。

彼について廊下を歩くとき、僕と葵は後ろを振り返れなかつた。斎藤が、ものすごい形相で睨みつけているのが分かつたから……。

“小会議室”。そんな名前がしつくつくる部屋で、機長は「一ヒー

を出してくれた。そして、僕と葵に向かいに座り、切り出した。

「で、君は何処まで知っている?」

「……名前、最高級の国家機密である」と、ルナ・ドームが

関係していること。そのくらいですかね?」

「……あら、ホントに知らなかつたの?」

「……そうだよー。」

「……君、名前は?」

「……石井 哲」

「……」

斎藤がわずかに反応したように思えた。気のせいかも知れない。

「石井君。嘘を言つたといひで向にもならん。本当は知つてゐるの

だろ?」

「……機長サン。お名前は?」

「南 孝だ。」

「南さん、俺、本当に知りませんよ?教えていただけませんか?い

つたい、何をたぐりんでるんですか?」

「…………ダメですよ、機長」

斎藤が横槍を入れた。

「こんなガキに國家機密を漏らす必要はありません」

力チンと来たのでやり返してしまった。

「失礼な奴だな。法律の中でしか動けない若造は引っ込んでひ

彼は低い、囁くような調子で言った。

「法律さえも守れない、自制のないお子様はママの所に帰りな

「ふん、腰抜けの分際で知ったような口聞くじやねえか

「なに!?

「ほら、一人ともやめなさい。斎藤、みつともないぞ

南さんの言葉で、舌戦はとまつたが、いまだに睨みあいは続いていた。

「…………石井君、すまないが、斎藤の言うとおりだ

「え…………?」

「君のよつな少年が知るべし」とではない

「うふ・・・・・」

「いに忍び込んだ」とは不問にしてあづよへ。おとなしく帰つてくれ

斎藤の勝ち誇つた顔より、わざの言葉より、機長に田を逸らされたことに腹が立つた。僕はこのつの間にか立ち上がつていた。

「・・・・・テメハ・・・・・」

「待つて」

僕は腕をつかまれた。葵が何かを決心したときの、不安そつな、でも確信に満ちた笑顔を浮かべていた。

「お願いです、彼に話してやつてください。南さん、いや・・・・・

」

葵が立ち上がつた。

「 サウスボーティランプ  
“South-pore”・・・・・」

彼女の切り札は絶大な効果を發揮した。

南さんは口をあんぐりあけたまま、葵をずっと見つめた。斎藤はさつきよつもせらりと鋭い目をしていた。その目が僕と葵を交互に見る。

さうやが、糸をつけてきたのは間違いではなかつた。

## 第八話 勘、かな？

葵を穴が開くほど見つめていた“South - por e”は、乾いた唇をなめて、尋ねた。

「君はいつたい・・・・・」

「私は日向 葵。でも、あなたが知っている名前はこいつち・・・・・向日葵”・・・・・！」

先程のような反応の後、機長がむつつりと呟いた。

「・・・・・何故、彼に？」

葵は肩をすくめる。

「・・・・・勘、かな？」

「・・・・・分かりました・・・・・」

どうやら、彼らの上下関係が変化したらしい。僕と斎藤はいまいちついていけなかつたが。

しか知らない。私も、本当は知るべき人間じゃない。“やむをえない犠牲”的一人のはずだからな

「…………」

「石井君も知つてゐる通り、近年の人口爆発は深刻だ。日本中で過密化が進んでいる。」

「その問題を解決するためのルナ・ドームでしょ？」

思わず口を挟んだが、彼はこぢらをチラツと見ただけで、話を続けた。

「…………ルナドームの“選ばれた住人”は、ほとんどの者が共通点を持つている。何か分かるかね？」

「…………？」

斎藤は機長を、葵はテープルをじつと見詰めている。誰も何も言わない、何か不安を抱かせる沈黙があった。

「経済的な そうだな、俗に云つ 敗者たちだ」

「??当然じゃないですか？ そういう人たちのほうが身軽だし、

再出発を望んでいるし、政府の提供した値段も手頃です」

「まあ、確かに筋が通っているが、あまりに割合が高すぎるんだ」

「え？」

「具体的なデータでは、約8割が失業者だ。」

「そんなですかー!?」

「残りの2割もほとんどが低所得者。作為的な何かを感じないか?」

「…………せうですね。普通なら買止めを狙う金持ちが出でてもおかしくないのに」

彼が頷いた。

「そり、これは仕込んだ。そつだろ? 斎藤くん」

話を振られた斎藤は、全員をじろりと見渡してから、溜息をついた。

「…………ええ。政府は、ルナドームを実験施設としか考えてい  
ない」

「実験?」

斎藤は一いつ瞬を見よつともせず、テーブルにじらめっこしながら話  
し続けた。

「人類が地球から離れて生活できるのか、快適に暮らすには何が必要か、伝染病がはびこったときの対処法。それを確認するためのドームだ。最初の1億8千万人はただの、モルモット実験体さ」

「…………モルモット…………」

「もちろん、すぐ傍で監視するために政府の人間も少しばかりいる。この便に乗っている日向つてお偉いさんも恐らくその一人だ。そうだろう?」「

斎藤は葵に問いかけたが、彼女はポカンと口を開けて、彼を見ている。斎藤は戸惑つた。

「…………知らなかつたのか?さつきの様子だと…………」

「まあ、斎藤くん、焦ることはない」

機長がちよつと微笑んで斎藤を制した。

「え?」

「彼らはそう説明したが、それは、私たち乗務員用の説明に過ぎない」

「えー?」

「真相は、違う」

機長は同意を求めるなりて葵を見る。そして彼女もそれに答えて頷く。

「……………P・Pが、もひとつ、勝手な計画なんだ……」

機長は、冷めた口一ヒーをがぶりと飲み干した。

## 第九話 “地球の人口を減らす”

「ルナ・ドームの目的は？」

機長は新しく入れたコーヒーをすすつた。

「移民施設でしょ？」

「セウー！」 ドン！

彼は「ツップを勢いよくテーブルに叩きつけて、中身のコーヒーの大半をこぼしたが、気にもしていなかつた。

「その通り、“移民施設”だ！」

「え・・・・？」

僕はどうやら何か核心に近づけたらしい。彼は興奮したまま、質問を投げかけてきた。

「なのに、おかしくないか？ 政府は“地球の人口を減らすため”に、ルナ・ドームを造つたといつ・・・・・・」

僕はちよつと首を傾げた。

「だつて、結果的にそつなるでしょ？」

「なら、何故“月に移民するため”ではいけないのかね？ その方がずつと分かりやすいはずだろ？」「

「僕はちよつと笑ってしまった。

「…………政治家ってのはもつたいたいぶるのが好きですかね」

僕の冗談めかした発言を、機長はまともに返してきた。

呆れたように首を振りながら。

「そんなことではない。分からぬ者には分からぬままで、分か  
る者たちには察しがつくような物にしたかったのだ」

「…………？」

葵も斎藤も何もない空間を睨んでいる。今、気がついたが、斎藤は  
何も知らないわけではなさそうだ。

機長はじっと僕を見ている。僕は考える振りをして、彼の言葉を待  
つていた。結局、静寂を破ったのは葵だった。

「…………いい加減、もつたいくぶるのをやめたら？ サウスパー」

彼女の、この偉そうな発言にも驚かされたが、機長が“すみません  
”と頭を下げたのにはもつと驚いた。

「…………しかし、こきなり話しても信じられる類の話では……  
」

全く耳を貸す気のない葵は、彼の言葉をとてもなく短く、鋭くさ

えぎつた。

「早く」

「…………おい、葵」

僕は見るに見かねた。

「なによっ。」

「どんな関係かは知らねえが、一応年上で、普通なら田上だろ?」

葵は鼻を鳴らして冷たく言った。

「政府のシャトルに忍び込んで操縦席までたどり着く奴に、そんな意見をする権利はない」

「…………あのねえ」

「いや、石井君、気にしないでくれ。話を戻そつ

僕はあんまりこいつのは好きじゃなかつたが、そんなことより、話の続きを聞きたかった。

「…………お願ひします」

機長は頷き、重々しく口を開く。

「ルナドームの目的は……“地球の人口を減らすこと”だ

頭がガクツと落ち、流石に敬意を失った。

「はあ？ そんな分かりきつたことを・・・・・」

機長がにやりと笑つて僕をなだめる。

「まあまあ、君がいうような意味ではない

「え？」

「文字通りの意味だ。“人口を減らす”」

「地球の人口を減らすために、月に移住するんでしょ？ さつきも・・・

・・・

「・・・・・移住しても、その移住先が満杯になつていいくだけだ。  
根本的な解決になつていない」

「じゃあ？」

僕はいろいろして機長を見た。流石にもつたいぶりすぎだ。

機長がゆっくりと口を開いた。

「・・・死人は人口に数えられない」

長い、沈黙があつた。

## 第十話 Loki

「…………嘘、ですよね？」

彼はかぶつを振った。

「実際、ルナ・ドームほど“それ”に適した場所はない」

「…………どうことですか？」

機長は指を折りながら説明した。

「情報のコントロールも簡単、余計な被害はゼロに出来る、そして、ルナドームを開発したのは政府。どんな殺人兵器も隠すことが出来るだろう」

「南機長、その情報は何処から？」

斎藤が問ひ。彼は葵と南を交互に見ている。

「…………話してもいいですか？」

南が問う。彼は葵を見ている。葵は僕をチラッと見て頷いた。

「いいわ。きっと、何か働いてくれる」

彼はちよつと頷き、またコーヒーをすすつた。

「…………5ヶ月ほど前の話だ…………」

私がこのシャトルの機長に決定した日だ。自宅で自分のパソコンを起動した。

ふと思いつき、メールをチェックした。

“・・・・・？”

不思議な題のメールがあつた。

“機長へ”・・・・？誰だ？」

“南孝様。突然、このようなメールをお送りするという無礼をお許しください。まだ、ご存知でないかもしれません、あなたはルナドーム行最終便シャトルの機長に選出されました。まずはおめでとうございます。

さて、これより月に飛び立たれる、南様に、ぜひ協力していただき

たいのです。出来れば、下記のアドレスをクリックして、私のもの  
話を聞いてくださいませんか？　Lookie”

機長はちよつと黙り込んだ。僕は我慢できずに先を促した。

「で、どうしたんですか？」

「私は躊躇つた。そのメールは一週間ほど前に送られてきていた。  
私自身のことを、私自身が知る前に他の誰かが知っていた。それが  
私には恐ろしいことに思えた。・・・・・何もかも知られているよ  
うな気がしたんだ」

「・・・・・わかります」

「しかし、私は、そのサイトを訪ねた」

白い背景に黒い文字が浮かんできた。

“お待ちしておつました

少々お待ちください”

パソコンの画面が真っ白になつた。

「なー?」

私はマウスやキーボードを必死で操作したが、なんの反応もなかつた。

「クソ!」

先ほどのように文字が浮かんだ。

“『安心を ウィルスではありません』

「・・・・・くそ、完全に引っ掛けられた・・・・・

“『信用なさらないのですね？ まあ、無理もありませんが・・・・・

「え・・・・・?」

“もし、私どもを信じよつと思えたときは、再度先程のページにアクセスしてください”

画面が光り、瞬きする間に画面が通常に戻つた。

「・・・・・何なんだ・・・・・?」

私はビビりじても自分を抑えられず、再びそこに行つた。

“「ほんに早く信じていただけるとは思ひませんでした」

「何者なんだ……？」

“…………まずは私どもがつかんだ情報をお見せします”

「その時にですか？」

「ああ。そこでPurage Planの全容が書かれたファイルを受け取つた」

「…………それで？」

尋ねた斎藤の声のトーンが微妙にずれていた。しかし、機長は気にせず答える。

「最初は何かの冗談かとも思つた…………名前が名前だしね

葵がくすりと笑つた。

「わかるわ。“Loki”はないわよね…………

「“ロキ”とは？」

「北欧神話の悪神よ…………世界の破滅の遠因なんだから…………

「

僕も知っていた。

確かに、その神話では、“ロキ”の起こした戦争が“終末”となり、“ロキ”の息子が最高神を一瞬で飲み込んでしまうはずだ。

彼の呼び名は“ずる賢い者”。信用できないのも当然だ。

## 第十一話 言え

「それだけか?」

斎藤が機長に質問した。その、尋問のよつた口調に、部屋の空気が変わった。

「…………斎藤?」

「それだけかと聞いているんだ」

葵がそつと後ろに下がった。唇はきつく結ばれ、顔が白くなりつつあつた。南機長はただただ啞然として自分の部下を見つめている。

「答える」

斎藤は冷たい目をしていた。その視線は機長に注がれている。

「…………お前…………いつたい…………」

「質問しているのは」ちらりだ

斎藤の手がスムーズに懷に入り、出たときには、銃が握られていた。

「答えなければ、彼女を撃つ」

言葉とともに、銃が構えられた。壁に張り付き、蒼白になつた葵に

向けられている。

「さつき“向日葵”だとか“サウスロー”だとか言っていたな。貴様らのコードネームだろ？」「

「・・・・・」

「組織の名前も出せばしゃべるのか？“F・F”。そりだろう？」

「なー？」

南機長が大きな声を上げた。葵はそれすら出来ずに固まっている。勝ち誇った声が響いた。

「貴様らの動きは全て把握済みだ。政府とて馬鹿ではない」

二人が動くことも出来ない中、斎藤は一人で熱くなっていた。もう、機長以外に何も見ていない。

「俺も貴様らと同じ名前がある。向日葵、サウスロー。俺は“ザイン”だー！」

「ザイン……？」

「L.O.K.Yもすごいぶん間抜けだな。俺がどういう奴か、確認もしないでメンバーにいれやがった」

葵が叫んだ。

「じゃあ知ってるんでしょー……」のまほじや、監殺されちゃうのよ！？」

彼女の顔に幾分赤みが戻ってきた。斎藤は笑った。

「“監”、じゃない。政府に取り付く寄生虫どもが消えるだけだ」

背中に氷を入れられたような気がした。

「なんのこと……？」

彼女は後退をうつとしたが、それ以上は行けなかつた。

「で、質問に答えてもらおう。それで話は終わりか？」

南機長は苦々しげに答えた。

「…………やだ

「…………嘘をつくなー！」

斎藤がいきなり叫んだ。

「まだ、“Loki”的正体を話していない！」

「いいえ。あなたが本当にザインだとしたら、あなたの知っている以上のことは……」「

葵はようやく落ち着きを取り戻し、壁から離れて彼に近づいた。

斎藤は冷徹な目で一瞥し、引き金を引いた。

「葵……？」

彼女は銃声とともに倒れた。僕が駆け寄ると、痛みで顔をゆがめていた。

「葵……？」

「…………大、丈夫…………肩を掠つただけ…………」

「次は脳天をぶちまける。言え」

「…………サウスパー…………」

彼女は体を起こそうとしたが、僕がそれを止めた。“掠つた”というより、抉られていた。血がどくどくと流れている。

「…………知らないんだ」

「…………なに…………？」

斎藤は銃を無表情で構えた。僕が葵と彼の間に入り込んだが、この距離では何の意味もないかも知れない。

機長は必死だった。

「頼む、信じてくれ！さっきまで、向日葵の正体すら知らなかつたんだ……！」

「貴様は？」

葵がぼそぼそと呟いた。

「…………」〇k\_iの正体…………？そんなものの誰も知らないわよ…………

斎藤はこちらをずっと睨んでいたが、諦めて銃をしました。

「お前ら三人は監房入りだ」

斎藤は警備員を呼び寄せた。

## 第十一話 こうじゅ、ですよ

一人の警備員が部屋に入ってきた。

「お呼びですか？」

そして、この部屋の状況に目を見張った。

後ろ手に手錠をかけられている機長。出血した肩を抑えた少女と、その傍で何も出来ずにあらあらしている少年。それに偉そうに足を組んでいる副パイロットだ。

「…………何事ですか？」

「」いつもを監房に連れて行け。麻薬の密輸を企てていた。今も少し“クスリ”が入ってる

「ハ！」

警備員は僕ら三人を疑わしそうに見渡しながら敬礼した。

「おい、本庄くん」

南機長が警備員に尋ねた。

「稻垣はどうした？」

警備員は葵の傷を具合を見ながら答えた。

「それが…………ちょっと前から姿が見えなくて」

葵と僕の視線が交わり、さつと離れた。

「早く連れて行け」

「…………この娘の傷は治療しても？」

「良いから早くしろ。」

本庄は不快感をあらわにしながらも、僕ら三人を立たせ、連行した。

「…………機長」

「何だね？」

廊下に出てしばらく歩くと、彼が話しかけてきた。

「何事ですか？」

「…………何も聞くな。斎藤に従つておいたほうがいい

「でも、一般市民の少女を撃つような男に…………」

「一般市民じゃないぜ？」

僕が口を挟んだ。一人の視線を感じたので、半分おぶついている葵をあごでさした。

「ルナ・ドームのトップの」「令嬢様様だ」

「…………ちょっと…………その言い方はやめてよ…………」

その声があまりにも弱弱しかったので驚いた。

「おい、大丈夫か！？」

「なんか…………ちょっと…………ふらつく…………」

「医務室はー？」

「もうすぐだ」

本庄が手を貸してくれた。

「…………ちょっと出血が多くったみたいですが、もう、大丈夫。痛み止めを打つておきました」

医師の言葉にホッと胸をなでおろした。葵はベッドですやすや眠っている。本庄が決まり悪そうに言つた。

「…………お一方、悪いんですけど…………」

「分かつてゐる。斎藤の命令に従わねばならんのだらつ。」

「…………はい」

僕ら一人は葵を医務室に置いたまま、監房へと“連行”された。手錠ははずされていた。

彼は僕らを閉じ込めると、申し訳なさそうに出て行った。

「…………石井くん、すまない」

「はい？」

「私が無用心だった。斎藤が政府のスパイだったとは…………」

「まあ、過ぎたことは忘れましょ」

「しかし、君をこのような状況に陥れたのは確かだし、向日葵も…………」

「…………葵は大丈夫。あれで一つの安全は保障された」

機長が“何を言つてるんだ?”という顔をしたのは分かったが、あえて無視した。

「あんまり、隠す意味なかつたなあ」

僕はバックの中から“本”を取り出した。何処からどう見ても何の変哲もない辞書だ

開いてみるまでは。

そいつを開けば、もう一つの僕の“手足”が顔を出す。

「パソコンか?」

「ええ。身体検査があると思っていたんですが……あの警備員さん。ずいぶんとあなたを信用しているようですね」

「ああ、そうだな……」

南機長は黙りこくれてしまった。自分で言ひのりなんだが、キーボードの音が耳障りだつた。

「なあ、君は何をやつていいんだ?」

ついに機長が聞いてきた。だいたい20分ぐらいは経つたと思ひ。ちゅうど、僕の作業が終つた時だつた。

「いりいろ、ですよ」

「何を考えている?脱出するつもりか?」

「……南さんは、俺がここから出るの20分以上かかると思つてこるんですか?」

「私なら一時間かかっても無理だがね」

「……」カタ、カタカタ

5秒後

力チャヤ!

「俺には5秒で十分です

彼は自分の視線をロックが解除された扉と僕の間を行ったり来たりさせた後、僕を探るように見つめた。

「じゃあ何をやっていた?」

「…………あなたが思つてゐる以上に、俺は知つてゐるんです

僕は誰もいない廊下へ出て行つた。

第十二話 宣戦布告だ・・・・・！

地球

“21日、郊外の石井さん宅で火災が発生し、男性と女性の遺体が・  
・・・・・”

アナウンサーが深刻な顔でニュースを読み上げる。誰一人テレビ画面を見ていないのだが、そこに背を向けてたたずむ一人の男が耳を傾けていた。

“遺体は石井夫妻のものと思われ、警察は確認を急いでいます。また、長男の哲さん、長女の未来さんの行方が分からなくなつており、何か事件に巻き込まれたものとして・・・・・”

“チツ・・・・・”

彼は思った。

“ガキどものおかげで“事件”になつちまつた・・・・・”

彼は下に目をやつた。幾人もの眼鏡の男が、コンピューター画面に向かい、もしくは怒鳴り、もしくは走り回っている。この28時間で収穫はたつたの一つだ。しかも、一番最初につかんだ一つだ。

「・・・・・」

羽下<sup>はねした</sup> 兼はうんざりしていた。後5秒もすれば、またあのお偉いさん<sup>けん</sup>がやってくる。

「羽下くん！――」

ほつひ、きつかり5秒だ。

「手がかりは！？」

健康的な体つきの ようは太つてゐ 男がせわしなく近づいてきた。ちょっととした時間稼ぎに煙草に火をつけた。

「・・・・・何度も言つてるでしょ？ 正田さん」

「“手がかりが見つかつたらこちから連絡する”か？ 待つていても何も言つてこないではないか！――」

「つまり・・・・・？」

彼は安物の煙草でトを指した。忙しそうに走り回る、“部下”たちがそこにいた。

「君が言つてきたのはたつたの一つだ！――」

正田現職総理大臣は怒りに膨れ上がりんばかりになつてゐる。

“メールの受取人は二人いた”。まさか、一日以上費やして得た

情報はそれだけとでもいいたいのか！？」「

羽下は煙草をくわえたまま、髪の毛をボリボリかいた。それでふつと微笑み、肩をすくませる。

「ま、要約するとそんなことだね。こっちも眞面目に動いてるんだが……」

「君の眞面目さはよく知っているつもりだがね」  
正田は皮肉たっぷりに言い放つと、驕然としている階下に降りていった。

一人の青年が羽下のところに早足で近づいてきた。

「…………どうした？」

「ほんの少し、前進しました……」

「ほりー。」

「二人の受取人のうち、一人の身元が…………」

「石井 哲に関することならもう知っているぞ」

青年は鼻を殴られたかのようにたじろいだ。羽下の目に浮かんだ、一瞬の期待が過ぎ去った。彼はさも面倒くさそうに青年から目を逸らし、追い払うように手を振った。

「その情報はだいたい27時間前には最新だったんだがね。早く仕事に戻りたまえ」

「いえ…………でも…………」

「まだあるのかい？」

「もう（）存知かと…………」

「何の話だ！？」

青年はまたしてもたじろぎ、恐る恐る告げた。

「もう一人の…………なんというか…………影の形がつかめました」

「何！」

羽下は身を乗り出した。しかし、次の一言は、彼らを更なる迷路に叩き込んだだけだった。

「…………„Loki“です。あいつがもう一通を受け取りました。」

羽下は田に見えて落胆していた。

一時間後

正田に小言をいわれたとき、ついに羽下が切れた。

「ふざけんな……あんな無能どもを使っていたら、いつまでたつても進展はねえぞ……」

「その責任は彼らではなく……」

「どれだけ使えねえか教えてやろうか……俺が一時間で調べた内容を、あいつらは28時間経つてからようやく伝えてきたんだ……」

「その中には……」

「ああ、俺の知らなかつたこともあつた！だが、俺が2時間コンピュータに向かっていれば、もっと情報が集まつたはずだ！！」

「…………貴様が働くかないのが悪いんだろうが…………」

「もともとこちにはやる気なんてないんでね……」これで失礼させていただきますよ……」

正田が負けを認めた。

「…………働く条件は？」

「下のパソコン4台と、俺がひとりになれる空間。もちろん、太つたお偉いさんが邪魔しに来ない場所がいい」

正田が憤怒しながらも承諾しかけたとき。先程の青年が異変に気付いた。

“ . . . . ? ”

フリーズだ。思わず辺りを見回すと、同じようになんで困惑した田をした  
ものと田が合つた。

画面に田を戻すと、いきなり、画面が真っ黒になった。

「何ー?」

あひひひひで囁きよひな声が上がる。

「何だ? いきなり? ?」

画面に白い、四つのアルファベットが順番に浮かんだ。まるで引っ  
搔き傷の様な奇怪な文字が並び始める。

“ L ”

「じつしたんだ! ?

“ O ”

「分かりません! !

“ k ”

羽下が叫ぶ。

「奴だ！……」

“ i ”

「“ LOKI ”の宣戦布告だ……！」

そこにある、すべてのコンピューターが致命傷を負った。

## 第十四話 勝手に、ね

シャトル

斎藤は一人で操縦席に座っていた。ちょうど、メッセージを送り終わったところだ。

“石井の息子が、このシャトルに乗っている”

このメッセージが届くのは、“Loki”が政府のコンピュータを壊滅させた2分後だ。

本庄が斎藤にとつてどうでもいい報告をしに来なかつたら、地球の政府の指示が仰げたかもしけないが、もう、遅かつた。

“全く・・・・日向氏の娘の怪我がどうだつたとか・・・・別にそんなことに興味はないというのに・・・・”

何も知らない斎藤は、“向日葵”“South-Pore”的兩人を出し抜いたことで悦に入り、にやけて座席に寄りかかつた。

「・・・・フン・・・・俺の勝ちだ」

そんな独り言を口にした。

## シャトルの個室

「うわ、独り言……」

それも独り言だと気付いて、笑いがこみ上げてきた。私もある“斎藤”とか言つやつと変わらないか。

「まあ、私は完全にひとりじゃないけどね。ねえ？議員」

耳にイヤホンをつけたまま、椅子に座つたまま動かない、中年の夫婦に笑いかける。答えはない。

「ぐつすり眠つてる…………まるで…………」

自分の一瞬考えた言葉に背筋が寒くなつた。こいつ思つた。

“…………死んでいるみたい”

我に返つて、急いで荷物をまとめ、かばんを肩に引っ掛け、部屋を

後には。

部屋は、真っ暗だった。自分がその中にいたと思つて、なんだか気味が悪かった。

シャトルのせりて別の場所の廊下

「石井君……」

僕はぐるりと振り返りながら、人差し指を脣に当てる。

「警備員に見つかったらどうするんです！？」

当たり前だらう？と、いわんばかりに彼が言った。

「…………また君が何とかするだらう？」

ついぞやうしてきた。

声にそんな感情がたっぷりと詰まっているのが、自分でもわかつた。

「…………今度はあなたを置いていきますけどね」

「それはそうと、石井君」

全く！ある種の才能だ。僕の感情をここまで無視できるとは……！

「君はいろいろ知っているかもしね。だが、一つ教えてやらねば・・・・・」

ぴんと来た。こいつは・・・・・

「親父のことですか？」

機長が停止した。見事にぴたりと。普段なら笑っていたらしく、今はそんな気分じゃなかった。

「知っているんですよ。あなたが思つている以上に……」

いつの間にか壁を見つめていた。頭が空っぽで、機長の声が聞こえてはいたが、聞いてはいなかつた。言葉を聞き流してしまいなんていつたのかさつぱり分からなかつた。

「え？」

彼は僕の顔をじっと見て、繰り返した。

「…………どうやつて知った？？」

迷つたが、設計図のことこの人に話すのは、なんだか気が引けた。

「…………知るべきことは、知りたくないでも、勝手に耳に入つてくるもんなんです」

僕は廊下を進みながらもう一度呟いた。

「勝手に、ね」

## 第十五話　一人のヒロロード

「何を言おうとしているのかね？」

機長は、顔をしかめて僕を見た。

「…………良いでしょ。はつきついてますよ？」

「…………」

僕は廊下を早足で歩きながら続けた。

「Jの船の乗客の9割が組織のメンバーといふことを知っています……あ、それと、南さん」

僕は付け加えた。

「ポーカーフェイスを身につけたほうが良いんじゃありません?」

慌てふためく男を横目で見るのは、面白かったが、先のことを考えるどぞうにかしてもらわないと困る。貴重な人材なのだから。

「…………まさか、私たちの…………」

“ Straw”でしょう？

「何の話だ？」

「政府の機関があなた達の計画につけたあだ名ですよ。“藁”ってね」

「…………藁？」

「溺れるものは藁をもつかむ」

機長はそれきり黙ってしまった。

“ちょっとまずかったかな？”

「まあ、やるしかないですよ」

機長が力なく笑った。

「種の見えてるマジックを披露しろとっ！」

「はい」

つっこつこ、笑ってしまった。

「二人のペロ口です」

「君も、かね？」

僕は何も言わなかつたが、彼にはそれでよかつたようだ。

僕たちはシャトルの集会所の扉の前に立っていた。

「…………前に聞いたかな？君は何者だ？」

「…………」普通の高校生です

「…………最近の高校生はレジスタンスのアジトも知っているのか…………やれやれ…………」

諦めたかのように首を振った機長を促し、扉を開けさせた。

「…………」

「…………」

張り詰めた空氣に満ちていた。

“ やれやれ…………ちょっと違う連中が入つて來たぐらいで殺氣立ちやがって………… ”

「 おー一人さん、何か間違えてないか？」

僕の身長は182cm。結構高いほうだろ？そんな僕が見上げてしまふような大男だ。その上、ボディビルでもやつてるんじゃないかというほどの体つきで、人を小馬鹿にした笑みを浮かべている。

「 何も間違つてないよ」

機長が完璧に冷静さを保つてゐるには驚かされた。

「 ハハがどこか、君たちが何者か、しっかり分かつてこらつつもりだ

金属音が鳴り響き、いくつもの銃口が一いつ瞬間に向けられた。

““怪しんでください”と言わんばかりだな。ブラフだったり並ぶんだ？”

目の前の大男も銃を構えていた。銃器類に詳しくないのでよく分からぬいが、とてもなくごつい銃だった。

「どうこう意味かお聞かせ願おつか」

機長が両手を広げ、周りを見渡した。

「私は“South - Porc”だ」

部屋の中の者がぴたりと止まった。そして、構えられた銃がゆっくりと降りていった。

「・・・・・待つてましたよ」

声がしたぼうを振り返ると、僕ぐらーこの機長で、サングラスをかけた男が立っていた。

「まさか機長がそつとは思つてませんでしたが・・・・・

「君は？」

「“Wildcat”です」

「えー？」

つい、声が出た。皆が僕のほうを向く。  
グラスを取った。

“Wildcat”がサン

「…………哲！？」

## 第十六話 まあ、そうだな

本来、“ハッカー”というのは、褒め言葉だ。コンピューターに詳しいとか、技術があるとか、そんなような意味だ。辞書によつては“天才的”なんて表現もある。

しかし、コンピュータ・システムを破壊する側（“クラッカー”）にも、同じぐらいの、もしくはそれ以上の技術が求められた。それで、“クラッカー”＝“ハッカー”的な認識が生れ、今の意味になつたのだ。

今、僕の目の前でサングラスをとつた、“Wildcat”・・・いや、僕のクラスマート三浦翔は正真正銘本來の意味の“ハッカー”だ。

「なんでお前がここに！？」

「お前こそ！」

「知り合いかね？」

「・・・・一応

僕の個人的意見を言えば、“面倒くさい奴”だ。まあ、かなり仲が良いが。

「おいおい、“一応”とは何だ！？」

「言葉のままだ」

「…………それより、" Wildcat "」

機長がやんわりと会話に割り込んできた。

「君は来ないはずでは？」

翔は肩をすくめた。

「気が変わった、とでも言つておきましようか。あれ？ “向日葵”  
は一緒じゃないんですか？」

僕と機長がピクリと動いた。

「…………気が変わった…………？」

機長はこいつ聞いたが、僕は違う言葉に反応していた。が、表に出ない  
いように努力した。

「ええ。それ以上は話せません」

翔は“ハッカー”であり“クラッカー”になりえる技術を持つてい  
る。だが、そうはならない。

彼が僕をまともに見た。

「おい、哲。お前、ルナ・ドームにこぼれ来ないはずじゃ？」

「えっと…………まあ、そうだな」

「…………忍び込んだのかー？」

「えっと…………まあ、そりだな」

「違法行為だぞ……だから最近の…………」

翔のお説教が始まった。

彼が“クラッカー”にならない理由だ。糞真面目で、無駄に正義感が強く、法こそ正義だと思つてゐる。

「…………が問題で…………おい、聴いているのか！？」

「…………いや、全く。お前、そんな話をするためにここにきてるんじゃないだろう？」

翔がムツとした顔をしたが、何もいわなかつた。機長が再び言つた。

「すまないが、少し信じがたいな。あそこまで消極的だつた君が・・・

「・・・・・だから気が変わつたんです」

「フン

鼻で笑つてしまつた。

「どーせ向日葵を追つてきたんだろ」

「なー?」

「どうもこいつも、ポーカーフェイス出来なさすぎだ。

「やつぱり、か。そりだよなあ?葵、かわいいしなあ・・・・・・」

翔が真っ赤になつた。

「だ、黙れ！！」

周りの奴らが呟いた。

「葵…………？」

一瞬赤くなつた翔の顔がスッと青ざめた。

かかつた。

「…………知つてたな？“向日葵”の正体」

「…………」

「お前、最初に聞いたな？“向日葵は？”って。そんでもつて今の反応でほぼ確定だ」

集会所は静まり返つていた。時々何人かが吸つている煙草の煙が上がるだけだ。

「…………負けだよ。そうさ、俺は向日葵の正体を知つて、あいつだけでも助けるためにシャトルに乗つたんだ」

「…………“助ける”だと？」

さつきの大男が怪訝そうに尋ねた。翔が鋭く振り返った。

「ああ、そうさー！」んなばかげた作戦から、助けにな！」

「…………」

「あんたらみたいな筋肉馬鹿は知らないかもしれないけど、この作戦は全て政府に漏れている。あだ名も教えてやるうか！？」

「“Straw”だろ、翔」

彼はまたこっちを振り向いた。

「知っていたのか！？」

「おいおい、なめんなよ。技術はお前にだつて負けねえんだ。このくらいは知ってるさ」

大男が考え深げに呴いた。

「…………“藁”か…………」

翔が冷笑した。

「アレ？意外と頭の回転速いな

流石に男の目つきが悪くなつた。それで僕が翔を一発平手で殴つて言つた。

「…………おい、あんま挑発すんな。それより、なんで葵のことを知ったんだ？」

「いつてえな！……“ロキ”に聞いた

周りがざわめき、機長が考え込んだ。

謎は深まる。

## 第十七話 決心はついたかい？

地球

「おーーーそつちはなんか反応あつたかーー？」

「ダメですーー何にも反応がないーー！」

「クソーーーー！」

騒然としたコンピュータールームを見下りし、羽下は溜息をついた。

“ムダムダ。お前らには手にあえない代物だよ”

「決心はついたかい？」

「・・・・・・・・船のよつな 犯罪者に全てを託すのは・・・  
・・・」

「まだ逮捕はされてないぜ？」

「証拠がないだけだわ！」

羽下は肩をすくめ、そこから出で行つとした。その腕を正田がが  
しつと掴んだ。

「分かつた、頼む！」

彼は正田を睨みつけ、悪々しそうに舌打ちした。そしてその手を振り解き、一步後ろに下がった。

「ちょっと前に言った条件…………」

「分かってる、パソコン4台こ価値、だな？」

「もう一つ……」

たっぷりと闇をおいて羽下が告げた。

「俺を監視したり、指図したりしたら…………」

「…………どつなるんだ？」

「…………やあな？」

羽下がにやりと笑った。正田は内面の恐怖を巧みに隠し、鼻で笑つて溜息をついた。そして傍の職員を呼び寄せた。

「おー、あそこのコンピュータを…………」

しかし、羽下が笑いながらわざわざいた。

「正田さん、冗談はやめてくださいよ」

「何？」

「あそこのが使い物になるわけないでしょ」

「…………」

「多少旧式でも構いませんから、今、完璧にネットワークから遮断されているものも」

正田が職員に問う。

「そんなものあるのかね?」

「倉庫に転がっているものでようしければ……」

「よし、確認してみよう」

職員と羽下が部屋から飛び出すと、入れ替わるように一人の男が入ってきた。正田が溜息交じりに聞いた。

「………… „Loki“とは、何者なんだね?」

「………… „Phantom“と呼ぶ奴もいます。ま、警察が安直につけたあだ名ですけど」

「ファンタム? „Loki“といつのは?」

「それは彼自身が名乗ったんですね。システムを盗み見たら、そのコンピュータのデスクトップに“Loki”と大きく書く。ウイルスを送つたら、それが“Loki”と告げるように設定しておく。等等……」

「なんといつか…………」

「ガキっぽいでしょ？でも、尻尾はつかめませんよ」

「君には分かっているんじゃないかな？」

彼は肩をすくめた。

「確かに、昔、探したことがありますよ。警察官の立場を使ってね

「で？」

「性別すら分からませんでした」

正田がそばの椅子にドカリと腰を下ろした。

「いつたい何者なんだ？」

「…………大臣、ご存知ですか？」

「何を？」

「あいつの被害にあつた企業などは洗つてみると必ず何か  
出でてくるんですよ」

正田は皿を手で押せた。

「…………洗えれば向かしり出でるが、この世の中

「やつや、やうですけど、洗つ糸口は必要ですよ」

「で？ その糸口を“Lock”が提供してくれる、とうわけか

「ええ、有り難いことにね」

「……でも、そうなるのかね？」

男は挑戦的に笑つた。

「さあ、どうでじょうか・・・・・・」

## 第十八話　まあ、落ち着けよ

「ところで正田さん」

男が怪訝そうに入り口を見た。

「先ほど出て行った奴、どこかで見たような気がするんですが・・・」

「羽下君のことかね？」

彼は飛び上がった。

「羽下あ！？ 羽下 兼ですか！？」

男のものすい剣幕に気圧されて、正田はたじたじと下がった。

「あ、ああ。 ・・・ まさか・・・」

「あのハッカー野郎が何でここにいる？」

「・・・ ある人物を追つていってね。 彼の力が・・・」

「どうせなら“ローキー”の力を借りればよかつたのにねーあいつが一流だとしたら羽下は三流以下ですよ」

「・・・ 結果的に、その“ローキー”を追つているのだが・・・」

「・・・」

男は吹き出した。

「あの“幽靈の影”を羽下が！？ハツハツハー！」

彼の笑いはちょっと不機嫌な声でさえぎられた。

「おい、筒井警部補。俺が三流以下なら、あんたはもつと下だろ？」

羽下が戸口に寄りかかって“筒井警部補”を睨みつけていた。筒井は鼻で笑つた。

「俺は“捜査する側”だ。別にハッキングの腕はいらない

「フン、昔はあんたも・・・・・・」

筒井は右の握りこぶしをそつと持ち上げた。

「言ひつな。今じゃ俺は堅氣だ」

「雑魚が堅気になつていくんだな」

羽下はその拳をポンと殴つた。

「・・・・・・一概には言えんがね」

筒井はそつと呟いた。何も聞こえなかつた正田は筒井に聞いた。

「で、筒井くん、羽下を捕まえるのかね？」

「」いつを捕まえると、私も仕事を追われてしまいします」

羽下がにやりと笑った。先程のいやらしい笑みではなく、仲間同士で悪巧みをしてるかのような笑みだった。

「……………わつか

「おい、それより、筒井。お前、パソコン持つてないか？」

「パソコン? 何でまた?」

「」のパソコン、ネットワークに接続されたのは“Lokey”に壊されて、無事だったのは20年前の代物で、どうにもならん

「お前のは?」

「」んな信用できない連中に囮まれた中に持つてこれるか!..

正田の顔に血が上り、筒井は快活に笑った。

「確かに」

「筒井くん!..?」

「まあ、落ち着けよ、大臣様」

「安月給なんだから、壊すなよ?」

「大丈夫、政府が保証してくれっから」

正田は深く息を吐き、その部屋から出て行った。

「沈黙は了承のサイン、ですよね？」

「…………いいだろ？」

彼は部屋の外の、誰もいない通路で呟いた。

「どうせ生き残れはしないのだから…………」

そして携帯電話を取り出した。

“トゥルルルル…………ハイ”

「どうだ？」

“45分でドームに着陸します。順調ですよ”

「よし」

正田には確信があった。

“全て…………予想通り…………”

## 第十九話 幸運だったな

シャトル

“ ‘Loki’ に聞いた、か・・・・・・”

大男があごをさすりながら呟いた。翔はその口調に食まれた疑わしさを敏感に感じ取り、彼をにらみつけた。機長は翔をなだめるような身振りをしながら尋ねた。

「どういつ風に教えてきたのかね？」

「・・・・・・・・・ただ一言、“向日葵は日向葵だ”つて・・・・・・・・

」

周りを取り巻く連中の一人が笑った。

「ハン！お前、それを信じたのか？」

“ ‘Loki’ の言葉を信じたから、あんたらはここにいるんだろ？”

笑った男はちょっと身をすくめた。目の前の大男が今度は腕組をして翔を見下した。

「やつこいつの前は？」

「…………？」

「“Loki”を信じてい……」

「…………あ、やつこいつとか」

翔はかすかに呟いただけだったが、男はぴたっと口を閉じた。

「“Straw”のことだろ？ あれは、“Loki”的な考え方じゃない。知らなかつたのか？」

ざわめいた部屋の真ん中で、機長が拳をぎゅっと握り締めたのが見えた。

翔の言葉は続く。

「親愛なる“South - Pole”的な考え方のさ

「手の内は政府にござれ、向こうは準備万端整っている」

「しかも、政府への“情報提供者”は彼の部下…………」

少しずつ、みんなの目が一点に集まつていった。その“一点”的男  
はまっすぐ前を向き、その視線を受け止めた。

「おー、おっさん…………ホントか?」

この静まり返つた部屋で、機長のすぐ傍に立つてゐる僕が、彼らの  
視線を集めるのは至極簡単だった。

パチン!

指を鳴らせばよかつたのだ。音と同時に皆僕のほうを見た。

「おこ、翔。ちょっとそれは、お前ことって“困ったこと”を隠してるようだぜ？」

「何？」

響きと強さは100点満点だ。“自分は何を言われてこるのか分からぬ”。“うごいてこるよう元聞こえる。でも、田はいづつ言っていふ。

“お前、正氣か！？”

僕は構わず続けた。

「…………ここに居る方々、“ルナ・ドーム”が何のための施設か、ご存知ですか？」

男たちが互いに言い合つた。

「実験施設だろ？」

「人体実験をやろうなんて、一線を越えてるよ

黙っている何人かは知っているようだ。じとじとした視線を送ってくる。

「…………それすらも、眞実ではありません…………」

僕が話し終えたとき、部屋は静まっていた。

「…………だから、計画が無茶だろ？、やるしかないんです」

翔は僕を睨みつけた。

「…………厳重警戒の中、“LoKi”的力も借りず、ルナ・ドームのコンピュータを乗つ取るつてか？」

「プラス、先にドームに住み着いた人の救出」

「…………正氣か？ヒーロー願望にとつつかれてないか？」

「大丈夫だ」

機長の確信に満ちた声がした。

「私の考えでは、『Loki』はここに居る」

皆がざわめき、お互いの表情を窺つた。

「…………何故ですか？」

「…………Lokiがこの計画を知らぬはずも、黙つてみてているはずもない。それに…………」

彼は翔をあごで指した。

「こぞとなれば、彼がいる」

「幸運だつたな、来ていない筈の“Wildcat”が来てくれて  
いるんだから・・・・・」

機長は満足そうに頷いた。

## 第一十話 乗りかかった船だ

アナウンスが響いた。

“まもなく、ルナ・ドームに到着します。念のため、座席に戻り、シートベルトを着用してください”

「…………石井君、何処に…………」

「その必要はありません。ここに残っていても大丈夫」

翔にも田で合図して残らせた。

皆がざわめき、自分の座席もどううと部屋から出て行つた。残つたのは、機長と、僕と翔。それに、部屋の隅の“誰か”だけだつた。

もつとも、僕にはそれが誰なのか分かつていたが。

「おい、さつさと顔を見せろ。さつきのアナウンス、俺はだませねえぞ」

「そんなんに怒んなくてもいいじゃん」

暗がりから出てきた顔を見て、翔が仰天した。

「未来ちゃん！？」

未来は翔にウインクした。

「“ちやん”は余計だけどね、愛の勇者さん」

「“愛の勇者”？」

翔の目が“？？？”といつ感じだつたので、教えてやつた。

「こいつがここにいるって事は、俺の体のどこかに発信機をつけたつて事。発信機をつけたつて事は当然、“おまけ”も、な！」

「あら、何のことかしら？」

この糞ガキが拳の届かない範囲、ギリギリにいるのに腹が立つ。

「おまけって？」

「盗聴器」

「・・・・・ナルホド」

「しかも、だ。こいつは人を、なんつか・・・・ミツバチ扱いしてんだ！」

「・・・・・ミツバチ？」

「人の体に“花粉”をつけてばら撒くんだ」

「まあ、そこまで分かつてなんう」

未来がわざと近寄ってきた。

「私が全部知っちゃった」とも……

「分かつてから怒つてんだよー」

「そりゃ、で、何で私に隠したの?..」

「…………まだ、早いと…………」

「何言つてんのよー両親が死んだのよー?真っ先に知りせんべきで  
しょー?..」

「…………そりだな」

適当に受け答えしながら、わざとまどの会話を順番に想い出していった。

「それに、ルナ・ドームの…………

「…………ああ…………」

ギャンギャンわめく妹を横田で見ながら、冷静に考えてみた。

“ やつぱつ、そうだ……”

妹に一つの疑惑が芽生えた。

ふと気付くと、翔が未来をなだめていた。未来がいつの間にか泣いていた。その涙を見て、“会話を聞いただけでは、両親が死んだとは分からない”ことを指摘する気はなくなつた。

「…………お兄ちゃんは…………泣きもしないの…………？」

「…………親父は…………」

僕はまたしても途中で氣が変わつた。この言葉は未来に言つべきじやない。

「…………きつと覚悟の上だつたんだ」

「…………なによ？」

「…………」

やつ、こんなこと言つべきじゃない。

“自分で死を招いたんだ”  
なんて…………

「…………南さん、<sup>ストロー</sup>計画に僕らを参加させて貰ってますよね？」

「…………ああ」

「…………翔、お前も参加するんだ？」

「…………乗りかかった船だ」

「…………私もよ」

「…………よし、Uのメンバーなら、何とかなるかもしちゃま  
ん」

「どうするんだ？」

「当初の計画では、メンバーが本部を襲い、コンピュータシステム  
を乗っ取る、もしくは完全に破壊して時間を稼ぎ、他の幾人が先  
発隊の人たちを救出、ドームにあるシャトルで地球に帰還。ってと  
こですよね？」

南さんが苦笑交じりに答えた。

「幾分、批判的感情が混ざっているかもしれないが、まあ、そんな  
ところだ」

「…………敵は、全てを知つていい。つまり、  
この動きに対する準備は整っているわけです」

「…………そつか！」

僕が新しい計画を話している間に、微かな振動を起こしながら、シャトルがドームに到着した。

## 第一十一話 足搔ぐんだよ

ルナ・ドーム内

「…………最終便、到着しました」

司令官はこやうと笑つた。

「情報によると、奴らは本部に“奇襲”を仕掛けてくるらしい

「せうだ。どうせなら、徹底的に叩く。しっかりと内部まで侵攻させんのだ」

敬礼し合ひ、彼らはそれぞれの持ち場に戻つた。

「情報は武器になるんだ。反乱分子どもめ……」

彼らにとつて、これは“戦争”ではない。始める前に、勝利を手にしているのだから。

「連絡は行き渡りましたかね?」

シャトルの集会所

「うむ。しかし、何故“作戦中止”ではなく、“作戦変更、指示を待て”と送ったのかね？」

南以外は“そんなこともわからねえのか！？”と心中で叫んだ。  
一番耐えたのは僕みたいだ。

「……………そう言えば、過激な馬鹿が勝手に動いて死ぬなんてことも起こらないうからですよ」

集会所のドアをノックする音が響いた。扉のところにいた男がにやりと笑つた。さつき、“知つている者”的目をしていた一人だ。

「その、過激な馬鹿が参上しましたよ？」

「……………へえ……………？」

「俺は羽下 隼。ジョンあんたらのお手伝いをしようと思つてね」

僕は彼を疑わずにいられなかつた。

「……………あんたの、当初の計一画は？」

おかしなことに、僕のこの発言は、その場にいる全員の視線を集めることになつた。

「……………なんだよ？」

未来が呆れたように言った。

「…………いやあ、突っ込んだ発言をするなあ、と思つて「だつてさ、明らかにこの人“ドーム”の目的を最初から知つたし、いきなり“お手伝い”とくるし、絶対なんかあるだろ。それに・・・・・」

「それに?」

「といつておきの情報だ。まだ隠しておいたほうが良い。とつておきの情報だ。まだ隠しておいたほうが良い。

「俺の勘がこいつは危ないって言ひてる」

未来が鼻を鳴らした。

「・・・・・何だよ?」

「別に」

羽下は、僕が隠すことにして“とつておき”に勘付いた様だ。僕を疑わしかど警戒の入り混じった目で見てくる。

「・・・・・何を知つている?」

「兄貴のこと、だ」

彼は目をスッと逸らした。

「…………あいつとは関係ねえ」

「ホウー！」

「俺は興味があるだけだ。ヒーロー気取った輩がどう戦うのか

「…………戦うんじゃねえ」

翔が不機嫌に言つた。

「足掻くんだよ」

僕らはニヤリとした。笑つていなきゃやつてられなかつた。

「で、羽下君は計画…………？」

「参加してもらいましょうかね」

未来と翔の肩がカクツッと下がつた。

「…………お兄ちゃん、氣い変わんの早くない？」

「…………さつままでの警戒モードは何処に？？」

「馬鹿、あれは“信用するかどうか”的問題で、“参加させるかどうか”はまた別の話だ」「

「はあ！？信用してなくても参加させんの！？」

「お前がそりだぞ、未来」

「程度が違うでしょ！？」

「おひ、お前のほうが信用ならねえ」

「…………」

未来は二つをギロリと睨み、黙つた。僕は構わないことにした。

「さて、じゃあ、計画を説明しようか」

「…………いいのか？」

「何が？」

「俺を信用してないんだろ？」

「たいした問題じゃない」

「…………？」

「…………全員が、何かしら隠してやがるからな

隼以外、誰一人僕と目をあわせようとしなかった。

## 第一十一話 そんな暇はないよ

「さて、と。分かった？」

「ああ。信用してない奴でも連れてく意味が分かった」

「ん？」

未来がふっと溜息をついた。

「もしされたら、揃つてお陀仏つてわけだし」

翔がぱちんと指を鳴らした。

「もう一つある。裏切れる危険を顧みてる余裕がないんだよ」

「と、言つわけだ。怪我人だからって、寝ていられるとは思わないことだ」

怪訝な顔をしたのは隼だけだった。あとは“ハイハイ分かりましたよ”とでも言つてるような顔をしていた。

扉のほうから声がした。

「気付いてんなら、お見舞いの言葉をかけてくれても良いんじゃない？」

「悪いけど、そろそろ“始まる”時間だ。そんな暇はないよ」

そこには葵が立っていた。腕を組んで壁に寄りかかっている。そして左耳のイヤホンからコードが延びていた。

「全く、どいつもこいつも盗聴しやがって、プライバシーも糞もないな」

「でもわ、お兄ちゃんそれ分かってくつつけたままにしてたんでしょ？」

「結構便利だぜー！」うつやつを持つてると

僕は胸ポケットのある機械のボタンを押した。

「ウフフ……！」

葵がすいこ声を出してイヤホンをはずした。

「！」の馬鹿……！

僕と未来は大笑いしていたが、残りは“わけが分からぬ”と僕らを見ていた。

「…………おい、何やったんだ？」

「親父が作った、盗聴器を破壊する装置があつてな、それは簡単に言うと、盗聴器に許容以上の電流を流して、ショートさせるつてモノなんだけど、それは中にある制御システムに間違った命令を下させてるんだ」

「…………」

「まあ、とにかく、それを改良すると、相手が聞こえるものをコントロールできるってわけだ。不快な音を聞かしたり、話してる内容とは別物の言葉を伝えたり、音量を馬鹿みたいに上げるとかな」

葵は左耳をさすり、険悪な顔で僕を睨みつけていた。

「こいつが、コロス」

「まあ、せいぜい頑張れよ」

「…………」

沈黙を破ったのは、自分のコンピュータの画面を見ていた翔だった。

「哲、動き出した」

「場所は？」

「操縦席から出口に向かっている。5分もすりや出るな」

画面では、シャトルの画面の上を丸い点が動いていた。

「誰と一緒に？」

「待て待て…………」

彼がキー・ボードを叩くと、画面に映像が映し出された。

「…………誰か分かるか?」

「…………田向わん」

「えー?」

画面の中で、斎藤と一緒に歩いているのは、紛れもなく葵の両親だ  
つた。

「未来、用心深いお前が…………」

「くつづけないわけないでしょ」

「ですよね」

未来はポケットから機械を取り出し、僕のパソコンに繋げた。

「音量は?」

「75あれば十分」

パソコンを通じて音声が聞こえてきた。

“それで、お体のほうは大丈夫なのですか?”

“ああ、少し、頭痛がするだけだ”

「…………未来、何したんだ?」

「へ？」

「“薬”か“手刀”か“絞め技”か

「…………手荒なことはやつてない」

「じゃ、薬か

未来はさも映像が興味深そうに画面を覗き込んだが、葵の不信感たっぷりの視線は外れなかつた。画面の中では斎藤が演技たっぷりに溜息をついた。

“お嬢さんが無事だと良いんですが……”

“ああ。まさか、あの二人が“反乱分子”とは……”

“…………これは内部情報なんですが……”

“え？”

“実は、彼らの父親は…………そいつたもののリーダーではないかと疑われていたのです”

「ナルホドねえ…………」

翔が呟いた。

「上手いねえ、齊藤君も」

“お嬢さんが無事だといいのですけど……” こんなんなつたのは誰のせいよ!」

葵はそう叫び、襟をガバッと掴んで開き、撃たれた場所を見せた。肩に巻かれた包帯からは血が滲んでる。

「葵ちゃん、結構大胆ねえ・・・・・・」

未来の言葉ではつと我に返った葵は、頬を赤くしながら服を戻した。彼女は、“男の前でそれはないだろ”という感じの格好になつていった。

「な、何よー?」

「え?」

「何見てんのー?」

「いや、俺は別に良いけど、それで物凄くペース乱される奴もいるんだから・・・・・・」

「誰が?」

ちよいちょいと指差した方向には、耳を赤くして画面をじっと見ている翔がいた。必死でカーソルを操作しようとしているが、右手が

握っているのは未来が繋げた盗聴装置だった。

## 第一二三話

### ・・・・・どんだけ？

斎藤は日向夫妻を引き連れ、シャトルから出て行った。

「さてさて、」つむも追いかけなきゃな

「でも・・・・・お前ら、面割れでんじや・・・・・？」

「斎藤“氏”が、俺たちが反乱分子だと報告しただけだ。奴一人が、ね」

「・・・・・まあか・・・・・」

「情報源をぶつ潰したのさ。俺たちは堂々と歩かる。特に南さんはね

全員に盗聴器のイヤホンを配り、パソコンをバックに入れて立ち上がりがつた。

廊下を歩いていると、イヤホンから斎藤たちの声が聞こえてきた。

“ も、参りましょ。本部までほんのちよつとですよ ”

シャトルの発着所はルナ・ドームの本部の中だ。斎藤が言っているのは、おそらく管制室のことと言っているのだ。う。

“ 止まってください ”

別の人間の声が割り込んだ。

“ ここから先、関係者以外の立ち入りは許可されていません ”

“ 僕たちは “ 関係者 ” だ。こちらは日向さん。連絡が入っているだろ？ ”

“ ……それで、キミは？ ”

“ 僕は斎藤だ ”

“ ! ! ! ! ! ! ! 了解した。日向議員、こちらへ ”

音から想像すると、日向さんは半ば強引に係員に引っ張られたようだ。

“ 何をする！？ ”

しかし、係員はそれを無視した。

“ ……日向議員を保護しました！ “ 奴 ” は扉の外です！ ”

“ ……そうか！ よし、 “ ザイン ” を確保する！ お前は日向議員を連れて管制室まで来い！ ”

“ はい！ わあ、行きましょう！ ”

“ な、何事かね？ ”

“あいつが反乱分子のスパイだという情報が、地球からこ  
つちに入りました……”

「流石だな」

声に振り返ると、翔が耳のイヤホンをポン！とはずしていた。

「お前が 地球から送ったんだろ？」

「情報の信頼度は、情報源に依存する…………  
じゃあ、南さん」

「ん？」

「……ここで管制室とコンタクト取つてください」

僕は無線機を投げた。

「？？何処でこれを？」

「そんなの、あの警備員さんから、“貰つた”に決まつてゐるでしょ」

「いっつ？」

「葵を運んでるとき」

「……………じんだけ？」

「まあ、何でも良いですけど、早く連絡とつてくれませんかね？」

ふと機長の向こうを見ると、翔と未来がわざとじりじり自分の財布を確かめていた。

「…………」ひらり 機長の声。応答願います

“南機長！――無事でしたか！”

「…………“協力者”的おかげだ。…………それより、斎藤からの報告は…………」

“地球から、彼がスパイだという報告が…………”

「…………そうか、地球から…………」

“今からおいで願えますか？”

「ああ。すぐに行く」

通話が終った。

「流石あ――」

未来が両手を叩いた。僕もなかなか驚かされていた。意外な演技力に、だ。

「いやいや、この位はやらないと、ね」

南さんは穏やかに笑い、僕に無線機を投げ返した。

「…………おかげで大分楽に入れそうですよ」

「そうかい？」

さすがは“South-Pore”。本当にそう思った。

南機長、隼、翔、葵、未来、それに僕。六人は、大きく開け放たれたシャトルの出入口から出て行つた。

僕たちは、ルナ・ドームに足を踏み入れた。

## 第一十四話 不気味だな

「…………しかし、いつも簡単にここまで来れるとは……」

南さんを管制室に送り、残りの五人がメイン・コンピュータ室へと向かった。翔がこうじぼしたとき、僕たちはすでに部屋の扉の前にいた。

「…………逆に、不気味だな」

隼はそうじつて両側の廊下を窺つた。

「大丈夫ッしょ。“向じつ”の会話も別に疑つたりしてないし」

未来はイヤホンを手で押さえ、ちょっとと頷いて見せた。

まもなく、扉のロックは解除された。

「…………皆、提案なんだけど」

4人は扉に一歩踏み出したところで止まった。

「正面から行くのは…………3人で十分だと思うんだけど…………」

「…………で？お前は何をするんだ？」

「搦め手で攻めよつかと・・・・・・・・

「搦め手?」

隼を傾げた隼に、未来が手を振つて見せた。

「隼くん、気にしないほうが良いわよ。」この人、秘密主義の上、適当に誤魔化すのが得意だから

「ま、そういうわけだ。未来、お前はついて来い」

「・・・・・・・・まあ、いいや」

未来がフウと溜息をついて僕の横に来た。残りの三人はちょっと怪しんでいるように見えたが、おとなしくコンピュータ室に入つていった。

その扉が閉まつた直後、未来が横目で僕を見ているのが分かつた。

「で?」

「え?」

「なんかあんでしょ?」

「秘密主義だつて知つてるだろ?」

「・・・・・・・・はいはい、黙つてついていけばいいんでしょ?」

「やうやう。分かつてんなら聞くよな

未来のとび蹴りを軽くかわし、僕は歩き始めた。

本部の“出入り口”は一つある。一つは僕たちが使った、宇宙空間とつながっている場所、もう一つは居住区と連結している。

僕と未来はそこを通して居住区に出た。

「ふーん・・・・・・・・」

政府の説明とは明らかに違う、お粗末な建物が辺りに広がっていた。壁にはひび、屋根には穴があき、おまけに土台からして曲がっている。

おそらく、災害時の仮設住宅のまゝがまだしつかりとした家だ。

しかも、歩いてくるのはじわだらけのお年寄りばかりである。

その中の一人が僕らを見てねばによつて来た。

「おやあ？珍しいねえ、お若い方を見るなんて・・・・・・

「おじいちゃん、お偉いさんが言つてたのとずいぶん違うね、ここのは

未来の問いかけに老人は目を伏せた。

「まだここはいい方だ・・・・・・お嬢さん、あんまり奥の方には行かないほうがいい」

「え? どうして?」

話すたびに、老人の目は暗くなつてゆく。

「“ルナ・ドーム”に法律はない・・・・・・」

「法律がない?」

「特に奥の方は・・・・・・完全に無法地帯になつてている・・・・・お嬢さんも、ただで帰つては・・・・・・」

老人はそれからさらにはけの分からぬことを呟きながら去つていった。

「・・・・・・・・どうこう」と「

「ルナ・ドームにいるのは、“経済的弱者”が“大半”だつてのはお前も知つてるな」

「うん」

「じゃあ、残りは何だと思つ?」

「え・・・・・・・・? どうかの成金でしょ?」

僕は未来の前で指をふつて見せた。

「残念、違つんだ

「へ？」

「思つたとおり、氣をつけないといけないなあ

「だから何云々？」

僕が振り返ると、未来が2、3歩後ずさつた。

「残りは・・・・・更生の見込みがない、凶悪犯たちなのを」

## 第一一十五話 悪い怖い

「更生の見込みのない、凶悪犯…………？」

「そりゃ。明確な判断基準はないらしいけど、そりゃ 判断された奴がここに送られている」

「誰に？」

「決まってるだろ」

僕は“安全地帯”に向かって歩き始めた。

「正田や」

「ナルホドねえ」

未来は立ち止まり、空を見上げていた。造られた空がその上に広がつていて。ひょっと振り返ると、未来は頭を振りながらつっこてきた。

「作り物の空なんて、ね

「ハハ・・・・・・・・・」

「ねえ、ちょっと

「あん？」

「何処に向かつてゐるの？？」

僕はぐるっと振り返つた。口元が一矢ついているのが分かつた。

「“安全地帯”だよ、妹よ」

「あんせんちたいい？？」

「そう

不信感たっぷりの視線がこすりに注がれた。

「まあかとは思こますけど・・・・・・

「どうした？」

「奥の方」に向かつてるとか？

僕はパパンと手を鳴らした。

「いじめ答――

「いのヤロー――――――

「大丈夫だつて。そろそろ“落ち着いてる頃”だから

「こきや分かると思つよ

「はあ？」

未来が腕を組んで僕を睨んだ。

「私の身の安全は？」

「自分の身は自分で守れ。他人に頼るんじゃねえ」

さらに視線が険しくなつた。

「それで私についてくるように言つたとか？」

「そうさう。お前なら滅多な事じや死なないから」

「シネ！……！」

「おひ、それそれ。怖い怖い」

身構えた未来を前に、僕はスタコラ逃げた。

“奥の方”と“それ以外”にはつきりした区別はないが、どうやら俺たちはすでにそこに入り込んでいたようだ。

“声”が聞こえてきたのは、破壊の跡が生々しい、廃屋の横を通り過ぎたときだった。

「客人が来るとは、珍しいな」

僕らがバツと背中合わせになつて身構えると、何人かの笑い声が響いた。

「ハハ！しかもやる気満タンときた！」

その声は上のほうから聞こえてきた。上を向くと廃屋の一一番でつぺんに若い男が腰掛けていた。

「おうおう、しかも一人はかわいい女の子か！」

「…………かわいいって」

「そんなの何処にも…………イテ……」

思いつきり足を蹴られた。

「歓迎してやるつぜ、皆で」

彼が指を鳴らすと、廃屋の影という影から「つい男がのつやりと出てきた。皆が皆意地汚い笑みを浮かべている。

「へへへへ、かわいがつてやるからな」

「あらあら、か弱い女の子に何人がかりなんだか」

吹き出した僕の脚がさらに蹴られた。

「イテテ…………」

「そつちの坊やは用がないんだけどな

「坊やつて俺のこと?」

「さうだよお、逃げたかつたら逃げても良いであります。ハハー！」

「ヤニヤ笑つてゐる連中を見渡しても、何の感情もわいてこなかつた。

「どうが」うちには用があるんだよ」

「はあ?」

「橘 洋介つて奴に会いに来たんだが」

「橘?」

「別に知らない振りしても構わねえけど、哲が会いにきたつて伝え  
て欲しいな。それで分かるはずだから」

「・・・・・チ、“哲”か。ホントに来るとほな

若い男が飛び降りてきた。

## 第一一十六話 相打ちにならつとも

「…………俺が橘だ」

若い男が唸つた。周りを囲んでいる連中は驚きを隠せない。

「お、お前ら。こいつらは俺の客だ。余計な手出しするんじゃない」

「はあー?」

「そりゃないぜえー!」

「マジかよー?」

野次馬どもが轟々とわめいたが、橘のひとりで辺りは静かになつた。

「…………文句があるなら、俺が相手してやる」

その迫力にほとんどが田を逸らした。しかし、全員がそうしたわけではなかつた。

「説明、してもらいたいね

ひょひつと背の高く、眼鏡をかけた20前後の男が飄々と言つた。橘に睨まれても、口元の笑みは消えなかつた。

「…………俺がここに送られたのは、正田の野郎に喧嘩を売つたからだ」

「喧嘩を売った？」

「“Lookie”という奴と一緒にね」

未来の反応は凄まじかった。電光石火の早業で橘の胸倉を掴み、後ろの壁に押し付けた。

「イテ……！」

未来は無言のまま、彼の喉に手を当てた。ざつやう頸動脈を押さえているらしい。

「お、おい…………！」

周りの荒くれどもは勿論、橘も畠然としてされるがままになっていた。

「知ってるんでしょ！？」

「あ…………あ？」

困惑している橘に、未来が叫んだ。

「“Lookie”の正体だよ！？」

橘は田をぱちぱちさせていたが、だんだんと自分のペースを取り戻しつつあった。未来の手を外しながら、鼻で軽く笑つて見せた。

「何を根拠に…………！」

先程の男は、眼鏡を押し上げながら言った。

「あんたがもし、“Loki”とつるんで動いた、“Odin”なら、あいつの正体も知っているはずだ！」

眼鏡の言葉に彼は驚いたように田を見開いた。

「お前…………何処でその名前を…………!?」

「…………もつぱらの評判よ、“Loki”と“Odin”が国家機密を手にしたって、

橋が一人の間からこっちを見た。

「さうなのか?…………哲

“Loki”が吹聴してた…………らしいぜ」

“吹聴してた”から“らしいぜ”といつまでの短い間に眼鏡も未来もこっちを振り返った。僕は三人の顔を見て溜息をついた。

「おいおい、そんなに睨むなよ」

未来はさっと橋に向き直った。

「で？あなたが“Odin”なんでしょう？」

橋は僕を睨んだまま、鼻から息を出した。

「……………そうだ」

「知ってるわよね？」

「ああ」

「こいつちをじっと見ていた眼鏡が一人の会話に割り込んだ。

「何者だ？」

「細かいことを話す気はない。が、一つ、いい事を教えといでやる」

「……………なによ？」

「……………俺も“L.O.K.i”も、本気で喧嘩を売った。相打ちになろうとも、連中の思惑を叩き潰す」

橋が不思議な目をした。僕はそれを見て頷いた。

僕と橋は同時に咳いていた。

「……………相打ちになろうとも……………」

僕ら以外がいっせいに顔を見合わせたのが見えた。

第一一十七話 撃てやれ

メイン・コンピューター室

「…………あの野郎、何のつもりだ…………？」

隼は首をかしげた。

「さあ？」

「…………哲の考えはよくわかんないわ」

翔は葵の言葉に頷いた。

「…………よくわかんない行動となるべせ…………」

「最後には正しいことになつてる」

「え？」

隼が取り残されていた。後の二人は彼に説明しながら作業を開始した。

「いつもああいう感じなのよ、あの馬鹿

「学校とかでこざいが起きたりすんじやん？教師と生徒とか、生徒同士とかで」

「はあ」

隼も手を動かし始めた。

「皆がいきり立つて、今にも爆発しそうなときこそ、あいつは」

「我関せずって感じでどっちつかずってか、何事もなにかのよつて動いたり、まるで知らない振りをしたりね」

「なんか想像つくな」

「だろ？“何だあれ？”って感じになるだろ？」

隼はくすくす笑った。

「確かに」

「だけどね、いろんな奴をちょっとした言葉とかで操つて、自分の思つたとおりに動かしてんの。勿論、影のそのまた奥の影でね」

「そういうことに關っちゃ、あいつ、天才だね」

翔がウインクした。葵はにこりと笑い、肩をすくめて見せた。

「それでよ。いろいろ問題を複雑にして、こんがらがせたと思つたら、同じやり方でそれを解いたら」

「んで、後から既に話を聞くと、あいつの存在が浮かび上がつて来る」

翔は左の手のひらを右拳で打った。ぱちんと小気味のよい音がした。  
そして明るい声で続けた。

「メイン・コンピューターを“洗脳”したぜー！」

「ナルホド・・・・・・って早い！」

葵も立ち上がった。

「制御システム、制圧！」

「そっちもかい！」

一人は同時に隼を振り返った。

「「隼は？」」「

隼は溜息をついた。

「ふう・・・・・・連中の命令系統への割り込みと、殺人兵器の保  
管場所の検索と、それから・・・・・・」

翔が口笛を鳴らした。葵も感心して目をぱちくりさせた。

「すごいわね、まだあるの？」

「・・・・・・ルナ・ドームの本当の目  
的を！」

「分かったのか！？」

その時、ドアが蹴破られた。

「動くな！――！」

三人が振り向くと、五人の役人が（驚くべきことに、武装警察ではなかつた）拳銃を構えて立つていた。

「…………あちゃあ、捕まっちゃつたか…………」

隼が忌々しげに呴いた。翔が両手を挙げて見せたが、薄笑いを浮かべていた。

「…………あんたら、撃てんのか？俺たちの後ろには、大事な大事な…………げ！？！？」

一番後ろに立つていた男が、なんの躊躇いもなく、翔と葵の間のコンピューターの画面の打ち抜いた。三人は考えるゆとりもなく、床に伏せた。

「撃てるさ」

どこかで聞いたことのある声が嘲り、そこにある画面を片つ端から打ち抜いた。その銃声と頭の上に降りかかる破片が、三人の頭を中から外から打ち叩いた。

男はずかずかと部屋の中に踏み込んできた。

「斎藤さん！――」

「心配には及ばん、どうせここつら丸腰だ」

「しかし……」

・・・・・・斎藤・・・・?

目の前に影がかかり、葵は顔を上げた。その男の顔を見て、彼女は飛びのく。

「何であんたが・・・・・・！？」

「これは、またお会いできて光榮ですよ、『向日葵』さん？」

斎藤の笑い方は、常人のそれではなかつた。青ざめた葵は何かないかと後ろのほうを手で探つた。

「…………おこおこ、あんまりなめんなよ?」

彼は自分が撃つた葵の左肩を蹴った。

「キヤー！ー！」

彼女は仰向けに倒れた。そこで斎藤はさらにその肩を踏みにじつた。

「・・・・・あ“あ”あ・・・・・・・・」

「葵！」

翔が立ち上がった。斎藤は彼に目をやつた。

「余計な真似、すんなよ！」こいつを殺されたくなかったらな

斎藤の足はまだ動いていた。

「止めるよー。」

「…………お前、俺に命令できる立場だと思ってんのか？」

斎藤はさらに力を込めた。葵の悲鳴が上がる。

「わ、分かった、止めてくれ！」

彼はようやく足をじけた。が、葵が息を継ぐ暇もなく、その髪を引っ張つて立たせた。

「痛！……！」

「テメエー！」

斎藤は、一人の声には耳を貸さず、葵の腕を捻りあげた。

「さて、もう一人も、出てきてもうおつか」

葵のこめかみに銃口が当たられたのを見て、隼は無念そうに立ち上がりた。彼はいつの間にか斎藤の背後に回っていた。斎藤は気配を感じて振り返った。

「なー？」

それでも、隼を見たときの斎藤の反応は大きすぎた。

「何故だ！？」

「「「は？」」「

斎藤は葵の腕をさらに捻りあげた。

「痛！……やめ……」

「石井 哲はどうだ！？！？」

葵は腕が折れるような 実際折れそうだったが  
一つ、僅かな可能性が残っていることに気付いた。

痛みの中、

## 第一一十七話 撃てぬや（後書き）

感想を頂けると、作品の調子が向上するよつた気がしています！

わあ、盛さん、憐れな作者に感想を（――）

## 第一十八話　延べ、十一人だな

「…………」

斎藤は葵の腕をさらに捻った。

「何処だ！？」

葵は何とか声を絞り出した。

「…………“Good night”——」

瞬く間に光が消える。

「ナツ…………？」

その驚きによつて出来た一瞬の隙が、命取りだつた。

葵は斎藤の腕を振り解き、まず肘で鳩尾に一発。さらにその隙を広げる。

くわえて右の拳を振り向き様に顎に。

仕上げは、右の上段蹴りを全く同じ箇所にかました。

どのタイミングでかは不明だが、彼は床に倒れる前に氣を失つてい

た。

全ては暗闇の中で行われた。

電気が復旧された時。残りの四人は何かする暇もなく、両手を上げさせられた。

「黙つて言つこと聞かないと、斎藤の頭を吹っ飛ばすわよーーー！」

と叫んだ少女によつて。

「・・・・・・・葵に助けられたな、俺たち」

翔がコンピューターのコードで役人たちを縛りながら言つた。

「ああ。あの“仕掛け”はいつやつたんだ？」

隼も斎藤を事の他きつく縛りながら不思議そつに首を傾げる。葵は溜息をついた。

「私じゃない。哲がやつたの」

男二人は顔を見合わせる。葵はまたしても溜息をついた。手はすばやく動き、必要以上にきつい結び目が出来上がつていた。

「やっぱ、踊つてるだけなのかな。掌の上で

「おそれぐ、な」

翔は諦めたように笑つた。隼は顔をしかめ、立ち上がつた。

五体のコード巻きの人間が完成していた。

“奥の方”

「さあ、役者は揃つた」

「役者？」

「まずは“向日葵”それに“South-Pore”。裏切り者の  
ザイン<sup>ル</sup>に、優秀なハッカー“Wildcat”。そして“Thor”  
…・・・・・」

“Thor”？あの、一時期有名になつた、ウイルスばら撒いた奴でしょ？そんな奴が…・・・・？

「黙つて聞けよ！…・・・」に居る“Odin”に、地球に  
いらっしゃる正田<sup>ラグナロク</sup>こと“Ragnarok”、羽下<sup>ロギ</sup>こと“Logi

”

「隼ならここに居るでしょ？」

「大馬鹿だよ、お前は」

僕が下げる頭の数センチ上を未来の手が通過した。

「地球にあいつの兄貴がいんだよ！えっと……何処まで行つたっけ？」

「隼の兄貴まで！――！」

「ああ、そうそう。+筒井警部補<sup>フジイケブ</sup>が“Fenrir”。それに、どこのかにいるであろうと予測される“Loki”と……」

未来は再び出てきた知らない名前は聞き流したが、“Loki”には反応した。

「“Loki”、か。お兄ちゃん正体知つてんでしょ？実は

「妹が知りたがってるよ。言えばいいじゃないか」

眼鏡の男が口を挟む。

「おい、“Tarsier”（メガネザル）。黙っていたほうが得策だぞ」

飄々としていた男がたじろぐ。

「何故俺を…………？？」

「さあ？俺が知つてんのはそれだけじゃねえぜ？“Heimdal”<sup>ハイムダル</sup>」

僕は未来を振り向いた。

僕と彼女がはたとにらみ合ひ。

「延べ、十二人だな」

“Odin”がふふんと鼻を鳴らした。

## 第一十九話 馬鹿な真似はよせ

地球

正田は官邸に悠々と入つていった。秘書がその後ろから追いかけてくる。

「總理、お電話です」

「電話？誰だ？」

「羽下 兼です」

「…………ほう」

正田は携帯電話を受け取つた。

「何かつかめたのかね？」

電話の向こうの相手の言葉を聴き、正田の顔色が変わつた。

「…………それは…………君等の宣戦布告になるのか  
ね？日本に対する…………」

秘書が顔をしかめ、耳を澄ましたが、会話は聞き取れない。

「その両者に違いはあるのか！…………よし、いいだろ  
う。君等が平和に暮らせる時間は終つた、と言つわけだ」

正田が電話を切つた（秘書の田には一方的に切つたよつて見えた）。

「總理？？」

と、彼は突然携帯電話を壁に投げつけ、破壊した。

「どうされたのですか！？」

「なんでもない」

正田のこめかみに青筋が立つてゐるのを見逃す秘書ではなかつた。が、それを指摘するほど愚かでもなかつた。

「羽下、筒井の二人を逮捕しろ。国家反逆罪だ」

「そんな罪状は・・・・・・」

「ないのは分かつてゐるーーだから、とにかく何か被せて警察に追わせろーー」

「・・・・・・はい」

「今日ははもう、貴様に用はない。早く帰れ」

「しかし・・・・・・」

「失せると申つたんだ！？！」

秘書は抵抗をあきらめた。

「では、失礼します・・・・・」

正田は彼の厳かな礼には目もくれず、さっさと奥の部屋に入つていった。

正田は即座に命じた。

“羽下だ。優先度は石井哲、未来と同等に”

“かしこまりました”

“それで、まだつかまらんのかね？” 悪戯坊主は

“…………ど二かで死んでるんぢゃないかとも疑つてゐる  
ですが・・・・・”

正田は溜息をついた。組織が発足してから、今まで「こんなことはなかつた。まさか、まだ10代のガキにてこずるとは・・・・・・

“それで、”  
“Lokiは？”

“…………やつのアジトを突き止めました”

“ほう！”

正田はガツツポーズをしかけたが、男の暗い口調に違和感を覚えた。

“喜べませんよ、こちらは”

“どうこいつだね？”

男は苦々しさを前面に出して言った。

“そこにあつたコンピュータのモニター全てに、‘ダメ’発見おめでとう”と・・・・・・！”

“・・・・・・・・・・・・・・・・・・”

“しかし、複数の人間の髪の毛を採取しましたので、そこから・・・・・・”

“樂觀的觀望は、成功したときに聞かせてくれ”

正田は苦々しい気持ちで電話を切つた。

「・・・・・・役立たずめ！－」

本部 約1時間前

「接続完了。兼、いつでも出来るぜ？」

「おひ」

すでに人払いを済ました彼らは、昔の悪戯を再現するような心持でコンピュータの電源を入れた。筒井は羽下に聞いた。

「で、何を調べるんだ？」

「決まってるだろ？あの正田サマサマが、何をたくらんでるのか、だよ」

「知らねえ方が良いと思つんだが」

羽下は昔の相棒を振り返り、ニヤツと笑った。

「だからこそ、知りたくないんだろ？何か国家機密を握れるかもな・・・」

彼が画面に戻った瞬間、後ろでガチャツと音がした。

「・・・・・何のまねだ？」

筒井警部補は銃を構え、兼の頭に突きつけていた。

「言つたろ？俺は堅気だと・・・・・馬鹿な真似はよせ。今なら、俺が昔のよしみで見逃してやる」

兼は背後で銃を構える親友に指を一本立てた。中指・・・・・じゃなく人差し指を。

「一つ、教えて欲しいんだが」

「残念だが、俺は知らない」

筒井は首を振つたが、兼は指を振つて見せた。

「お前のことだよ、筒井。何があつた？」

「・・・・・お前には関係がない・・・・・！」

突然、“声”がした。

“珍しいこともあるもんだ！！”

その“声”はコンピュータから聞こえてきた。が、まるで誰かがその後ろでしゃべっているような、極めて人間らしい声だった。

““Loopy”と“Fenrir”が口論してるなんて、な！”

自分のコードネームが知られている。困惑した一人は、身動きすら出来なかつた。

第三十話 なんとも思つちやいねえ！――

「誰だ・・・・・・・・！？」

“声”が答えた

“  
“  
L  
o  
k  
i  
”  
た  
”

本物力！（？）

羽下の囁いかけの後、鼻を鳴らす音まで聞こえてきた。

「・・・・・何のようだ?」

“ せう、怒るなよ “ Fenrir ” 。俺はただ、あの正田総理を信  
用するなって言いに来ただけなんだから ”

筒井は仇を見るような目でコンピュータを睨みつけた。

「…………だからと言つて、お前の側につくと思つたのか？」

「お二、シシ・・・・・・」

“ 筒井サン、あんたの婚約者の件、俺は絡んでないぜ？”

筒井は銃を構えてコンピュータを撃ち抜こうとした。羽下がその手を押さえる。すると案外簡単にとめることが出来た。

「…………ツツ、何の話だ？」

「…………詩織は同僚だった。一緒に“ロクイ”を追つていた」

陥しかつた彼の顔が、さらに迫力を増した。

「だから襲われた。心も体も滅茶苦茶にされて、警察が居場所を見つけ出すまで、一ヶ月も縛られたまま放置されていた」

「ハイアンヤ婚約者って…………」

「そうなる予定だったんだ。拉致された夜に、な」

羽下はちよつと呻き、さりに聞いた。

「死んだ、のか？」

「…………行方不明だ」

おそらく、自殺だ。筒井は心の中で、そう付け足した。彼は、“それ”を見て、詩織が何をされたかを知った。とても生きてはいけないだろう……

「どうして“ロクイ”が絡んでくるんだ？」

「その部屋においてあったパソコンのモニターに、“ロクイ”を追

つた罰だ。次はない”と出ていた「

そして、そのパソコンの中に、暴行の様子を一部始終収めた映像が・  
・・・・・

“全く、とんだ言いがかりだぜ！－！”

“声”が怒ったように叫んだ。

“俺は警察なんかなんとも思っちゃいねえ！－女刑事を襲つて検査デカ  
を止めやせる！？そんな非道なことが出来るかつ！－！”

「・・・・・貴様・・・・・」

筒井は再び銃を構えかけた。

“そんなことやるのは、”Ragnarok”ぐらいだ！”

「ラグナロク？」

羽下が驚いた顔で顔を上げた。筒井は一拍遅れてその名前を聞いた  
場所を思い出す。

「・・・・・あの、総理直下の極秘プロジェクトのチームか・  
・・・・・？」

“そつか、表向きにはそんな説明されてるんだ？”

今度は羽下が憤っていた。

“ ‘Loki’ 、貴様・・・・・・・・

“ ‘Loki’ そう怒るなよ。あれが暗殺チーム  
だって知ってるのがそんなに意外か？”

「総理大臣直下の・・・・・・暗殺チーム？」

“ そう、おそらく、科学者の石井夫妻は彼らに殺された。今はその  
一人の子供と俺のことを追つてゐるはず”

「何！？」

筒井は何か言いかけたが、羽下が遮つた。

「何故お前はそんなに詳しい？？」

“ ‘Loki’ は悪戯を仕掛けた子供のように嬉しそうだった。

“ ‘Loki’ だから、じゃ不十分？”

「あまりに真実を知りすぎているな・・・・・・・・

“ 筒井サン、目を覚ましてください”

“ ‘Loki’ の声は打つて変わつて真面目だった。

“ 多分、詩織サンは知りすぎたんです。だから、‘あいつら’ に襲

われた”

「どういうことだ・・・・・・・・？」

“俺が馬鹿だつた・・・・・・・・・・・・”

二人は一人の人間を見るような目で機械に見入っていた。

## 第三十一話 わあ、知らないな

「“じりこり”とだーー？」

“詩織サンは『じりこり』たんだ。俺が、正田の企みを暴くために誘導し  
“みつけていた”こと”

筒井と羽下は不安そうに顔を見合わせた。

“だから、俺とコンタクトを取りうつとした”

「ちよ、ちよ、ちよっと待て」

筒井が頭の周りの蠅を払うような動作をした。

「正体もわからん奴にコンタクトって…………じりこりって？」

“なめでもらっちゃ困るよ、筒井サン”

““LoKi”は面白いに言つた。

“俺と話したけりや、ネット上で一聲俺を呼べばいい”

「はあ？」

““LoKi”、来てくれ”とでも言へば、1・2週間以内に行  
つてやるよ”

「それが限だとしても、か？」

羽下がせせら笑つたが、“Loki”的声は、それをさらに嘲つた。

“あんたらや“Ragnarok”が俺を捕まえるとしたら・・・  
・・  
”

“俺が自首したときだけだ”

あまりの自信に一人は声も出せなかつた。

が、それが眞実であることに、気付いていた。

“それで、だ。俺は手に入れた情報を彼女に伝えた。ルナ・ドーム  
が殺人兵器である事、虐殺が目前まで迫つてゐる事、等等な”

羽下がしかめつ面で言つた。

「・・・・・・・是非聞きたいんだが・・・・・・・

“ん?”

「なぜお前はそんな行動をとる?」

“さあな”

“Lotto”が肩をすくめる気配まで伝わってきた。

「面倒なだけだらう？そんなお節介焼いても

“俺は、正田の野郎が気に喰わねえ。というか、あいつをこのままにしたら危ないと思つたから、動いたんだ”

筒井がさらに突っ込んだ。

「それは、お前が捕まるという意味か？」

“違つね。さつきも言つたろ？俺が捕まるのは自首したときだけだつて”

その言葉の一句一句に多少の嘲りが込められていた。

「じゃあ、どうこう……」

“地球上の全生物が危ないって言つてん  
だよ”

「…………？」

“一部のお偉いさんを除いてな……”

二人は彼の憎々しげな声を聞き、自らの耳の届く範囲以外で何かが動いていることを知った。

「…………その情報を知つてすぐ、詩織が襲われた、というわけか」

“一週間後だ。恐らく、誰かに伝えたんだろう。用心しろといつておいたのに……”

筒井は無表情で尋ねた。

「その、“誰か”も知つてるんじゃないのか??」

“…………まあ、知らないな”

「…………お得意の独り占めかい?」

羽下が笑つた。あきれているというか、馬鹿にしているというか、そんな笑い方だった。

“…………確証がないことは話さないポリシーなんだ”

「ああそうですか…………で?俺たちに何をさせたいんだ?  
??」

“ずいぶん单刀直入だな、“ロゴ””  
ストレート

“‘駒’が考え出したら混乱が起る。だろ?“ロゴ”さんよ”

“‘駒’?”

「そりだ。俺たちはお前に取っちゃ将棋の駒だろ?」

“俺は将棋もチェスも嫌いだ”

“Loki”は笑っていた。

“見てるだけだったらどっちでもいいけどな”

羽下は気付いた。

“Loki”は競技者プレイヤーではない。

究極の傍観者であり、かつ、気まぐれな手出しもする・・・・・  
神の視点で世界を見ているのだ。

全ては彼の思つままに・・・・・

## 第三十一話 だらうね

“じゃあ、単刀直入に言おう”

「…………ああ、頼むぜ」

“俺は誤解が解きたいだけだ”

“Loki”は飄々と言い放つた。二人は狐につままれたような顔をしている。

「…………は？」

その反応を見たからか、“Loki”は説明を始めた。

“別にあんたらが正田側タヌキにいても、こっち側タヌキま、言つなればキツネ側、だな にいても、俺たちが失敗すれば死ぬ。だから、仲間になつてももらいたいわけじゃない”

「…………キツネとタヌキの化かしで俺たちが死ぬのか？」

“死ぬね。世界の半分以上が死ぬ。下手すりや全滅だ”

筒井が眉をひそめた。

「…………物騒だな…………何が起こるとしている？」

“…………お偉いさんの壮大な計画さ。ま、とにかく、俺は

濡れ衣で恨まれたまま死ぬのは嫌だから、わざわざここまで来た  
わけよ”

羽下がパソコンの画面をにらみつけた。

「理解できねえな

“だろうね”

“「○k.」はせせら笑った。“あんたには理解できなーだんつを  
”とでも叫ぶよう。

羽下はむっとした様だが、筒井は別の「ことば」をとりいでいるよう  
だった。

「ひとつ、教えてくれないか?」

“一つじゃなくともいいぜ。ただ、答えられねえかもしけねえけど”

「…………知っている、とは思ひ。ただ、確証はない

“…………

「どうだ?」

“…………ルナ・ドーム”

「何!?’

羽下は怒りを忘れるほど驚いていた。

“・・・・・繰り返すが、確証はない。ただ、そこしか考えられねえってだけだ”

筒井は驚くほど冷静さだった。

「・・・・・正田か？」

“それは間違いない”

「詩織は生きてるのか？」

“恐らく。殺すつもりなら、最初に拉致った時にそうしてゐる”

「・・・・・詩織を殺さない意味は何だ？」

“・・・・・それが分からねえんだ”

筒井は低い声でうなり、考え込むように視線を落とした。

「餌として使うつもりじゃないのか？」

羽下がポソリと言つた。筒井がゆっくりと身を起し、

「そのために・・・・・・・・？」

“相当な大物を狙つてるってわけだ”

二人は頷いた。

「まづは詩織の居場所を突き止められて……」

「ルナ・ドームに潜入できる奴じゃないと……」

11

筒井は画面に食らひこつゝようにパソコンをつかんだ。

「おい！哲の居場所は！？分かるか！？」

羽下が怪訝な顔をした。

哲  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
?

「やうだ！おこ！」

瞬の沈黙の後、茫然とした声が聞こえてきた。

二人の間の理解が読めない羽下が怒鳴った

「ルナ・ドームにあの悪ガキが！？ おい、どういうことだ！？」

「弟なんだ……」

「弟!? お前のー!?」

羽下は目を丸くして、髪の毛をかきむしる相棒を見やつた。

正田が狙つた獲物が判明した。

第三十一話　ま、甘迺れぬかどな

沈黙を破つたのは筒井だつた。

「…………おい、兼」

「…………うした」

「力を貸してくれ」

羽下は訝しげに彼の顔を窺つた。

「…………何をする気だ」

「そいつは“Loki”に聞いてくれ」

“おい、ちょっと待て”

“Loki”的声は少しにらつこでいるよつと聞こえた。

“俺は思つところ従つて動く。それに他人を巻き込むつもりはない”

「よべ三つ巴」

羽下が呟いたが、“Loki”は聞こえなかつたかのよつと続けた。

“だから、今のところ安全なお一人さんにやつてもう仕事はねえよ”

「…………じゃあ、俺も思つてひに従つて動けばいいのか？」

筒井が静かに、だが力強く言つた。

“…………まあ、そういうことになるかな”

「…………改めて言つ。兼、力を貸してくれ」

羽下は躊躇つことなく頷いた。

「何する気か、教えてくれるんだろうな？」

「正田を暗殺する」

あまりのことに“ロクエ”も羽下も言葉を失つた。

ルナ・ドーム“奥の方”

“十一人目”的者に睨まれ、少々背筋が寒くなつていた。

「…………どこので知つたの？」

「企業秘密だ」

「吐け」

「やなこつた」

未来は僕の首を絞めたがってるかのように、指を曲げ伸ばしていった。

「………… 橋、例の在り処、分かつたか？」

僕の問いに橋はニヤツとした。

「愚問だな。ここに送り込まれた連中、ほとんどどは3年もすればシヤバに出ちまう知能犯ぞろいだぜ？」

未来は首を傾げた。

「………… 確か、“更生の見込みのない凶悪犯”が送り込まれたんじゃないの…………？」

「“正田が選んだ”、な

「あいつにとつて、怖いのは殺人鬼や、強姦魔じゃない」

「本当に恐ろしいのは、“Odin”みたいなハッカーとか、眞実に気付く恐れのある知能を持った連中だ。ずっと捕らえておくことも出来ず、かといって殺すわけにもいかない」

“Tarsier”がため息をついた。

「で、始末するために送り込まれたってわけだ」

「ま、甘迺いのナビな

“Odin”が鼻で笑つた。

「俺たちがその名簿を作り変えた」

「つ、作り変えた・・・・・・・・?

「おう、じつちの都合に合わせて、な・・・・・・・ちょっとといかれ  
た輩を外すだけだつたが」

「・・・・・・・じゃあ、私たちがここに来た時“優しい声”をかけ  
てくれた“紳士”連中は!?’

未来は周りでやらしい笑みを見せてる男たちを指差した。

「ああ、あれはホントの“凶悪犯”だ

「お嬢ちゃん!俺たちが何やつたか聞きたかつたら、ベッドで話し  
てやるぜえ!」

野次を飛ばした男は下品に笑つたが、3人(僕、未来、橘)の一睨  
みで黙つた。

「さすがにまともな知能犯だけじゃ名簿を埋められなかつたからな。  
わざわざ俺が来たわけだ」

“Odin”は不敵に笑つた。

「・・・・・・?

「こいつ、あの荒くれどもをまとめるだけの力があるんだ。武力も、知力も、な」

「哲、そんなにほめるなよ、照れるだろ」

そうは言つていたが、当然の評価を受けているとしか思つていよいだ。

## 第三十四話 今度こそ、無理だな

僕はなせる限りをつくして皮肉っぽく言葉を発した。

「ほんじゃあ、まあ、そろそろ案内してもらえますかね、“O.d.i.”様様？」

橘は目を細めた。

「おいおい、こっちは大変だったんだぜ？もう少しつと“敬意”つてのを示せねえのか？」

「ええ？これ以上？？」

「…………分かった分かった」

「…………お兄ちゃん、いつたい何を探してるの？」「元軍の機密でもあんの？」

僕は肩をすくめた。

「恐らくあるな。だけど、そいつは“あの”三人の役目。きっとやうそ見つかる頃だ」

「哲、こっちはだ」

橘がもう歩き始めている。僕は歩きながら続けた。

「俺の探しものは、俺か、未来かしか探さ

な  
い  
も  
の  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

未来はびんと来ないようだ。

「姉貴だよ」

後ろで息を呑む音が聞こえた。

本部のある廊下

「まったく、何で斎藤が…………？」

葵が頭をぶんぶん振つた。隼は躊躇いがちに咳いた。

「……私がいいか、やがて脱出した風うかい」と思つた。

「  
だめ」

葵はきつく彼を睨む。

「“South-Pore”を助けなきや！」ね。はいはい・・・

翔もあきらめたよついに呟いた。

齊藤が自由といつゝとは、南が危険な立場にいることを、火を見るより明らかにしている。

葵は彼の救出を頑なに主張した。後の二人がぼそぼそと、“もう死んでるかもしない”と言つても、聞く耳を持たず、“じゃあ、私は一人で行くから!”と言つて放つた。

「一人もそんなことをさせるわけにもいかず、ついてきていろ、というわけだ。」

「でも、隼

「んあ？？」

彼はいかにもめんどくさいふに返事をした。

「ちょっと…………ルナ・ドームの本当の目的って？」

隼は言葉を選ぶ間をとつた後、重々しく告げた。

「…………居住者を殺すのに、核ミサイルは必要ない

翔の声が掠れた。

「か、核ミサイル？？」

「そもそも、『中の人間を殺す』だけなら、ただ、空氣の漏れる穴を作るだけでいい」

隼は無表情だった。

「せいぜい使つても細菌兵器だ。というか、それがベストかな。施設も壊れねえし、『後始末』がしやすい」

葵は「ぐく」と唾を飲んだ。

「でも、核兵器だ。しかも、大きさを考えると…………」

「動くな！！！」

今度こそ、無理だな。

隼はぐるりと周りを見渡した。

10人の武装警官じゃあ、さすがにこの娘でも勝てない。

彼はそっと肩をすくめ、ゆっくり手を挙げた。

「おとなしくすんのが無難だよ、お一人さん」

体を硬くしていた二人は隼を見てあきらめたよつこため息をつき、  
彼に倣つた。

「あ、そういう。大きさの話だったね？」

彼は手錠をかけられても、冷静だった。

「ありやあ、地球の半分はぶつ飛ばせる大きさだよ」

今のところ、この意味を理解しているのは隼一人だ。

少なくとも、今、この場の中では・・・・・・・・

## 第三十五話　　ただの鎌かけよ

正田は暗い所に、一人で座っていた。

円形の部屋の真ん中に。目はじつと閉じられ、何かを祈っているかのような表情だ。

「・・・・・」

かすかな振動を感じ、彼はスイッチを押した。

パツと正面の壁がディスプレイに変わった。

“ “ F・F ” 主要メンバー3人を拘束。残りは石井 哲、未来等のみ。二人の姿をルナ・ドームで確認済み”

「ほつ・・・・・ 分かつてていると思うが、殺すな。どうあっても、

石井 哲や橘 洋介に吐かせなきゃならない」

彼の顔がいつそう残忍になつた。

「 “ L o k i ” の正体を・・・・・！」

ふっと画面が暗くなる。

その残像が消える前に、彼は別の振動も感じた。

テレビ電話だ。

画面に映つた顔を見て、正田は薄笑いを浮かべた。

相手は、アメリカ大統領。彼も、同じように笑つた。

### ルナ・ドーム“奥の方”の更に奥

この辺りになると、飾り付ける必要も感じなくなつた政府が、適當に「いやいや」いやした建物を作つただけになつてゐる。

「…………ひつどく…………まるで小学生の工作ね」

未来の意見はかなり手厳しかつたが、別に外れてもいなかつた。

「この辺になると、別に変な輩も入つてこないし、しつかり作る必要もないんだよ」

“Odin”はそういうて、近くの家の壁を蹴飛ばした。彼が一步下がつたとたん、メキメキという音がして、家が崩れてしまつた。

「…………ひでえな、ホントに…………で、どの辺りなんだ？」

「ああ、もう少し先に、何か地下の空間への入り口があるらしいんですけど…………」

「へえ…………形状は？」

「お兄ちゃん、設計図ー。」

“なるほどー”と思い、バッグに手を突っ込んだ瞬間、ふと思つた。  
「…………なんで、未来がそのことを知つてんだ？」

睨みつけたが、済ました顔をされただけだった。

「ただの鎌かけよ」

僕はしじぶしじぶパソコンを取り出し、立ち上げた。

表示された設計図を見て、“Odin”が口笛を吹いた。

「すっげえーおい、これなら、俺がここに来ることなかつたんじゃねえの？？」

「じょうがねえだろ

自分の声が相当暗かつた。

「親父が勝手に渡してきたんだから」

程なく、入り口は見つかった。隠す『氣』があつたのかもしれないが、途中でその必要がないことに気付き、中途半端に投げ出した、といった感じだ。

地下へ続く階段を下りていくとき、誰も口をきかなかつた。

センサーが俺たちを感知して、だんだんと明かりがともり、通り過ぎると消えていく。

長い廊下を、光とともに歩いていた。

最後に、僕たちはスタジオのような部屋にたどり着いた。

「…………」

ガラス張りの向こう側に、さら『ガラス張りの四角い部屋がある。こちらについた光で分かるのはそれだけだ。

“・・・・・久しぶりね、人が来るのは  
スピーカー越しに、懐かしい声が聞こえてきた。

## 第三十六話 ひとととおなづかよつ

“何か用?”

未来はおでこをガラスに押し当て、ガラス張りの中の人影を確認しようとした。息でガラスが曇る。

「…………お姉ちゃん…………」

“え!?”

「…………夢じゃ、ないよね…………?」

“未来!?”何でここに…………”

「その説明は後でする」

“哲!?”

「そうだよ。まずは姉貴を出さないとな

“…………どうかな…………このガラスの外はね、毒ガスで満たされてるの。単純だけどいい手よ。こつちは絶対に出られない”

“毒ガス?…………まあそんな感じだらうとは思つたけど…………息止めいくつて手は…………?”

“皮膚からも毒が入るから、不可能”

「ガスを放出出来るかな？」

姉貴は大きくため息をついた。

“それはそつちで調べることでしょ”

まあ、もつともだ。

僕は設計図を表示した。皆もそれを覗き込む。

未来はまだガラスに張り付いていた。

「お姉ちゃん、入れられてからどのくらい？」

“・・・・・8ヶ月、かな？”

「ずっと一人？」

“まあね”

視線を感じて顔を上げると、未来がじつとこっちを見ていた。

「・・・・・大丈夫だよ。な？姉貴」

“何が？”

「孤独は人を狂わせるって言つけど、姉貴は大丈夫だろ？」

“絶対、死ぬわけにも、狂うわけにもいかないの。まだ、ね”

“Odin”が急に声を上げた。

「哲、あつたぞ！通風孔だ！」

「ビ」につながってんだ？」

彼は画面を指でなぞった。

「・・・・・・・・ “外”、だな」

「よし、じゃあ、とつとと片付けよう」

未来以外の3人が管理用のコンピューターに向かつた。

“Tarsier”が口笛を鳴らした。

「・・・・・・・・どうした？」

「このガス、すごいな。皮膚から入んのはもちろん、ものすごい毒だ。数ml 気体でだぞ 致死量だとさ！」

「“サリン”か？」

「いや、そいつをもうちょっと強力にした代物だ」

僕もついつい口笛を鳴らす。

「いやはや、 “Ra壱壱壱” も流石だね」

「ラグナロク?」

未来がこちらを振り返った。記憶の中を探っているようなしかめつ面だ。

「正田様様直属極秘開発組織」

「ああ、それで……」

「暗殺と兵器の開発をやるにはもつてこいの位置、だな」

“Odin” が呟いた。

その時、ガスがすべて排出され、換わりの空気が満ちたことを知らせるブザーが鳴り響いた。

“…………もう、出て良いの?”

「ああ。今、そのガラス箱を開けつから」

“Tarsier” に合図すると、彼は領いてコンピューターのキーボードを一、二叩いた。

みなが息を殺して、ガラスの向こうの闇に目を凝らした。

音もなくガラスがすべり、中の人影がするりと外に出てくる。

人影は一瞬、自分の牢屋を振り返った後、半ば急ぎ足で出口に向かつて歩いた。

ショーツという音とともに、重い扉が開き、姉貴、石井 詩織が部屋に入ってきた。

## 第三十七話 駄は言わないで

「…………なんか、雰囲気変わった？」

僕の口からそんな言葉がついて出た。

「ちょっと筋肉ついただけよ」

「…………ちょっと、ねえ…………」

体のどの部分も、服越しに筋肉の走りが見えるほど鍛え上げられていた。未来が姉貴をつつく。

「うわあ…………かたあ…………」

「何せ、暇だつたし、いつか役に立つと思つてね」

姉貴はウインクすると、力こぶを作つて見せた。未来がまた感嘆の声を上げる。

「“Tarsier”、哲、お前らの力こぶと比べてみねえか？」

“Odin”は愉快そうに笑つた。残念ながら、僕たちには敵いそうにない。

「パス。勝てる勝負しかしない性質でね

「同じく」

姉貴は一ヤツとした後、ちよつと表情を曇らせた。

「でもね、ちよつと問題があるのよ…………」

僕はすかさず茶化した。

「男が寄り付かないとか？」

“Odd”も乗ってきた。

「いやいや、それはもとか…………グエーー！」

彼女の手刀が僕ら一人のどを打つた。激しく咳き込む僕らには目もくれず、詩織がため息をついた。

「筋肉つて重いから体重が増えちゃったのよね…………」

その辺も色々と突っ込みたかったのだが、それどころじゃなかつた。

「あ、そつそつ。哲」

僕が身を起こすと、そこへやかな姉が田と鼻の先にいた。

「…………何？…………」

強烈なストレートが左の頬に炸裂した。

僕の体が後ろの壁にぶつかって跳ね返り、地面に転がつた。

「お姉ちゃん！？！？！」

未来がパツと僕のそばに駆け寄ってきた。“Tarsier”もま“じめ”僕と姉貴を交互に見ていた。

「お兄ちゃん、大丈夫…………？いつたい何なの！？」

姉貴は肩をすくめた。

「私は別に 哲 の セ イ に は し て な い ん だ け ど、  
哲 は こ う で も さ れ な き や 気 が す ま ない で し ょ。 で も、 も う チ ャ ラ。  
忘 れ な よ」

「何の話よ？」

未来が手を借してくれながら、訝しげに僕を覗き込んだ。立ち上が  
つたとき、頭がぐらぐらした。

「…………ああ。でも、もう一発殴ったほうが良いかもしれ  
ない」

無視されて未来がむつとしているのが分かつたが、僕は構わず、真  
っ赤な唾を吐き出した。姉貴がニヤリとして“へえ”と相槌をうつ。  
心臓の辺りがきりきりした。

「姉貴、『じめん。親父とお袋が殺された』

詩織の顔から笑みがゆっくり消えていく。

「…………え…………？」

「親父が、この、ルナ・ドームの設計図を、命と引き換えに……  
・・・！――！」

また左の頬にこぶしが激突した。さっきより激しく僕の体がバウンドする。

「お姉ちゃん！」

未来が間に割り込んだが、詩織はそれを意図も簡単に押しのけ、僕の胸倉をつかんだ。僕はそのまま持ち上げられ、壁に押し付けられる。

彼女は後ろで呆然としている三人には聞こえない声で言つた。

「…………正直に答える必要はない。ただ、嘘は言わないで。  
…………あんた、それ、お父さんから受け取  
る前から持つてたんじゃないの？」

僕は目を伏せた。

それで姉貴は手を離した。

別に怒るわけでもなく、泣くわけでもなく。

ただ、手を離した。

気付いたときにはもう遅かった。

我が妹 腹立たしいほど僕に似ていて、抜け目がないクソガキの“耳”が、僕にも仕組まれていることを迂闊にも忘れていたのだ。

未来は薄目で僕を見ながら、右の人差し指で唇を叩いている。

「……………“Odison”、聞こえた？」

「……………いや。未来……………ちゃん？君は？」

「“ちゃん”要らない。……………私は聞こえた」

目がスッと開く。

「……………なんかぞ、“お父さんからもひつ前から設計図を持つっていた”といつよつな意味の言葉が聞こえたんだけど」

僕は黙つて視線を受け止めた。未来は続ける。

「……………多分、ルナ・ドームの設計図つてのは、史上最大の国家機密だよね？絶対に知られちゃいけないもの……………お父さんは、仕事柄、持っていてもおかしくないけど、24時間監視されていた……………」

“…………何でお前がそれを知ってるんだよー。”

声に出せるわけもなく、心の中で叫んでみる。

「…………でも、その監視状態になかったお兄ちゃんが自分で持つてゐて事は…………」

“Tarsier”が目を見開いてじっと見る。

「お前が自分で手に入れた…………？」

ちらりと姉貴を見ると、“耳”を外してなかつたあんたが悪い”というような目をしていた。反射的に“Odin”を見やると、素知らぬ顔で鼻の頭をかいている。両方とも、僕を助ける気は全くないらしい。

「…………畜生…………」

未来がスッと近づいてきて、僕の袖を掴み、目を覗き込んだ。

「…………そ、うなんでしょう？お兄ちゃん」

ついつい目をそらしてしまう。その行為が肯定する」と同じだとは分かっているのだが。

「…………だつたらビツなんだ？」

「決まつてゐるでしょ？」

マズイ。

## ルナ・ドーム本部司令室

葵、翔、隼を引き連れた武装警官の一人が、背を向けて偉そうに立つている軍人に敬礼した。

「“向日葵”“Wildcat”と……」

彼はちらりと隼を振り返る。

「あ、加藤 守と……」

軍人がそれを遮る。

「羽下 隼君、無駄なことはやめ給え」

隼は目を細めた。

「…………あんた、やっぱり…………」

声を聞いて葵も顔を上げる。軍人はクルリとこちらを向いた。

「…………南さん…………？」

「意外そうだな、“向日葵”君」

それは紛れもなく、南機長だつた。ただ、彼の静かな微笑みは含みのある笑みに変わり、穏やかな視線は人を見下すものに変わつている。

そう、変わつたのはそれだけだ。

だが、それだけで、彼が裏切り者であることが十二分に分かる。

葵は眩暈がした。

“ 私たちは・・・・・違う。私は、この人たちの掌の上で踊らされていた・・・・・？”

南はにやりと笑い、再び背を向けた。

## 第三十九話　この瞬間

この瞬間、日本中に散らばつた“Ragnarok”の43名のメンバーが目を光らせ、耳を澄ましていた。

それぞれの目が、“Loki”である可能性がわずかでもある人間を見張っていたのだ。

彼らが必死になつて絞り込んだのは47名。

メンバーがまさに影のように彼らに張り付いている。

また、耳は、“ルナ・ドーム”のとある場所に仕込まれた盗聴器が拾つ面に注意を向けていた。

43人のメンバーが、

IT企業の技術者の周りを掃除しながら、

有能プログラマーの横で助手をしながら、

悪名高いハッカーと話しながら、

あるウイルスを蔓延させたと噂される男とベッドを共にしながら、

田の前で自分のひらつかせてこる“餌”に飛び掛かつとしているか

つての盟友を見ながら、

“ルナ・ドーム”の本部のモニターを見ながら、

耳の内部に埋め込まれた、極小のイヤホンの声に耳を澄ましている。

今、まさに電撃が走る。

敵の正体はもう分かつたのだ。

全てを繋げたのは、“Loki”候補の一人。

“彼女”の“耳”的お陰である。

衝撃からくる一瞬の空白の後、遅れて勝利の喜びがやってくる。

敵はもう、いつの間にか手中にあるのだ。

少女が囁く。

“決まってるでしょ？”

“それは、お兄ちゃんが、“Loki”だっていう、何よりの証…  
・・・・・！”

石井 未来の言葉が、ルナ・ドームの深部で、本部で、日本のさまざま  
ざまな場所で響く。

当然、正田の所でも。

“石井 哲が“Loki””

正田を含めた、44人が拳を握り締めた。

第三十九話　この瞬間（後書き）

へ、 “予想通り” だつて？

知・る・かつ！（――）

さてさて、突つ走つていきますよ！

## 第四十話 聞こえるか・・・・・・?

「 いの、馬つ鹿野郎！――！」

久しぶりに腹の底から怒鳴った。未来が衝撃を受けたようにびくつと動いた。

「 未来、今それを言つ必要あつたのか―？お前なら、気付いてんじゃないのか！？」

「 ・・・・・・え・・・・・・？」

次の一言を言つ前に、コンピューターのモニターが変わり、“ So uth - Pore ” の顔が現れた。

“ もう遅い、哲君”

「 ・・・・・・南、さん・・・・・・？」

未来はまだ状況を理解できていないようだ。

「 ・・・・・・やっぱ、あんたもスペイだつたんですね、南機長」

“ 残念だな、哲君、スペイが一人とは限らない”

「 残念だな。俺はあんたを気に入つてたのに」

南は、人を見下すような笑みを浮かべた後、後ろを振り返った。

“石井哲…………”Looki”を確認した。作戦を実行する”

そして再び僕を見る。

“……からゆつくり見物させてもらひおつ。君の死を、ね”

「残念ですねえ。カメラの故障みたいですよ。…………ついでに盗聴器もね。また後で会いましょう」

南の嘲笑が画面に映る前に、この部屋中に仕掛けられた盗聴器、監視カメラが破壊された。

未来、姉貴、“Odin”が動いてくれたのだ。が、そんなことにかまつてゐ暇はなかつた。僕は皆に向むりと向き直つた。

「南はさつきの毒ガスで俺たちを殺すつもりだ。防護服がそこに3着と、奥に2着ある。そいつを着て脱出する。姉貴と未来と“Tarsier”はこの箱ん中のを着てさつたとここから出る。俺と“Odin”は奥のやつを着てすぐに行く。分かつたな？時間がねえ、急げ！」

みんな僕の指令通りに動いてくれた。未来が何か言いたそうな目をしたが、首を振つて黙らせる。

「後で聞く、とにかく急げ！」

僕と“Odin”が防護服を取りに行く振りをする中、3人の足音がバタバタと遠ざかつていった。

耳を澄ましていた“Odette”が、ほつとため息をつく。

「…………行つたな、哲」

「悪い、巻き込んだまま……」

彼はひょいと肩をすくめた。

「気にはしない。それに、まだ、可能性が消えたわけじゃねえ」

僕はため息をつきながら微笑んで、モニターを覗き込んだ。

モニター上、二つの点が映っている。その点が、この施設の見取り図の上を滑りかに移動していく。

その三つが“ある点”を通り過ぎた後、ひとつのキーを叩き、この場所を封鎖した。

そして、点が立ち止まつたあたりの監視カメラを指導せし、唯一残つた“糞ガキ”的“耳”を取り出した。

「未来、聞こえるか…………？」

自分でも驚くほど、静かな声だった。

## 第四十一話 “生き残れ”

三人 未来、詩織、“Tarsier” のすぐ後ろでものすゞい音が鳴り、廊下が壁に変わった。三人とも急ブレーキをかけて、立ち止まる。

「…………？」

と、未来が右耳を押さえる。

「お兄ちゃん！？」

詩織の直感が、彼女に警告を発した。

「未来、それ、こっちにも聞こえるようにして」

未来は不安そうに頷き、スピーカーにつなぎかえる。それと同時に、  
石井 哲の声が廊下に響き始める。

“…………聞こえてるみたいだな。こっちにスピーカーはない。  
一方的に喋るから、黙つて聞けよ”

「…………？」

未来は詩織を見ていた。詩織がスピーカーを睨みつけているのを。

“いいか？後一分もすれば、この建物はあのガスで満ちる。だけど、  
“ルナ・ドーム”の内部全体となれば話は別だ。少なくとも一時間

はかかると思う。その間に“奥の方”的連中と一緒に本部に攻め込むんだ。出来れば走りながら聞いてくれ”

「…………だつて。いこー。」

未来はさつさと走り出す。声は続けた。

“本部の司令室とは反対側にガスの解毒剤が保管されている。それを“F・F”メンバーに配るんだ。本部も司令室以外にはガスが満ちている。お前ら三人が行くしかないからな。じゃあ、気をつけるんだぞ”

この時、彼女は急に立ち止まつた。すぐ後ろの“Tarsier”が慌てて未来をよける。

未来は気がついたのだ。

この廊下が封鎖された意味に。

姉が兄に向けた怒りの意味に。

兄の、妙に静かな声の意味に。

「…………お兄ちゃん？…………聞いじえてるんじゃないの…………？」

哲のため息が聞こえた。

“…………やつぱりばれたか”

未来は無意識に天井に問いかけた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんはどうするの…………？」

“…………ある可能性を信じる”

「…………まさか、防護服が…………？」

明るい声が返つてくる。

“…………答。ここ不親切だからぞ、三つまでもしかなかつたつて訊上。…………まったく、せめて四つは欲しかったな”

「…………」

未来は驚愕した顔で何か言いたげに口をパクパク動かしていた。しかし、声が出てきていなかった。

「…………哲、もう一発ぶん殴つてやるから」

詩織が監視力メラを睨む。

哲が笑う。

彼は笑い終わると、再び静かな声で未来に言つ。

“ 未来、親父と同じ、月並みな言葉だけぢ、言つとへぞ。 . . . .  
・ . . “ 生き残れ ” ”

ヅツ

未来の“耳”が壊れた音がした。

## 第四十一話 それがルールだろ？

盗聴器を握りつぶした直後、“Odin”は難しい顔でこっちを見ていた。

「あいつら、どこまでやれつかね？」

「さあ、な」

監視カメラを見やると、未来が僕が封鎖した壁を殴りつけて、何か叫んでいた。

次の瞬間、姉貴と“Tarsier”が駆け寄り、その腕を掴んで、引きずり始める。

姉貴は未来を怒鳴りつけ、キッと監視カメラを睨んだ。隠しカメラであるはずのこっちを。

「…………悪い、姉貴」

「…………アメリカ映画ならよかつたのにな」

「何？」

「ほら、アメリカ映画なら、主人公と相棒は絶対死はない。それがルールだろ？」

僕はすぐに反論する。

「いやいや、相棒が死んで、その弔いのために主人公が奮闘するつてのがベストだろ?」

「あ、ナルホド!…………主人公は俺だよな?」

「バカ!“Loki”の俺を差し置いて何が主人公だよ!」

「ああ?主人公が“Loki”本人でした!なんてオチを誰が期待すんだよ!」

二人して声を出して笑った。が、場違いな笑いは、瞬く間に過ぎ行く。

「…………現実は…………」

「暗い部屋に一人だけ、“死”を待ってる…………」

「…………ガスの名前、“Panikida”<sup>パニキダ</sup>は、死者が神の許しを得られるようにする祈りらしい」

ギリシャ語で、“夜を徹して歌う”“徹夜の祈り”。

正教会で、死者のために行う祈りのことだ。

「へえ…………名前の割りに、死に方が汚いな」

僕は頷く。

「だから、観客に退場してもらつたのさ」

一瞬の沈黙。

「哲、まだ諦めんなよ？俺等には…………」

「“可能性”がある」

そう、穴も穴、大穴でも、俺たちは賭けた。

大逆転のチャンスはある。

「フ！」

「おいおい、鼻で笑うなよ」

「“Odin”、ヒーローなら生き残るさ。だけど、俺達はそうじやねえ。だろ？」「

「……………そうだな……………」

俺達はまた笑つた。後、十数秒だ。

「……………せいぜい、“ブツチ・キャシディ”と“サンダンス・キッド”、だよ

この名前を知っている人は少ないだろう。

あるアメリカ映画の主人公達だ。

“Odin”はラストシーンを知っている。

だからこそ、穏やかに笑つて頷いた。

その映画の題名は、“明日に向かつて擊て！”

時間だ。

## 第四十一話 それがルールだろ？（後書き）

“明日に向かって撃て！”のラストを知っている方でしたら、この意味分かってないやついると思います！（多く）

え？ “そんな古い映画知らない” つて？

“分からぬ奴の方が多い”？

作者からは一言だけです。

“全員観ろ！”

“そして意味を悟れ！”

後書きにまでお付き合いいただき、ありがとうございましたm( )

## 第四十二話

あれは・・・・・

建物の中に、空氣の漏れる独特的の音が響き渡る。

“シュー・・・・・・シュー・・・・・・”

防護服を着た三人は、もう出口のすぐそばに来ていた。氣を失っている未来を、“Tarsier”がおぶつている。

「・・・・・・・それにも、見事な一撃でしたね・・・・・・・

詩織さん」

そう、いつまでも駄々をこねる妹にちょっと“キレた”詩織は、何のためらいもなく彼女の首筋に手刀を食らわせたのだ。

「・・・・・・・

“Tarsier”は沈黙に耐えかねて、さらに声をかける。

「そりいえば、哲君の言つてた“可能性”って何なんでしょうね？  
もしかして、助かるかも・・・・・・・・・・

「・・・・・・・あのガス・・・・・・・・

詩織は暗い声で言つた。

「食らつた奴を何人も見た・・・・・・死亡率百分で、死に方も、醜い。だから哲は私達を締め出したんでしょ? うね」

“Tarsier”はその言葉の響きに呑まれ、足を止めた。普通じゃ有り得ないほどの力がこもっていたのだ。

「・・・・・・行こつ。弟の遺志を継がなきや」

詩織は悲しげに付け足した。

## 本部司令室

“Panikida”、順調にドームを満たしていくています

南は満足そうに頷いた。

「パニキダ・・・・・・・?」

葵が呟くと、南は再びこちらを向いた。

「新たに開発された毒ガスだ。効果は・・・・・・まあ、見てもらえば分かるな」

彼は底意地の悪い笑みを浮かべ、モニターのスイッチを切り替えた。

「・・・・?」

無残に荒らされた薄暗い部屋が移つてゐる。床で何かが動いている。

「あれは・・・・・・・・・・・・

「そつ、君達がいた、メイン・コンピューター室だ。これじゃ見にくくな。斎藤をアップにしろ」

まもなく、一人の男がコードでぐるぐる巻きにされてもがいているところがモニターに映る。

「IJの部屋にも、“Panicriday”が満ちてへる。やつあると・・・・・・・・・・

南は残忍な笑みを浮かべた。

“う・・・・・・・・”

「ほお、斎藤が気がついたようだ！」

“・・・・・・・・なんだ、この音は・・・・・・・・？”

葵は田が離せなくなつていた。恐怖の表情のまま、画面を見つめている。

「Jのガスは、空氣より軽い。だから、床にいるJにいつらの頭への  
には時間がかかるが・・・・・・」

齊藤が呻いた。

そして、激痛からくる叫び。

「見るな！」

隼が葵に叫んだが、彼女は動けない。

齊藤は、叫びながらもだえている。その時、ブチッという音がした。  
その瞬間から、彼の動きが小さくなる。

「腱が切れた音だ。まつたく、つるせこ男だな、あいつも」

そして、最後に、齊藤は声に出来ない叫びを出したようだった。息  
も止まってしまった中、田を見開いて口を何か動かしている。

彼はその表情のまま、大量の血を吐き出し、事切れた。

葵はもちろん、翔も隼も顔面蒼白となっていた。

斎藤は苦しみの表情で白田をむけている。

南だけが笑つた。

「心臓が破裂したんだ。どうだ？ すばらしい技術だろ？」

血まみれの斎藤を背景にしているせいかも知れない。

南の田の中の光は、狂気に染まっていた。

## 第四十四話 まだ、終わらねえんだ

翔は顔面蒼白のまま、顔をゆがめた。

「…………殺人だ」

南はさらりと笑う。

「大いなる意志には付き物の、小さな小さな犠牲だよ

隼も無理に唇を吊り上げた。

「ずいぶんご機嫌だね、南さん。せつせいじやこして部屋を出て行つたときには、何かいいことでもあつたのかい？」

「そり、その通りだ。ビックニュースだぞ」

隼は鼻で笑い、“ワーベックリダヨ”と呟き声で笑ひにせきをやつた。彼女は弱弱しく笑う。

“Loki”的正体が判明した

途端、葵も隼も翔も目を見開いて、身を乗り出す。

「…………石井 哲が、“Loki”だったのだ」

「ええー？」

驚いたのは葵一人だった。あの一人は、動きも言葉もシンクロしていた。

すぐにつまんなそうな顔をして、後ろの壁にじわっと身を預ける。

「…………なんだ、やつぱりそつか」

南も葵も“…………え？”という顔をしている。何とか動搖からさめた葵は、二人を覗き込んだ。

「何、一人とも知つてたの？」

「一番可能性高いのはあいつだ」

「技術、考え方、悪戯心」

「…………まあ、言われてみれば…………」

遅まきながら、自分のペースを取り戻した南が三人を見下した。

「ふん、だが、これは知るまい。“*Loki*”はその他諸々とともに、“*Panikhidai*”の餌食だ」

「え…………？」

「貴様らもさつき見ただろ？…………あのよつこして“*Loki*”は最期を迎えるのだ…………！」

南は、みるみる青ざめる薬を見て満足しかけたが、残りの二人が薄笑いすら浮かべているのを見て、寒気を覚える。

「…………おっさん、じゃあ、そいつを押させてくれよ」

「わつだ。“Loki”の最期とやらを」

南は無言で生意氣な高校生連中を睨む。

「出来ないんだろ、南サン」

翔は挑戦的に彼の目を見返す。

「哲か未来にぶつ壊されたはずだ、カメラだの盗聴器だのは」

南の唇に力がこもる。

「あんたは“確認”できない。“Loki”がホントに死んだかど  
うか」

隼も強気な笑顔を見せる。

「まだ、終わらねえんだ。あんたや、正田サン<sup>タヌキジジイ</sup>の思い通りになると  
思つなんよ」

南は怒り心頭といった感じで、皿ついで皿葉が出てこない感じ。

と、モニターが切り替わる。

「司令官…シャトルが、消えました！」

「なにい！？」

翔がニヤッと笑った。

「もう、とうくにルナ・ドームを離れてるよ。俺達の仲間と一緒に送り込まれた人々はね」

南はゆっくりと翔に向き直る。

「しかも、あんたらのレーダーに映りはしない。少なくとも、の人たちを助けた。って面では、俺達の勝利です」

南は自分に言い聞かせる。

“まだ、もうひとつの方はばれていない。大丈夫だ”

「…………せいぜい足搔くがいい。今の君らに何が出来る？縛られ、監視され、全ての力を奪われた君達に」

南は演技が下手な男が、強がつて笑うかのよう  
に笑い、その部屋を出て行つた。

だが、葵は知つていた。この部屋は監視されていないことを。

彼女はポケットの中の携帯電話サイズの機械をそつとなものだ。

かつて、哲の胸ポケットに入っていたそれは、既にこの部屋の監視

## 第四十五話 落ち着け

部屋に葵、翔、隼だけになり、三人はほっとため息をついた。ほほ同じタイミングで、翔と隼が縄を切る。

隼は、「うつと仰向けになり、田を開じた。

「田、耳は無いにしても、やっぱコンピューターが無けりや、やることねえな」

「…………そづね」

「…………いや」

翔はすくっと立ち、隼を見下ろした。

「…………お前の話を聞く」とぐらには出来るだろ?」

「…………俺の…………話?」

葵も座つたまま隼を見る。

「思い出した。“地球の半分を吹つ飛ばせる核爆弾”が…………

・・・・・

「ああ、それか」

隼はむくつと起き上がる。

「単純な話なんだけど…………」

ガチャ

南が図ったかのよくなタイミングで入ってくる。隼はそれで口をつぐんでしまった。南は既に切られて床に転がっている縄を見つけ、呆れたように呟つ。

「…………まつたく、君らはおとなしくする」とが出来んのかね？」

翔は肩をすくめる。

「別に何もしゃしませんよ。窮屈なのが嫌いなだけで

「…………まあいいだろ。それより…………」

“南司令官——”

南の背後の壁がモニターに切り替わった。ひどくあせっている若い軍人が映し出される。南は遮られたのが不愉快だったようだ。

「…………なんだ？ 騒々しい

“受刑者達の蜂起です！…正確な数は不明ですが、相当な数な様です！！”

南はちらりと三人を見たが、格別あせつているよつとは見えなかつた。

「落ち着け。相手の武器は？」

“どうやら、わが軍の武器を横流ししたもののがいるようです！”

「ふむ。恐いへ、ここにいるお三方の仲間だな」

南と違い、若い軍人は滑稽なほど動搖している。

“どうなさいますか！？”

「落ち着けといつてこる。どうせ、彼らには武器はあつても、防具が無い。時間稼ぎさえ出来れば、全員“Panikrida”的餌食だ」

南はにやつと笑つた。

「確実に勝つ勝負。じつへつ詰ませるとじょう

翔は内心あきれ果てていた。

“勘違いも甚だしい…………相手の駒をたくさん取れば勝てると思ってやがる”

もちろん、そのまづが有利になることは否定しない。

だが、大事なのは、チェック・メイト。

王キングを取るのが第一だ。

ほかの駒は、そのための捨て駒でしかない。

“…………そーいや、この考えは哲に教わったんだっけ”

翔は、自分も捨て駒のひとつかもしれないな、と呟いた。

## 第四十五話 落ち着け（後書き）

「無沙汰いたしました（―――）」

パソコンの調子がよくありませんで・・・。

直ったわけではありませんが、まだがんばってまいります（^――^；

南は見せ付けるつもりなのか、三人がいる部屋で指揮を取っていた。小憎らしいほどに冷静に、的確な指示を飛ばしている。

「よし、近藤の隊は正面を。東谷は右手を固めろ。追う必要は無い。あと、5分もすれば、"Panikhiida"が満ちてくる」

明らかに、無謀な反乱だった。若い軍人をうろたえさせた情報は、ほとんどがはつたりだつたようだ。

彼らには武器も、人数も、道具も、ごくわずかで、翔たちの目には、戦略すらないように見えた。

正面から幾人かのグループが徒步で突撃し、軍の集中砲火の前に倒されるか退却させられるかを繰り返していた。

“…………哲は何を考えてんだ？”

翔は思った。

“あんなやり方じゃ、皆死ぬだけだぞ…………？”

南が三人を振り返った。

「…………君達の仲間は思つたより考えが無いな

三人ともモニターに映る戦いの様子をじつと見てゐる。また十数人が殺された。

「そろそろタイムリミットだ…………総員、防護服を確認しろ！」

スピーカー越しに次々と確認が完了したことを知らせる声が聞こえる。

「よし…………そろそろだな」

軍のほうからの銃声が途絶えた。それで、受刑者側が時の声を上げ、あちこちの壕から飛び出す。

と、その時、先頭を走っていた男が、見事に転んだように見えた。

まるで喜劇のような、笑いを引き出しそうな転び方だ。

その後の面々も、同じように倒れる。

だが、それは笑いから程遠かった。

葵は口を手で覆い、田をぎゅっと瞑る。

“やめて……やめて……”

その時、感度の良すぎるマイクが受刑者達の断末魔を拾い、部屋の空気を震わせた。その声を聞き、葵の肩がびくっと動く。耳をふさいでも、無駄だった。

長く尾を引いた叫びは唐突に、パタッと止まり、後には背筋を凍りつかせる沈黙が残る。

葵は恐る恐る目を開けた。モニターには、うつぶせのまま動かない、何十人の死骸が映し出されている。

“…………ひどい…………”

ふと、葵の目が、何か動くものを捕らえた。

「え？」

「……………ビリした？」

「あの、真ん中の……………」

彼女が指差したところが、ちょいビアップにされる。

一人の男が映しだされた。

歯を食いしばり、前に向かって這っている。

「あの男……………」

南も驚愕している。

男は静寂の中、セレカジタリムサツヒツと進む。前だけを見て、ゆつくりと。

50cm

1m

1m50cm

男はついに力尽き、がくりと頭をたれる。

「…………なんて奴だ……」

しかし、まだ彼は死んでなかつた。

地面に突つ込んだ顔が少しづつ上がり、彼は正面を  
カメラがある方向をまっすぐに見た。  
つまり、

南は寒氣を覚える。

“…………あの日には、何か、確信がある”

男はさうこにやりと笑つてみせる。

彼の顔を見た誰しもが思つた。

“あれは、勝利を得た顔だ”と。

男は、その表情のまま、突つ伏すように息絶えた。

反乱は失敗に終わった。

彼らは、全滅した。

## 第四十七話 “ed”を外せ

静まり返った部屋の中に、正田首相からの通信が入った。

“…………南、無事か？”

正田は、口先だけで言つてゐるようだ。心配している様子が全くない。完璧に無表情だ

南は、まだショックから立ち直っていない。

「…………はい。ちょうど今、受刑者達を鎮圧したところです」

“ そりが。 “Panicrida” の出来はどうだ？”

「…………殺傷能力は、十分すぎるほどです」

南がぶるっと体を震わせるのを、正田が冷たい目で見ていた。

“ あれはまだ実験段階だ。問題点が多い”

「問題点…………ですか？」

“ああ。血清が至極簡単に…………いや、そんなことを話しに来たのではない。南”

「はい」

“ “ed” を外せ”

「！？」

“ いぢらは既に動き始めている。すぐにかれ”

「…………」「解しました」

通信が切れた。

そのあとすぐ、南は足早に部屋から出で行つた。

隼は片膝を立てて座り、壁に寄りかかっていた。頬を膝につけ、何か考え込んでいる。

「…………隼？」

「…………一か八か、賭けてみるか？」

葵はひざを抱えて座っていたが、急に明るい顔になった。

「何？何するの？」

「…………やつを、あのおっさん、」で指令なんかを出した。つむ」とは

隼はガバッと立ち上がった。そして、さっきモーターに変わった壁の前まで行き、そこをノックした。

「…………て」とは？

「ううん、コンピュータがある可能性が非常に高い

「でも…………」

葵は“あつたとしてもどうしようもない”ところなことを言うとしたが、途中でやめた。

「…………なにやってんの？」

隼が壁に向かをくつかけた。切手のような大きな箱だった。

「…………トがってたほうがいいと思つた」

翔が遠慮深げに言った。

「・・・・・行くぞ。Three・Two・・・・・・・・

「だから、何つて・・・・・・・・

「One・Zero」ボン!!

「キヤアツ!!

爆発音がしたが、どちらかといつと、葵の悲鳴の方が大きかった。

「おい、盗聴器壊したからつてあんまり騒ぐなよ」

「爆弾なら爆弾って言つてよ!!」

二人は哀れむような目で葵を見た。

「・・・・・・・・なに?」

「・・・・・・・・はあー・・・・・・・・

「ちよつとー」

隼の爆弾は、壁に腕が入る程度の穴を開けていた。

彼は躊躇い無くその中に手を突つ込む。

“・・・・・・・・よし”

「・・・・・隼？」

「一」— いう機械モダンは、大体この辺に・・・・・

人差し指が何か硬いものに触れる。

そつとなでて、形状を確認する。

“・・・・・違うな・・・・・これが？”

三個目の突起が“それ”だった。

隼はそのボタンを押し、素早く手を引き抜いた。

途端に壁がモニターに代わり、キーボードがどこからか出でてくる。

「す、・・・・・」

「さて、奴らは何をするつもりなのかねっと」ポン！

翔と隼は画面を指差しながら、次々と操作を進めていく。

“私の出番は無い、かな…………”

葵は反対側の壁に寄りかかり、ぽんやりと画面を見つめていた。

大体5分後。画面に、三つのアルファベットが並んだ。

“P・T・P”

葵はぽんやりと思つた。

“…………なんかどつかで…………”

ピーティーピー

“P・T・P”？いつたい何の…………”

葵は無意識のうちに口走つた。

「…………“People Tempted Providence”…………」

「え？」

二人は驚いて振り向いたが、一番びっくりしているのは葵だった。  
目を見開いて、床を見つめている。

「…………人々は神意に逆らった…………」

「…………神意…………？」

パチ！

部屋の電気が消えた。

パシュウ…………

コンピューターの電源も落ちる。

三人とも驚愕の表情のまま、辺りを見回す。

“ばれたか…………？”

幸い、そうではなかつた。

ルナ・ドーム中の電力が、一瞬止まっただけのことだ。

そう、ほんの一瞬だ。

だが、その一瞬で、地球との通信は途絶えた。

## 第四十八話 いや、まだある

地球

物語は、筒井と羽下、“Fenrir”と“Loaght”的会話に戻る。

「正田を暗殺！？」

「ああ」

筒井はコンピューターの電源を引き抜いた。

「おい！？」

「あいつが“Loki”である保証は無い。それから…………

」

彼はポケットの中にある手帳のような形の機械のスイッチを入れた。

「…………これで盗聴の心配は無い。さて、協力するか否か」

「…………こんな面白そうな」と云、俺が参加しないわけが無い

い

筒井は、笑顔の羽下を横目に見ながら、“確かに”と呟いた。

「で？その頭ん中に出来た構想を聞かせてもらひこましちょうか？」

「…………簡単な話だ。正田を居場所を探り出し、頭を撃ち抜く。恐らく、それで“お偉いさんの壮大な計画”は止まるはずだ」

「…………なあ、そいつあいつたい何なんだ？お前には分かってるのか？」

「…………さあな。ただ、推測する」とは出来るだらう

「…………」

「よし、整理してみようぢやねえか。俺達が知っていることは何だ？」

「1、“Loki”はいい加減な糞野郎」

羽下が笑いながら言つと、筒井がそれをたしなめる。

「馬鹿、真面目に考える。1、正田は何かでかこととをたくらんでる」

「2、その“でかい”と“で、世界の半分、下手すりや全部がくたばる。生物も含めて、だ」

「3、あの“Loki”が危機感を覚えている」

「4、一部のお偉いさんは生き残る」

「といったところか？」

考え込んだ羽下は、ついに“解答”を見つけた。パズルのピースを。いや、むしろ、パズルの完成図を見つけたのだ。

「…………いや、まだある。5、情報が“L o k i”にとつて武器になつていな」

「何だと？」

筒井は驚愕の表情でゆっくつと立ち上がった。羽下の頭の中で、パズルのピースがはまり始める。

「さうだろ？ “L o k i”は全てを握っているはずだ。でも、今回はそれをどこからも借りとしない

「…………詩織経由で広げるつもりだったのかもしれない

「おひおい、女刑事経由でどうやって広めるんだよ？そんなことするより、マスクの本部に叩きつけた方が手っ取り早いし、あいつは今までそうして來た。例の自動車会社のリコール隠しも、IT企業の先駆けの社長がとつ捕まつたのも、プロ野球界の薬がらみのうわさも、元はといえば、あいつがマスクをどうにかして動かした結果だつたら？」

「…………まあ、確かに…………」

筒井は明らかに歯切れが悪い。しかし、羽下はかまわず続ける。

「今回に限つて、それをしない。なぜだと想つ?」

「…………」

「出来ねえんだ!パニック、暴動が起ころるからだ!」

羽下は目を輝かす。難易度の高いパズルを完成させた子供のよう。

「でも、遅かれ早かれ分かるんなり…………」

「いや、気付いたときには全てが終わってるんだ」

彼は怪訝な顔をした筒井に何かを耳打ちした。

「…………なるほど…………そうすると…………  
・・やはり、正田の暗殺が急務だな…………」

羽下は“元・相棒”的の中に、驚きがまったく無い」とこに気が付いた。そして、悲しみが見えたような気がした。

何故だ?

羽下は思った。

普通りだろ?ちょっとでつかくなつただけのこと。

また俺達が“お偉いさん”の裏をかけるつてのに、こいつは何におびえてやがるんだ？

だがしかし、羽下は疑つてはいなかつた。

## 第四十九話 そつくりか？

筒井は自分の計略を、羽下に説明し終えた。

「…………正田の行動パターンは分かっているから、そこを狙う。異議はあるか？」

筒井は無機質に言ひ、羽下は呆れたように笑った。

「なあ、相棒。もつとリラックスしろよ。それじゃ、最初の仕事ん時とそつくりだぜ？」

「…………最初？いつの話だ？」

「ああ？詳しく述べてねえけど、ドジ踏んだってのは確かだ」

筒井は笑いをこらえた。

本当に「こいつは変わっていない。良い意味でも、悪い意味でも。

そつか、思い出した。

確かに、俺達の初仕事は大失敗だった。

羽下<sup>ヒラシ</sup>の“でかいことやひつ”的一言で、やるじになつた、やれやかな情報戦争だ。

俺達は、某超大国が長きに渡つて隠蔽し続けてきた“K氏暗殺事件”の重大な情報を盗みだし、全世界に公開することを計画した。

そんなことやつたところで、一文の足しにはならないし、寧ろ危険の方が大きかつたが、俺達はやつた。ただ単に面白そうだからという理由で。

思つて、羽下のペースに巻き込まれていただけなんだろう。

だけど、それでおおむね、成功しかけた。

血画血贊になるが、計画は完璧だつたし、あと一步で資料を盗み出すことが出来た。

まったく気付かれない内に、だ。

だがしかし、その国で作業に取り組んで一ヶ月。

俺達は敗北した。

あと数十秒で情報の取り込みが完了するといったところで、急にコンピューターの電源が切れた。もつと言えば、電化製品全てが止まつた。

後で分かったことだが、その“某超大国”が、国中の電力を停止させるという荒業をやってのけたのだ。

しかも、電力が回復したときには、情報管理システムは物理的にネットワークから切り離されていた。

まったく持つて信じ難いこと、奴らはこいつの居場所まで掌握しかけていた。

ギリギリでそれに気付いた俺達は、ほうほうの体で日本に逃げ帰ったのだった。

あれはまさに踏んだり蹴つたりだ。

あの時に似てこよとは・・・・・・

「・・・・・そつくじか?」

大真面目に頷かれてしまった。

「ああ。あの頃に比べて、俺達の相手は小さくなってるんだぜ? あいつらに比べりゃ、我が祖國なんかちょいちょいのちょいだらづが」

「・・・・・お前の祖國は日本じゃなーって」

羽下はアメリカ国籍だ。

「細かいこと気にすんなよ! じゃ、電話かけるぜ? 正田様によ

羽下は歯を見せて笑つた。

筒井は、そういうえば、あの時も今と同じような気持ちだったな、と思つた。



## 第五十話 論外だろ？

羽下は電話をかけている。

「…………もしもし？ 総理頼まあ」

「…………前も言わずに“総理頼まあ”は無いだろ…………  
…………」

筒井の懸念をよそに、電話は正田につながる。

それと同時にモニターに彼の様子が映し出された。

“…………何かつかめたのかね？”

スピーカー越しに聞こえる声は、機嫌が良いわけではないが、不機嫌にも聞こえなかつた。

「いや、全く。だが、あんたに報告があるんだ。俺達は、あんたを暗殺することにした」

正田の顔色がすぐに変わる。何故か、筒井が舌打ちをした。

“…………それは…………君等の宣戦布告になるのか  
ね？ 日本に対する…………”

「…………いいや。“正田賢治に対する”

宣戦布告です」

正田が叫んだ。

“その両者に違いはあるのか！？？？？？？よし、いいだろう。君等が平和に暮らせる時間は終つた、と言つわけだ”

正田は電話を一方的に切り、ものすごい勢いで携帯を壁に投げつけた。羽下はモニターを見ながら口笛を鳴らした。

「すげえ怒り方。その両者の違いが分かつてないから、あんたは終わりなんだよ」

盗聴器から聞こえる正田の命令により、二人は“国家反逆罪”などという、訳の分からない罪状で警察に追われる」となった。

「“国家反逆罪”と来たか。よし、もつといだら」

筒井は映像と音声を切つた。

「あの正田<sup>タヌキ</sup>は危険を察すると、自分の巣にこもる。その場所は・・・・・・」

「例の地下シェルターだな。何でも核ミサイルが直撃しても耐えられる構造とか言つてなかつたか？」

筒井はスペックを思い浮かべながら答える。

「…………そつだ。今の最高の技術を駆使していく、理論上

では、耐えられる。その上、食料品なんかの備蓄もかなりのもので、1、2年は中についても大丈夫らしい。運動設備なんかもそろっていて、もはや避難所という域を超えてるんだとさ」

「そーいやあればホントなのか？例の遊園地の地下の空間に隠されているつてのは」

「例の遊園地については、千葉にあるにもかかわらず、『東京』と名乗っている世界規模の某有名テーマパークのことである。

「ああ。世界中にある上、もともと地下空間があつたらしくから、極秘でいろんな場所で作るのに都合がよかつたらしい」

「ああ、そういう都市伝説あつたな」

羽下は感心したよう言つた。

「……………そうだな。そ、進入路だ。調べられたか？」

「ああ。……………一つ。馬鹿馬鹿しいが、ランドの隠し店舗からは入れるとか…………」

「何なんだよ、あれ?」

「あ……………一つ。地下鉄の線が繋がつてゐる。いつはちよつと苦しいな。地下鉄はいつでも監視カメラが回つてゐし、駅員もしつかり見てやがる」

「……………ほほほ?」

「・・・・・官邸から行く道がある。論外だろ?」

二人は顔を見合させ、にやりと笑つた。

## 第五十一話 奴の裏をかいてやる

筒井が腕を組んでシェルターの図面の向き合っていた。モニターの中で、立体の図面がぐるぐる回っている。

「…………セオリー通り考へると、やっぱリの隠し店舗からが一番安全だろうな」

筒井がモニターを指で叩くと、ソファで寝転がっていた羽下が身を起こした。

「ああ。完全に封鎖するなんて出来っこないし、人目に触れるところからシェルターまでの距離も短い」

「…………それに、奴らは俺達を逮捕したいんじやない。始末したがつてるはずだ。警察を使つて堂々とやるわけにも行かない」

一人は目を合わせて頷いた。

場所こそ違えど、正田側もほぼ同じタイミングで計画を練っていた。

立体映像として映し出された図面の前で正田と司令官らしき軍人がしゃべっている。正田はボタンを押し、あるルートを色付けして表示した。

「恐らく、奴らはこの隠し店舗のルートから侵入してくるだろ？」「

軍人が答える。もう若くはないようだが、姿勢、眼光、体つき、口ぶり、全てが力でみなぎっている。

「そうなると厄介ですね。一般人の無数の目の前で、大々的に動くことも出来ませんから」

正直なところ、正田にとって、一般人の目などもうどうでもいいことだつた。だが、そういうて勘付かれるわけにもいかない。とくに、この男には。

「……………そうだな。何か案は？」

「ええ。シールターの中に隠れるのをやめたらいかがですか？」

「何？」「……………コイツにだけは……………」

「シールターの中に“Ragnarok”の部隊を待ち伏せさせる」というのは……………？

正田は頭を振った。内心脅威を感じながら。

「だめだ。それは……………ルール違反だ」

「は？」

「……………とにかく！私はあの中で待機している。それは変えん！」

軍人は正田をじっと見たが、それ以上追求しようとはしなかつた。

「…………では…………やはり、入り口を固めるしか  
なさそうですね。奴らも馬鹿ではない。官邸からのルートを使うこ  
とはまずないでしょう。残り二つに集中して守りましょう」

正田は曖昧に頷いた。

正田は、この計画を完全に遂行するに当たって、“Look”以外  
にも3人、“脅威”とみなしたもののがいる。

一人は死に、もう一人は月にいる。

そして、最後の一人がこの軍人である。

名前は三浦 和輝だ。

羽下が指を鳴らした。

「と、まあ、俺達がそう考へるつてあいつらは思つてゐるだろ? な

筒井はにやりと笑つた。

「そうだな。お偉いさんの頭は、セオリーか前例通りにしか働かないからな。俺達は」

正田はため息をついた後、立ち上がった。

「君らはそいやつて常識で考えた作戦を繰り広げてくれたまえ、私は

羽下、筒井、正田の声が、空間を越え、見事にかぶる。

「「「奴の裏をかいてやる」」

## 第五十一話 簡単すぎる

軍は一人が侵入する可能性のある一つのルートを完全に包囲した。

が、外から見ただけでは、全く気づけないだろう。

狡猾に準備された罠。

後は、獲物が飛び込んでくるのを待つだけだった。

残念ながら、獲物は彼らの想像以上に賢かつたわけだが。

羽下と筒井は、警備の手薄い“官邸ルート”を使用して侵入していた。

当然、こちらのルートにも監視カメラや、少数の兵はいるが・・・

「監視カメラの映像、止めたぞ」

「よし、陽動作戦、開始だ」

軍の張り込んでいるルートのそばで爆発音が鳴り、煙が上がった。当然兵士達からは見えないが、彼らの無線機に通信が入る。

“アルートに応援要請！…奴らが現れた！”

「おい！」

「ああ！」

彼らは軍用車に乗り込み、即座に立ち去った。

二人は堂々と官邸の正面から中に入った。

「あいつら、あんな簡単に引っかかつて、将来が心配だなあ？」

筒井は肩をすくめた。

「心配なこと。むしろ、最高の兵士になれるかもしねれない

「何で？」

「兵士ってのは、命令どおりに動けばいい。頭なんてないほうがいい

二人は中をすんずん進んだ。

隠し通路も簡単に開け、地下のスペースにもぐりこむ。

全く何の障害もなく、だ。

流石に羽下が呟いた。

「…………簡単すぎる」

「ああ。これは恐らく罠だ」

筒井はせりふと並べ。

「…………眼? どんな?」

「まあ、恐らく、俺達を始末する仕掛けがあるんじゃないかな?」

羽下の舌打ちが響く。

「んな」たあ分かつてんだよー。どうして風にそいつあるかを聞いてんだ

「馬鹿か、お前は。そんなことは正田に聞け」

筒井は地道をすたすた歩いていった。羽下は毒づきながら、その後ろについて歩いていった。

そう、あの時と、状況がそつくりなのだ。

筒井は初仕事のことを思い出していた。

違うのは俺達が狙う獲物が、現実世界リアルにいるか、ネットワーク上の  
仮想世界バーチャルにいるかというだけだ。

一見何の障害もないルートの上に、狡猾な罠が仕掛けられているところも。

まあ、あの時、俺は失敗と引き換えに“報酬”を手にしたわけだが。

アメリカ政府は、何が自分にとって危険なのか、どうすればそれを回避できるかの判断が鋭敏だった。

彼らは闇を闇の中に保つことに成功し

俺は“ちょっとした”金を受け取った。

当時、俺にとっての“でかい事”とは、でかい金以外の何物でもなかつた。

アメリカ政府にとって、“闇”的露呈は混乱を生み、自らの破滅を意味した。

つまり、丸く収まる理想的な取引がなされたわけだ。

俺は友人をほんの少し騙すだけで、向こうは有り余る金のほんの一部を渡すだけで、目的を達成出来た。

妙に重なるのだ。



## 第五十三話 そこまでだ、 “相棒”

二人はシェルターにたどり着いた。

入り口を開け、中に入ると、正田 賢治が真正面に座り、退屈そうに頬杖をついていた。

「…………すいぶんと時間がかかったな。お前達も大したことはなさそうだ」

「…………正田、自分の命が少し延びた分を喜んだらどうだ？」

羽下は既に銃口を正田に向けていた。だが、正田は表情を動かさない。

「…………“話せば分かる”とはいわねえのか？」

「やう言えば、“問答無用！”と撃たれるだろ？ 羽下君」

「…………」

羽下は、正田の“余裕”の正体についてすくなく勘付いていた。

だから、大して驚かなかつた。

“あの時” も、だ。

絶妙すぎるタイミングで奴らが反撃を開始したのにも、“相棒”が妙に潔く逃げることを選んだことにも、驚かなかつた。

もつと言えば、ばれる筈のない俺達のプロジェクトがばれたことにモ。

ただ、“相棒”は知らなかつた。

俺があの“國家機密”をとつぐの昔に盗み出していたことを。

張り巡らされたセキュリティーも、複雑な暗号も、意味を成さない。

“見えざる敵”・・・・・“Phantom Menace”  
ことっては、そんなものないに等しいのだ。

“Phantom Menace”といつ名前も俺しか知らない。

その存在に気づく者すらいないからだ。

だから、あのプロジェクトは 単なる 試験紙 に 過  
ぎな か つ た 。

筒井に用意すべき餌は何なのかを見るための。

そう、筒井は多額の金を受け取る代わりに、俺の動きを敵にばらした。

つまり、だ。

奴を釣るのに、特別なものは何もいらない。

ただ、奴が満足するだけの金があればいい。

それを把握したからこそ、その後の“仕事”は大体が“成功”を収めた。

正直、一人でやれば、誰にも気付かれる事なく、全ての仕事を終えられたのだ。

多分、俺もまだまだ修行が足りなかつた。

俺は、誰かに気づいてほしかつたのだ。

俺の力を示したかった。

だから筒井を組み、わざわざ気づかれるように動き、無駄にセキュリティーに引っかかつてもみたのだ。

俺は数年間ずっと筒井と組み続けた。

自分のアホを加減に気つくまで、ずっと。

あいつとのコンビを解消してから つまり、俺が“Phantom of Menace”に戻つてから、五年が経つた。

それでも、“相棒”的なことは手にとるように分かる。

“正直者”が、裏切る者はいつだつて裏切る

だから、驚きやしない。

筒井が銃を俺の後頭部に突きつけても。

「そこまでだ、“相棒”」

背中になにやら硬いものが当たられる。

俺はさつと手を挙げ、降参のポーズをとつた。

「 もういいじにな。 . . . . “ 相棒 ” 」

やつぱり、 そう来たか。

・ . . . . . . . . . 『 いまでは、 “ 奴 ” の予想通り。

## 第五十四話 決まつたるだろ？

筒井は羽下から拳銃をもぎ取り、弾を抜いて床にばら撒いた。

「…………念入りだな」

「油断大敵、とこつじやないか」

当然のことながら、正田は「機嫌だった。筒井は黙つたまま“相棒”の両手に手錠をはめる。

「念の入れすぎじやねえか？ 流石に手錠は必要ないだろ？」

「いや」

正田は自分の目の前にあつた書類をペラペラめくった。

「勘違いするな。君は 警 察 官 に よ つ て 、 逮 捕  
さ れ た ん だ 。 法 に 基 づ い た 正 式 な 逮 捕 だ」

「そりゃありがたいね。判決が下されるまでは、死ぬ心配がないってわけだな」

羽下の皮肉っぽい言葉は無視された。正田は黙つたまま書類に目を通している。羽下の個人情報 筒井さえも知らない、極秘なものも含まれている が記されたものだ。

「…………“アメリカ国籍の男が、日本国総理大臣を暗殺しようとして官邸に押し入りました”」

正田がぴくりと反応した。羽下は満足そうに笑い、アナウンサーのよつなしゃべり方をさらに続けた。

「“幸い、首相は無事、男は現行犯逮捕されました。しかし男はアメリカ中央情報局、いわゆる“CIA”が関係していることをほのめかす供述をしており、日本政府はアメリカ政府に関連を問い合わせています”……といった流れだな」

「貴様…………まさか…………？」

「なんだ、あんた、国家機密が漏れてないとでも思つてたのか？ましてや、“アメリカ合衆国”的トップも絡んでぐたぐた企んでるんだぜ？この“Phantom Menace”が、見逃すはずがないでしきうが」

「…………“Phantom Menace”？？」

筒井が、銃口を羽下に向けたまま、一人で呟いた。羽下は先程までと同じように、いたずらっぽい笑みを浮かべ、肩越しに彼を向いた。

「知らなかつただろ？俺の本当の名前<sup>「ペイントーム・メンス</sup>

「…………それどころか、そんな名前、聞いたこともない

「当然だ。それこそ、本当の“見えざる敵”。世界に存在さえ知らせぬまま“仕事”をなす。究極のクラッカー…………あ、これ、俺のことだぞ？」

「…………君の名前などどうでもいい

正田はいらだたしげに書類を机の上に投げた。

「…………君が何を知つていよつと、今、君に何が出来る  
?そこでおとなしく、“終わり”を見ていら」

羽下は声を上げて笑つた。

「ハハーおとなしく?」の俺が?」

「黙つてろ!」

彼は背後で筒井が銃を構える音を聞いても、まだ笑みは消えなかつた。

「ツツ、この 最期 の 戦争 の後、お前の懐にある金に何  
の価値がある?」

「・・・・・・・・」

「もつと言えば、お前が生きていられるか  
さえわかんねえんだぜ?」

筒井は、静かに銃口を下ろした。そして 暗がりにいたため誰  
にも見えなかつたが 微笑んで見せた。

「そもそも、この世界に価値はない、そうだろ?」

「出た出た。勘弁してくれよ・・・・・・・・・・」

正田は一人を無視し、ルナ・ドームとの通信を開始していた。羽下もやはり、正田を無視した。

「お前にとつて無価値でも、俺達にとつちやそつじやない。だから・  
・・・・・・・・・・・・

正田は軍人らしき男がモニターに写ると、間髪入れずにたずねた。

「南、無事か？」

まるでこいつには注意を寄せていない。

「・・・・・・・・俺と、“究極のハッカー”が手  
を組んだ。あの正田<sup>ジジイ</sup>を止めるために！」

「究極の・・・・・・・・ハッカー・・・・・・・・?

「決まってるだろ。“Loki”<sup>キヅネ</sup>だよ

羽下の浮かべた屈託のない笑み。それを見て、筒井は顔を曇らせる。

彼は知っていた。

“Loki”は“Panikhida”の餌食となつたはずであることを。

どうするにも出来ない。

ルナ・ドームに毒ガスが満たされたのは、3時間近く前のことなのだ。

正田が言った。

「“ed”を外せ」

もづ、誰にも止められない。

## 第五十五話 全くだ

「さて、いよいよ大詰めだ」

通信を終えた正田は、無表情なままで呟いた。言葉の隅に、ここまで来た疲れが一瞬にじみ出た。が、一瞬緩んだ気持ちは、羽下の一言で再び引き締められた。

「……………“People Tempted Providence”」

「……………何！？」

羽下は相変わらず笑みを見せていた。

「知つてたんだよ、俺達は」

「……………」

正田は何か冷静さを保とうとしていた。羽下が続ける。

“人々は神意に逆らつた”。この言葉が意味するのは、1945年、8月6日、9日に原子爆弾が投下されたこと。そうだろう？

正田は黙つたまま動かない。

筒井は静かに銃口を上げた。無感情なロボットのような冷たい話し方でさらに続ける。

「核兵器を再び使う」という意味だ

羽下は再び自分に向けられた銃口をちらりと見た。

「…………『前回』と違うのは、一発の威力の高さと、双方からミサイルが発射されるってこと。そうだろ、ツツ？」

一瞬の沈黙が肯定のサインだった。筒井は正田が告げた言葉を繰り返す。

人 類 か ら 不 純 物 を 取

「分かつてないな、ツツ。これは“肅清”なんてレベルじゃない。コイツの考えてるのは、人類を滅ぼし絶やすことだ！！」

羽下はイライラと反論したが、筒井の無機質な態度は全く変わらない。彼は見下すような調子で答えた。

「だからやった。もう、止められやしない。お前は正田の手の中

「にじるし、 “Loki” だつて…………」

「だから、 正田にすがつて生きよつとでも？」

自身を遮った言葉に、 简井の顔がぴくりと動く。 羽下の目は注意深く彼を観察していた。 ついで、 がっかりしたような顔になり、 肩を落として見せた。

「…………図星か。 全く、 “Fenrir” ともあひつものが、 そんなにも“生”にしがみついて居るとはね…………・みつともない」

「生きることにしがみついて何が悪いーそれは人の性だ！……」

简井は猛然と怒鳴った。 が、 羽下の落胆は深くなる一方だ。

「…………吠えるなよ。 余計に空しくなるぜ」

「全くだ」

冷たい声がした直後、 一発の銃声が響いた。

彼の名前は简井 幸一。 もしくは“ Fenrir ”。

表側では眞面目で、善良な人間だ。今も、昔も。

しかし、裏側はまるで違つ。

彼は友人を売つた。

兼を卖つた時に得た報酬は多額の金だった。

彼は恋人を卖つた。

詩織を卖つた時に得た報酬は“Ragnarok”における地位だった。

彼は全世界を売った。

正田が約束した報酬は筒井自身の命のはずだった。

だが正田は突然、支払うものを変更した。<sup>クライアント</sup>

今、まさに彼の頭を貫いたもの。

そり、一発の銃弾が、彼の最期の報酬だ。

筒井 幸一は、床に倒れるよりも前に事切っていた。

## 第五十六話

### “ハティ”

「……………何故だ、正田」

羽下は正田の顔をじっと見つめていた。額から血を噴出している筒井には目もくれない。

「なんてことはない。そもそも彼に退場してもらひ予定だった、というだけだ」

彼はモニターを起動し、なにやら作業を進めていく。羽下は聞かずにはいれなかつた。

「……………正田、お前は 勝 つ つ も り で い  
る の か?」

正田は一瞬、動きを止めた。しかし、その次の言葉の無機質さから考えると、ただ、作業が終わつた瞬間だつたというだけかもしけない。

「静かにしている。大統領から通信が入つた」

「……………」

羽下は「ごく自然に右手を上げ、異議がない」と示した。

この一人の会話は聞かなくても分かる。

正田が“ CIAエージェントと思われるテロリスト”について大統領にまくし立て、大統領は大統領で“発射準備が整えられた核ミサイル”についてわめくのだ。

羽下は筒井の脇にしゃがみこんだ。

「…………馬鹿野郎が。何で正田なんかを信じた。これじや、詩織に申し訳がたたねえだろ？」「

彼は“ Fenrir ”のまぶたを閉じてやつてから立ち上がり、吐き捨てるように言つ。

「あいつは、お前の田を覚ますつて息巻いてたのによ…………」

彼はふと筒井の銃を拾い上げ、胸ポケットに納めた。そして、左手にぶら下がつて手錠を右手にもはめなおし、大統領が映つているモニターに目をやつた。

“…………これ以上、ニッポンの暴走を許すわけには行かない。1時間以内に武装を解除しなければ我々は“核”をつかう”だ。覚悟を決めておくんですな”

「彼らの国のテロリストについては何の説明もなく、いきなり宣戦布告とは…………そちらの強硬な姿勢はあるまじき行為だ。覚悟を決めておくんですな」

通信は切れた。

待つてましたとばかりに、羽下が嘲る。

「…………ハハ、茶番は終わったのか？」

「いいや、これから始まるんだ」

正田は再びモニターを起動する。通信相手は、三浦 和輝だった。

「三浦司令官。君達は何をやっていたのかね？ 羽下はここまでやすと進入して来たのだが？」

三浦は無表情のまま、頭を少し下げる。

「申し訳ありません。どうやら、羽下は私どもより何枚か上手だつたようです」

正田は不服そうに鼻を鳴らした。

「この次は、まともに働いてくれるのだろうな？」

「…………了解しました」

「早速だが、先程、“ルナ・ドーム”的“南司令官”が反乱を起しました」

「…………はい？」

三浦は目を丸くした。

「厄介な事に、あそこには大量破壊兵器が“いくつか”備わっている。そこで、先手を打つてこちらからあれを破壊する。すぐに“ハイ”発射準備にかかる」

「しかし・・・・・・！」

「説得にかける時間はない。一刻を争うのだ」

「・・・・・・了解、しました」

正田は通信をきつた。

正田が描いたシナリオはこうだ。

ルナ・ドームからのミサイル“レー・ヴァテイン”がワシントンを、アメリカからのミサイル“ゼファー”が東京を、日本からのミサイル“ハイ”がルナ・ドームを襲い、世界の大掃除が始まる。

何度も“大戦”かなんて気にすることはない。間違いない。“最後”なのだから。

一人残らず、破壊の渦の中で息絶える。

最初の一撃をややこしくした理由はいくつかある。

一つ。三浦 和輝だ。

彼が“始まる”前に気づいたなら、この計画は絶対に阻止される。三浦はそういう人間なのだ。

だから、彼を通してアメリカ合衆国にミサイルを放つわけにはいかなかった。だから、三浦の命令下にない部隊を形成するために、“ルナ・ドーム”を用いたのだ。

二つ。日向 政史だ。

彼は物事の中心から出来るだけ遠くにやる必要があった。これは大統領からの要望でもあった。

“彼がいたなら、私達の企みは見抜かれてしまう”といふことらしい。

だから。彼を“ルナ・ドームのトップ”とこう名目で用に送り込んだのだ。

三つ。安全な逃げ道を用意するためだ。

もし、仮に計画が途中で失敗に終わっても、正田に罪は降りかかるない。

正田が直接命じるのは、凶悪な反乱分子が占拠したルナ・ドームを破壊するということだけなのだ。

世界は、着々と“神々の黄昏”<sup>ラグナロク</sup>に向かっている。

その前に訪れるのが“フインブルヴェト”と呼ばれる、3度も続く恐ろしい冬。

この、3発の核ミサイルだ。

## 第五十七話

・・・・・最低

ルナ・ドーム

翔と隼は、電力が回復した5分後には、担当の情報を手に入れていた。

「よし、準備良いか?」

「…………ホントに“メイン”コンピューター室”に戻るの?」

葵は心底嫌そうな顔をしている。

「…………俺だって正直行きたくねえけど、ここはあまりに危な過ぎる」

「分かってるけど…………」

「都合よく、防護服もガスの探知機も“ここ”にあるし、大丈夫だよ」

この部屋の床下には、その一つのみならず、食料、武器、無線など、

必要なものは全て隠されていた。

「都合よすぎない…………ちゅうとは怪しまないの？」

葵は気に食わなかつた。この危険のにおいがふんふんする状況も、全く同じタイミングで吹き出した“男ども”も。

「…………何よ？？」

「あのわあ、哲から、“罠に対する対処法”教わんなかつたの？」

「全然。…………教えて？」

“男ども”は顔を見合わせ、再び一ヤツと笑つた。

“あいつと何とかなると思つて”

“迷わず罠に、身を投げろ！”

葵は興味を持つたことを後悔した。そんな彼女の表情がまた可笑しかつたらしく、翔と隼は大笑いしている。

「…………馬鹿鹿じやないの？」

この冷たい一言で、一人は急に神妙な顔になつた。

「まあ、それは冗談として、ここにいるより外のガスの中にいた方が安全なんだよ」

実際、三人とも、いつ南に殺されてもおかしくない状況にあるのだ。

それには、葵も同意せざるを得ない。ただ、どうしても、罷にかかりにいくという行動には賛成できなかつた。

「でも・・・・・・・・・・

「へどいねえ、君も」

隼が困つた顔で言つ。

「信用しちよ。俺も、翔「ハイツも、全くの馬鹿つて訳じやないんだからさ

「・・・・・・・・・・考えがあるなら教えてよ

葵は憂鬱そつに言つたが、隼は茶化すように返すだけだった。

「それじゃ、面白くねえだろ?」

葵が目を限界まで細めて彼を睨んだが、結局何の答えも返つてこなかつた。

“哲そつくじ”

あえて声には出さなかつた。

葵にとつて残念なこと、通るルートも皆と同じだった。

つまり、薄汚い通気孔である。

“…………最低”

「え？なんか言った？」

「…………別に」

一度田だらうと“慣れる”といふことはない。

葵の“不機嫌”的オーラを感じ取つた一人は、黙つて先へ進んだ。

ところが、これは罠だった。

すぐに命を奪うための罠ではないが、確実に二人を使える

ものにする罠だ。

南は彼らの動きをしつかり把握していた。

確かに、三人は彼らを見張るための盗聴器、監視カメラを破壊できる。

だが、彼らを追尾するのに全く手段が無いわけではないのだ。

そう、彼らに仕掛けられた“旧式の発信機”は、何事もないかのように信号を送り続けていた。

## 第五十八話

### 埒が明かないな

南は薄笑いを浮かべながら、ルナ・ドーム“本部”の地図を見ていた。

点滅する二つの点が“メイン・コンピューター室”へと向かっている。

「全く、愚かだ」

彼がそう呟いた時、司令室の扉が開き、日向 政史が怒りに震えながら入ってきた。

「…………南

「田向議員」

南は敬礼をした。が、蔑むような目のおかげで、敬意は微塵も感じられなかつた。

「今すぐ作戦を中止しろ」

田向の言葉には何か込められた力があつた。静かで、尚且つ力強い、命令だつた。

「残念ですが、それは出来ませんな」

南の言葉には、可能な限り侮蔑の響きが含まれていた。敬意の込められていない敬語ほど、人の神経を逆なするものも少ない。

「“非常時”に司令官に命令を下せるのは、首相お一人ですので」

日向は田を開ける。“覚悟”をした田だった。

「…………それでは、強硬手段をとらざるを得ない。動くな、南」

相変わらず日向は冷静だった。恐ろしい今までに。南は表情をこわばらせた。

「…………何のつもりですか？」

「私は今、特殊爆弾の起爆スイッチを握っている」

南はむなしでの田向を胡散臭そつに見つめた。それに気づいた田向は両手を広げて見せる。

「言葉のあやだ。・・・・・・・・その特殊爆弾には、『ルナ・ドーム本部』を破壊するだけの力がある」

「・・・・・・・・・・・・」

南は正田の予想が完璧に的中しているので驚いた。

「それで、どうなさるおつもりですか？ 田向議員」

「・・・・・・・・・・・・もつ一度言ひ。作戦を中止しろ」

「それは脅迫ですか？」

「・・・・・・・・・・・・やつだ」

「状況の整理をしましそう。今、日本とアメリカの間で戦争が始ま

つた。私たち生き残るには、“撃たれる前に撃つ”しかない。私はミサイルの発射の全権を任せられていて、貴方はそれを阻止しようとしている。貴方は特殊爆弾をどこかに隠し持ち・・・・・・

「

南の日が鋭く日向を観察した。彼が知りたいのは、特殊爆弾が“何処に”あるのか、ということだけだった。

「・・・・・・・・・作戦を中止しなければそれを爆破させる、といつわけですか」

田向の日が南をじっと見つめた。真意を推し量るよつて。

「・・・・・・・・・概ね、正しい。ただ、生き残るために考えが間違っているだろう」

「貴様の理想論を聞くつもりはない。その脅迫に屈する氣も」

「南・・・・・・・・?」

南の声の温度が明らかに下がった。

「特殊爆弾はゼリであるのだ？」

「……………作戦を中止しろ」

日向の表情がぐっと険しくなる。南はついに嘲りを前面に出して笑つた。

「全く、埒が明かないな」

彼は先程まで見ていた地図を指差す。

「ここの、点滅している光が何か分かるか？」

日向は怪訝な顔でそれを見た。ルナ・ドームの地図であることは分かつたが、三つの光が何をしているのか、見当もつかなかつた。

「……………なんだ？」

「貴様の娘と、その仲間がここにいる

日向の体がぴくっと動く。南は勝ち誇った顔で彼を見ていた。

「彼らは“Panikhida”防護服を着て、メインコンピューター室に向かつた。何かをやらかすつもりらしい」

日向は内心ほつとした。少なくとも葵は“防護服”を着ている。

「…………それで？南」

「失礼、言い間違えた」

南の唇がめぐれ上がった。

「“防護服だと持つているものを着ている”だつた。彼らが着ている服には、“Panikhida”を防ぐ力はない」

田向の顔から血の気がうせる。勝ち誇った南はさらに続けた。

「娘の断末魔が聞きたくないのなら、大人しく在り処をはけ」

田向は両拳を握り締めたまま、地図上の点滅していく二点をじっと見つめ続けていた。

彼の中の相対する二つの思いがせめぎあっていたのだ。

南はなんだ笑みを浮かべ、その様子をずっと見ていた。

# 第五十九話

・・・・クソッ

日向は顔をしかめたまま繰り返した。

「…………状況の把握が出来ていないらしくな？」

南は明らかに田向を見下していた。

「貴様、自分の娘を殺すつもりか？」

い る の か ? 「 ． ． ． ． ． ． 南、 本 当 に 葬 は そ こ に

田向は南をじっと睨みつける。が、彼には動搖や焦りは微塵も感じられなかつた。

「……………此二డヵルハ。田畠れど……………」

南は部下を呼び出した。

「はい」

「日向氏に、『向日葵』の声を聞かせて差し上げる。確か、**最新型**のは壊されなかつたと思うが？」

「はい。了解しました」

実際に機械的な男だつた。

「…………最新型？」

「盗聴器だ。奴らは隠された盗聴器を破壊する手段を持つてゐるのだが、**最新型**のだけは破壊を免れている」

「ほひ…………それで…………」

“ プツッ ”

この部屋のスピーカーが動き始めた。

“ ……翔、なんか、変な音、しない？”

葵だつた。

漏れる音じやねえのか？”

“まさか、ばれた！？”

緊縛する葵の声とは逆に、隼の声は落ち着いていた。

途中までは。

隼の苦しそうな呻き声。倒れる音。

“隼！？”

“伏せろ！！！”

翔が叫んだ。

“Panik hidā”は上から満ちてくる！

“でも！私たち、防護服を・・・・・・・・”

“ 嵌められたんだ！！！”

隼の歯を食いしばる音が聞こえる。彼は叫ばなかつた。

“ . . . . . テメエ . . . . . ら . . . . .  
. ! ”

“ 隼！”

“ . . . . . 部屋から . . . . . 出り . . . . .  
. . . . ! . . . . 早、く . . . . . . . . ! ”

ブチイ！――！

ドサ

“ 隼！――！”

“ . . . . . 行くぞ、葵”

“ でも . . . . . ! ”

“ 早く！――！”

葵は唾を飲み込んだ。

二人が床を這う音。

ガチャー！

“ 駄目！！ロックされてる・・・・・・！”

“ ・・・・・・・・クソッ”

直後、葵が息を呑んだ。

“ グ・・・・・・・・！！”

翔が呻く。

葵が悲痛な叫び声をあげた。

“ ・・・・・・・・あおい・・・・・・・・！！”

二人の声はぱたりとやんだ。

後には凄まじい静寂が残された。

息を呑んで耳を澄ましていた日向は呆然と膝をついた。

「葵…………？」

「まだ、助かるも知れないぞ。今貴様が爆弾の在り処をはけば、すぐには彼女を治療して助けてやるつ」

南は相変わらず冷たく笑っていた。

だが日向は知っていた。

“Panik hid”を無効化する手段はガスに触れる前に解毒剤を打つしかない、ということを。

今、ガスの中に倒れた葵を助ける手段はない、ということを。

日向は顔を上げた。

憎悪の表情だった。

彼は怒鳴つた。

「“DAMN IT”!!!」

実のところ、特殊爆弾は彼の体内に仕込まれていた。

そして、この罵りこそ、起爆スイッチだったのだ。

田向は南を睨みつけながら、頭の中で最後の十秒をカウントした。

## 第六十話 全ては「」の時のため

爆弾はルナ・ドーム、「」と正田の計略を吹き飛ばすはずだった。

だが・・・・・・・・

「・・・・・・・・？」

爆弾は爆発しなかった。

日向は驚愕の表情で腕時計を確認する。それは爆弾のスイッチが入った瞬間に残り時間をカウントするようになっていた。

もちろん、通常では何の表示もされていない。

確かに、爆弾の起爆装置は起動していた。

「・・・・・・・・・なんだとー?」

“ 〇〇秒 ”

時計にはそれしか表示されていなかった。

勝ち誇つた冷たい声がする。

「……………じひせり、不発のよつですな、日向議員」

南は再び部下を呼んだ。先ほどの機械的な男がやはり機械的に入ってきた。

南はたじろぐ日向を指差した。

「この男が作戦の妨害工作を企てた。逮捕しろ」

「はー」

男は敬礼すると、ポケットから手錠を取り出し、日向の後ろに回る。切り札を失つてしまつた日向はおとなしく手錠をかけられるしかなかつた。

が、彼の田はまだ死んでいない。

「……………南、このまま終わると悪いな……………」

日向の言葉に、南は再び歪んだ笑みを見せた。

「そうか…………おこ」

南は日向に手錠をかけ終えた部下に声をかける。

「はい」

「日向議員を“メイン・コンピューター室”まで『案内しろ』

「…………？」

驚く日向を尻目に、軍人は領き、彼の腕を掴んだ。

「自分が引導を渡した娘の、苦痛の表情をとくと拝ませてやれ」

南は勝ち誇った顔で、血の氣の失せた日向を見ていた。

日向は引きずられていきながらも、何か言おうと口をパクパクさせていたが、結局何も言葉が出てこなかつた。

日向は負けたのだ。

正田の恐れていた人物が4人いた事は既に話した。

その4人とは、言うまでもなく“L.O.K.I.”。

そして、全ての設備を作った男、石井 一。

軍人の中の軍人、三浦 和輝。

最後に、この日向 政史だ。

今、正田たちはその全てをかわし、ミサイル発射に踏み切ろうとしていた。

アメリカで、

東京で、

そして、月、“ルナ・ドーム”で。

全てはこの時のためだ。

この三発のために。

ミサイル発射まで・・・・・いや。

世界の終わりが始まるまで、5秒

4秒

3秒

2秒

1秒

## 第六十一話 そんな、馬鹿な

ミサイルの発射ボタンが押されたとき、アメリカ、日本、ルナ・ドームにいた兵士達は、世界が終わったのだと感じた。

突然、目の前が真っ暗になり、永遠に光が失われたように思えたからだ。

これが、“神々の黄昏”、“ラグナロク”なのだと。

だが、すぐに何かがおかしいと気づく。

それは、自分の呼吸音だったり、時計のバックライトだったり、隣の同僚の気配だったりしたが、明らかに彼らは生きていた。

世界が終わったのに、自分達だけ生き残ることなどあり得るだろうか。

大多数が自分の手を顔に当てている頃、電力が復旧した。

次々と再起動するモニター や、計器類の明かりが彼らの目を眩ませる。

しばらくしてから、彼らは何が起じたのかを把握する。

かつて大国は、“Fencer”と“Logi”を止めるためだけに、国の電力を全て止めるといつ暴挙に出た。

そして今、ミサイルを止めるために、軍の設備だけが電力を奪われたのだった。

三つの場所で。

予備電源に切り替わり、制御コンピューターが再び動き出したとき、事態はやうに悪化する。

「…………!? 制御コンピューターが…………」

“それ”は暴走を開始したのだ。

人がどれだけキーボードを叩こうと、電源を絶とうと、それは止まらなかつた。

「まずいぞ！……！」

彼らが叫んで制御を取り戻そうとしている間に、それは全ミサイルの発射準備を整えていく。

ほんの数分間の出来事だった。

男達が必死に行つた作業も虚しく、死を無限に積んだミサイルは飛び去っていく。

本当の世界の破滅。

各地の歴戦の司令官達は絶望し、頭を抱えて座り込んでしまった。

ただ一人、南を除いて。

彼は画面を睨んで立ち尽くしていたが、コンピューターの暴走が止まつたことを直感的に知っていた。

彼は落ち着いた声で命じた。

「……………着弾点はどこか調べろ」

彼の言葉に我に返つた兵士が、調査を開始する。南にはそれがとてものろく感じられたのだが、実際はほんの一瞬だった。兵士は即座に報告した。

「……………判明しました。着弾点は　あの  
短時間でなされた計算が正しければ、ですが　太陽です。全弾、  
太陽に向かっています」

南は目を閉じ、拳を握り締めた。

彼は、他の場所でも同じ事態となつていることを知らなかつた。

だから思つた。

日本は焼き尽くされるが、アメリカは無傷だ。

これでは過去の戦いと殆ど同じではないか、と。

彼が目を開けたちょうどその時、背後で声がした。

「安心じいよ、南さん」

その声に、南の筋肉が一瞬で硬直する。

そんな、馬鹿な。

## 第六十一話 またお会いしましたね

「最近は、かなり面白いことが多くった。

それでも、今の南の顔は一、一を争つ面白がだ。

彼はよみよみと後ずれる。

「……………」石井 哲……………

「またお会いしましたね、南サン」

幽靈を見たかのような顔の南に、僕は穏やかに言った。

「ちなみに、俺は幻ではありませんよ」

「何故だ!? お前は“Panikida”の中に……………

・

「あのガスにも、弱点があるだけですよ。そして、俺と“O.D.i.c.”の運も良かった

「…………」

南は有能な人物だ。この短い間に、落ち着きを取り戻しつつある。“Odin”も生き残ったことを知らされても、余計なことを言わないよう自分を押しとどめている。

「あれの弱点は二つ。空気中では一時間しか持たない」と、死んだ人間には何の作用もないってことです」

彼がじりじりと動き出したのには最初から気づいていた。でも、僕は話し続けた。

「この二つを結びつければ、どうすればいいのかは見えてきます。俺達は、ガスが存在する一時間の間だけ、死ねば良かつたんです」

何かを狙っている南も、この言葉には関心を持つたようだ。

「なんだと？」

「「」の薬を使いました」

僕は胸ポケットから、黒と白のカプセルを取り出した。これは、人を仮死状態に陥らせる薬。いや、その表現は間違っているかもしれない。

人を限りなく死に近付ける薬だ。

“Tarsier”は“戻つてこれない可能性”を危惧していた。

実際、俺も“Odin”も“逝き”かけた。

「…………一時間半、呼吸、鼓動、思考を停止させ、生き残れた、というわけですよ

「必殺の、死んだ振り作戦、というわけだな」

南は急に皮肉っぽい調子を取り戻した。僕は再び笑いをこらえなくてはならなかつた。あまりにも見え見えだ。

「そう、ですね。ところで、俺が言った“安心しろ”って意味、分かりました?」

「いや、全然だ。哲君

今や彼は勝った氣でいた。思い切りこちらを見下してくる。

「あんたらの計画は完全に潰れたんですよ。今回、人間に向けて発射されたミサイルは一発もありません」

「…………なるほど」

悪い癖だと思つ。南はいつも、“チェック”と“チェックメイト”が別であることを忘れるのだ。

その上、盤面に自分の駒が多く見えたというだけで、自分が優位だと思つている。

彼がかけた“チェック”は、自分の部下を呼び出すことだった。

僕にとって見れば、それは予想通りの手だった。

どうでも良いかもしねないが、この長々しい化かしあいの勝負も、  
そもそも“詰み”だ。

僕は笑顔を見せた。

「『』の勝負、俺の勝ちです。南サン」

南はそれを嘲笑つた。

「どうかな？」

その瞬間、この部屋のドアが蹴破られ、武装した男どもが乱入してきたのだった。

## 第六十三話 “詰み”だ

勝ち誇つた南は、“それ”に気づくのが一瞬遅れた。

武装している7人の銃口が、全て自分に向いている、といつ事実に。

「…………？」

ついあがっていた唇の端が徐々に下がり、目が見開かれていく。

彼は暗視用のゴーグルで顔を隠した男達を順番に見た。

疑惑が確信に変わり、さらにそれが驚愕に変わる。

「まさか…………！？」

僕のすぐ横にいた男が、にやりと笑って銃をおろし、ゴーグルを取つた。

「はじめまして、 “South·Porte”」

「“Odin”！？！？」

残りの6人も次々にゴーグルを取る。

詩織、未来、“Tarsier”、そして翔に、隼に、葵だ。

隼は自分の足を見た。

「いたのは確かだね」

未来が楽しそうに笑う。

「でもね、南サン。どんな毒にだつて、解毒剤はある。それを忘れ

ちゃいけないね」

未来はしつかり仕事をこなしたのだ。

僕が頼んだ、 “ “ F・F ” メンバーに解毒剤を配る” という仕事を。

誰一人、死にはしなかった。

南が聞いた悲鳴にしたって、単純な話だ。

あの盗聴器は、壊せなかつたのではなく、断末魔を聞かせるために残されただけだったのだ。

「うちの馬鹿兄貴が言つたの、聞いてなかつたんでしたつけ？ “ 相手が聞こえるものをコントロールできる” んですよ、私たちは」

未来は例の携帯電話サイズの機械を取り出した。

彼女はこれの “ 達人 ” だ。極めているといつても過言ではない。

僕には、雑音や静寂を“聞かせる”ぐらいしか出来ないが、未来は会話や声、物音まで混ぜた“音”を作り出す。

想像もしたくないが、人間の耳をこまかす様な“音”は、いつたいどれほどのデータ量なんだろう。天文学的な数字になるのは、まず間違いない。

そのくらい人間の聴力は纖細だし、デジタルデータってモノは雑だ。

それをいとも簡単にやってのける未来は、正直、人間とは思えない。

人間離れした少女が、にっこり微笑む。

「お分かりですかね、南サン」

その時、部屋の扉が開き、一人の男が入ってきた。

南の敗色はさらに濃くなる。

「…………日向…………！」

日向政史は少々青ざめている。

「…………南…………」

一人はじつとにらみ合つた。

いや、南の憎悪の視線を日向が静かに受け止めていた、とでも言おうか。

「…………南。正田と話がしたい」

「無理、だ。地球との通信はとっくに途絶えている。犯人は分かつているがな！」

思い切り睨まれた僕は肩をすくめる。

「とっくに回復させましたよ。もう両国にミサイルはありませんし、ルナ・ドームの兵士達も制圧させてもらいましたし、ね」

制圧、というか、無力化、というか。計画通りなら、“Tarsier”的催眠ガスが全兵士を眠らせたはずだった（でも、例外がある。日向をメインコンピュータ室に連行した一人は、詩織の手刀の

餌食になつた)。

とにかく、南には、動かせる駒が一つも残つていなかつた。

敵の“キング”を倒すのではなく、全ての手駒を奪い、敵の

勝機を完全に0にすること。

これもある種の“チエックメイト”。

“詰み”だ。

## 第六十四話 それだけです

完全なる敗北を喫した南には、もはや選択権などなかつた。

彼はモニターを起動させ、地球との通信を始める。

程なく、正田の顔が画面に映る。

“・・・・・” “Lok-i” か?

「はい。石井 哲です」

正田は深々とため息をついた。

“全く、余計なことをしたものだな。大人しくしていれば、気づか  
ないうちに蒸発していたのに・・・・・・”

「・・・・・・・・・ 残念だが、まだ死ぬときじゃないんでね

“それで“Lok-i”、どうするつもりかね?”

正田は皮肉っぽく言つ。

“ 私を殺しても、貴様らが犯罪者となるだけだ。国民は総理大臣が殺されたことを知るだけで、私の計略のことは何も知らない ”

「 ・・・・・・・」

正田が笑う。

“ 貴様らが命を助けた馬鹿どもは、どんな態度を示してくれるだろうな？”

「 ・・・・・・なめんなよ、正田」

“ Odin” だった。

「 僕達がヒーロー願望に取り付かれて、あんたらを止めたと思つて  
るのか？？」

“ そうでなかつたらなんなのだね？ヒーロー気取りであつたことぐ  
らい認めたらどうだね？”

「正田サン。俺達はヒーローって柄じゃないですよ」

僕は愛想良く笑った。

「ただ、黙つて死ぬ気はなかつた。それだけです」

正田と僕の視線が一瞬絡まり、彼からの憎悪がビックリと送られてきた。

「それで・・・・・・・・・・ビツするか、でしたよね？」

正田は黙つていた。

「俺達はあなたを殺すことにはしません。そんなことに対する意味はありませんからね」

“それで？”

「これ、なんだか分かりますか？」

僕は黒いメモリーを見せた。

「これこそが、正田を破滅させる、僕の切り札だ。」

「何だそれは？」

それまで黙っていた日向が、この時ばかりは口を開いた。

「…………この計略がどんなもので、どんな戦いがあつたのかが詳しく書いてあります。書いてないのは、俺達の実名ぐらいです。全てが書かれているといつても大丈夫な資料です」

正田が責ざめる。「これは、正田を社会的に抹殺できる代物なのだ。

“…………それをマスク!!!に公表するといつのか…………”

「そうです。これであなたは終わりだ」

正田はびざつと首もたれに寄りかかった。

うつむいた顔に影が入り、表情は全く読めない。

しかし、彼は唐突に笑い始めた。

“ クツクツク・・・・・・・・・ ! ! ! ”

「 おい、おっさん！何がおかしい！！！」

“ Odin” がすごんでも、笑いは止まらない。

“ ウワツハツハツハ ! ! ! ”

僕らが見つめる中、敗北したはずの男は笑い続けていた。

その様子は、不気味以外の何物でもない。

「狂つたのか……………？」

隼は心配そうに画面に映った男を見上げている。

違う。

正田は狂つてなどはない。

彼は切り札を見つけたと思つていて。

僕の“メモリー”という切り札を打ち碎く切り札を。

男は笑い続けている。



## 第六十五話　Iのクソヤロウ

“君の手は、それで終わりかね？哲君”

正田は勝ち誇っていた。相変わらず、“正田側”の方々は単純だ。

南も、斎藤も、そして正田も。どうもいつも、すぐに勝つたと  
思い込む。

「…………あなたに対する手は、これでチョックメイト  
です」

僕は“あなたに対する”の部分を非常に強めて言った。が、正田は  
それに気づかない。

“残念ながら、チョックメイトにはまだ早いー”

「そうですか？まあ、最後の時間をゆづくつと楽しんでくださいー」

段々といつぞうじてきた僕は、一方的に通信を切った。

振り返ると、一同が驚いた顔を見ていた。

「…………？」

「あ、忘れてた」

ぽんと手を叩いた詩織が、つかつかと近づいてきて、ほんの半歩ほど之間合ひを取つて止まる。

「…………何を？」

何の前振りもなく、僕は右の頬をぶん殴られた。一瞬身体が宙に浮くほど強烈に。

「…………」

したたかに背中を打ち、倒れたままじみじみせ出せない。

グイッと胸倉を掴まれ、体を起こされる。

「言つたでしょ？一発ぶん殴るって

脳震盪を起じたらしく、視界がぐるぐる回っていた。

「…………普通、このタイミングで殴るか…………  
…………のクンヤロウ…………」

「おんなじの喰らいたくなかったら、せひわざと全部喋んなさい。なんであんたが今生きてるのか、なんで正田があんなに勝ち誇ってるのか、あんたが何を考えてるのか。全部!」

「それと、今までの」と、一つ一つ説明してもらひこましよつか?」

未来が笑顔で怒っていた。正直、それで一気に頭がはつきりしてき  
た。

「あー…………最初に…………心配かけたこと、  
謝つとうつか?」

「死んで償つて」

「未来? 笑顔で言つと、その台詞、だいぶ強烈だけど?」

詩織が僕の耳元で囁いた。どうやら、妹の逆鱗に触れてしまつた僕に、救いの手を差しのべる気になつたらしい。

「さつさと話し始めた方が良いよ。未来、怒ると怖いから」

そして、僕の手を引つ張つて立たせてくれる。“既に怒つてるんだけど”という言葉を飲み込み、僕と“Odin”的賭けを説明した。成功と失敗の割合が五分五分だったことも。

「…………と、いつまで、何とか生還したって訳

僕が話し終わるか終わらないかというタイミングで、未来が冷たく言った。

「じゃあ次。正田が勝ち誇つてる訳」

僕はムッとしたが、詩織が無言で首を振つていて、反論はやめた方がいいと思った。それで、すぐに話しかめることになる。

「…………正田は、盤上に残つてゐる駒を発見したんだ。チエスで書つてるのは“クイーン”…………“大統領”つて駒を

そう、正田は彼と組むつもりなのだ。

僕達を止めるのは簡単だ。地球に帰るシャトルを、途中で落とせばいい。

僕がここまで説明すると、翔が不思議そうに口を挟んだ。

「でもさ、それなら、大統領なんかと組まないで、自らの軍隊に命令すればいいじゃないか。昔みたいに、ミサイルがないわけじゃないんだからさ」

「…………正田が、恐れた人物が3人いる。一人は“ルナドーム設計者”石井一

未来と詩織がぴくりと動いた。が、僕は無視した。

「もう一人は、こちらにいる、日向政史氏」

日向は押し黙っていた。案の定、知っていたらしい。

「そして、もう一人は、三浦 和輝だ。お前の親父だよ、翔。彼が軍を統制している限り、正田が俺達を落とすことは出来ない」

「親父が！？」

「あれだけ正義感の強いお偉いさんも珍しい。間違ったことだと思つたら梃子でも動かない、なんてな」

“Odette”は興味深げな声だった。僕は思わず、ぼそりと呟いた。

「それを息子も受け継いじゃつて、めんじくせいつたりありやしない」

「哲、なんか言つたか？」

翔は実際聞こえなかつたらしい。

「・・・・・・・なんでもねえ。とにかく、勝ち誇つているのは、俺達に対する手を見つけたからだ。敵国の軍隊に撃墜させるなんていつ、無茶な策ではあるけどな。で？次なんだっけ？」

「哲が何考へてるか

「…………そこは、お国に帰つてから心配つゝや」

そんなことを説明したたら、僕達は地球に帰れなくなってしまった。

僕は部屋の照明を落とし、壁にシャトルの映像を[写]しだした。

「こなんしかないからさ、生きて帰れるかどつか…………」

僕が映し出したのは、緊急時の救命シャトルだった。本来なら、別のシャトルが救出に来るまで宇宙空間を漂つているためだけのものだが、スペック上では一応、大気圏の突入も可能といつことになっている。

「ゲゲッ！そんなんで帰れるの？」

「うぬやこなあ、他にないんだよー。」

皆が心配わうな顔でシャトルの写真を見上げている。

“あらり・・・・・・・・ま、信用しろとはいえないし・・・・・・”

ふと“Odin”を見ると、彼はいつものように笑った。本当に楽しそうに。彼の目はこう言っていた。

“大丈夫だよ、相棒。今まで俺らは勝つてきただろ?”

だからこそ、心配なんだろが。人間勝ち続けるのは不可能だ。

僕達の“賭け”は終わってくれない。

ところで、その頃、大統領はシェルターの中にいた。

## 第六十六話 “完了”

大統領は狂っているのかもしれない。

そんな噂が、彼の側近や軍司令官の間でまことしやかに囁かれている。

彼がある夜を境に、変わったのは事実だ。

とはいって、国民から見て分かるほど変わった、というわけではない。

彼のじく近くにいる人間が、微かに感じる程度の変化だった。

目が、変わったのだ。

温度がなくなったと人は言つ。

その数日後、大統領は正田と計画を練り始めた。

“ラグナロク”を迎えるための、破壊のシナリオを。

そして今、彼は全てを遮断するシェルターの中の暗闇で一人、“黄昏”を待っていた。

正田でさえ、自分の妻子をシェルターの中で保護したのに、彼は一人だった。

「…………おかしい。こんなにも、静かなものなのかな？」

彼は通信を完全に切っていたので、何も知らなかつた。彼は正田と違つて、失敗したことなど考えていなかつたのだ。

彼は頑なに信じていた。

“人類は滅びるべきだ”と。

そう、彼は神託を受けたのだ。その日を境に、彼の思いはそれにしか向いていなかつた。

人の生み出す闇、醜さ。

戦に明け暮れる者たち、欲におぼれる者たち、自分が世界一不幸だ

と信じてゐる者たち、それに、他者の足を引っ張ることで満足を得る者たち。

今、この瞬間にも、人は死んだり、苦しんだりしている。

しかも、ほとんどは人が招いた災厄によつて。

「……………人は、滅ぶべきなのだ……………」

「・

“ そりかもな ”

突然、彼の目の前にあるモニターの電源に入る。

「 何だ！？この部屋は……………」

“ 完全に遮断されてゐる。まあ、確かに。軍の連中もあんたの居場所、必死で探してゐみたいだぜ？”

大統領はモニターの眩しさに目を細めた。そこには、東洋人の少年がにこやかな表情をして映つていた。

「お前は・・・・・・・・？」

“俺は石井 哲。・・・・・・・・・・・・・・“Look”って言った方が分かりやすいですか？”

大統領は息を呑んだ。最大の敵と思っていた奴が、こんな少年だと  
は思つていなかつたのだ。

“どうやら知らないようだから教えておきましょう。あなたと正田  
の計画は失敗した”

「・・・・・・・・失敗、だと？」

彼は“そんなことはありえない”と思つていた。“自分は神に命じられ  
たことをしたのだから”と。

しかし、哲は冷たく言った。

“失敗です。残念ですが、あなたは“神の言葉”とやらを勘違いし  
た”

「勘違い……………！？」どう勘違いしたと言つのかね！？  
人類を滅ぼせ”といつこのみ言葉を！…」

哲が“神託”のことを知っているのはなぜか、などといつことは彼にはどうでもよかつた。

ただ、哲の冒涜と、中傷が許せなかつたのだ。

「人は滅びるべきなのだ！！君自身、さつき同意したではないか！  
！」

哲は静かに言った。

“ そうです。人は滅ぶべきだ。それでも……………”

静かな声とは反対に、表情は特に目は、ものすごい力を帶びた。

“ 世界は滅ぼすべきではなかつた。あなたのミスは、“核”で全てを焼き尽くそうとしたことだ”

「？何を言つてゐるんだね？人類を滅ぼすべきでも、世界は滅ぶべきではない、と？」

“あなたもやはり、人間中心の考え方をなさりますね。人と世界はイコールで結ばれませんよ”

大統領は目を閉じ、頭を振つた。

「すると、君は死すべきは人間だけと言つのかね？」

“ そうです。地球上に生きる数多の生物、植物を滅ぼす理由はありません”

「馬鹿な男だ！そんなことが可能だと思つてゐるのかね！？」

大統領は激しい口調で言つた。

「人も生物だ！動物達と同じように生きている！その生物を滅ぼすほどの力が加われば、他の生物にも影響が及ぶのは必然！お子様の理想は通用しないのだ！！」

“それが可能かどうか、今からやつてみるん

ですよ”

少年は歪んだ笑みを浮かべていた。大統領は寒気を覚える。

「…………どうして」とだ・・・・・・・・?

答えはなく、画面は消える。

「…………?」

画面にパーツと数字が並んでいき、スピーカーから不思議な音が聞こえてくる、

大統領は訝しげに画面に見入っていた。

・・・・・・・・パシュン

画面に“完了”の文字が表示されたとき、大統領の表情は消えていた。

彼の心臓は鼓動を続け、彼の肺は空気を吸い込んだり吐き出したりしていた。

血液は体中をめぐり、酸素を細胞に供給していた。

だがしかし、彼は死んでいた。

彼の脳は とくにものを考える部分は 完全に機能を停止していた。

彼はもう、感じることも、考えることもしない。

10秒後、“完了”の文字も消え、シェルターの中は完全な闇にとらわれた。

## 第六十七話 答えは、“Yes”だ

僕はコンピューターを置いたまま、シャトルの操縦室に戻った。そこでは、翔、隼、“Odin”がシャトルの軌道を計算していた。

「計算、終わったか?」

「ああ。もう、15分ぐらいで出発だ。長いトイレだったな

「まあ、ね

僕はドカリと腰を下ろし、シートベルトを締めた。

「翔と隼、皆さんと」行つていいぞ。俺と“Odin”で十分だ

翔は何の疑いも抱かなかつたが、隼は僕をじろりと睨んだ。

「哲・・・・・・・・・・・・

「分かつたよ! 勝手にしろい

翔はそんな隼を見て、途端に不思議に思つたらしく、立ち上がつた姿勢のまま止まつてしまつた。こいつだけは、なんとしてもここから離れさせなければならなかつた。

「こいつ、俺の操縦の腕が信用できないんだと…まさか、翔までそんなことまさぐつもりじやねえよな？？」

僕がふざけたように言つと、翔は笑つた。

「何だ、隼、そんな心配してんのか？？馬鹿馬鹿しいー俺は血とじで屈眠りでもしながら到着を待つよ」

彼が出て行つた後、  
“Odin”が呟いた。

「操縦の腕? へへ!」こつは機械で飛んでんだつづーの一・

「うむ。ナニヤー………」  
ベルトは締めたか??

部屋との通信を取ると、監督が口々に同意した。

「よーし、じゃ、大船に乗つた気分で待つていてくださいな」

と、既がなぜか曖昧な声を出した。

「おい、何だよそりやー!?

「暫、あと20秒」

“Odin”は冷静に言った。すると、未来らしき声がいついた。

「あ、“Odin”ってか洋介君は信じてるかひー。」

僕は通信を切った。

「あ、ひでーな。今俺がお礼言おうとしてたの」「

「カウント一」

「はいはい。10秒前」

テンカウントの後、シャトルは発射された。

同時に、僕は正田との通信を開始する。

「どうも。今、シャトルが発射しました」

“ 愚かだな。君は死に向かつて飛んでいる”

「お知らせじとひと思いまして。大統領は、死にましたよ

“ ・・・・・・何・・・・・・!?”

「正確には死んでないですが、もう、考える」とも、感じることもないでしょう。それは死に他なりません」

“ ・・・・・・”

「まさか!?

“ Odin”が大きな声を上げた。

「うぬせござ。今は正田さんとしゃべってんだ」

「あれを使ったのか！？あれを！？」

「あれ・・・・・・・・？」

隼は怪訝な顔をしたが、僕に構う気はなく、“Odin”にそんな余裕はなかった。

「おい！… そうなのか！？」

「ただの実験だよ」

何故だか分からぬ。ただ、“Odin”はたじろいだ。目を見開き、顔を恐怖に染めて。僕は怪訝に思つたが、口を開く前に、彼は目をそらした。僕は出ばなをくじかれ、何もいえなくなってしまった。

沈黙の後、結局、僕は正田に向き直った。

「さて、正田さん。一つだけ、教えてください。何故、あなたは大統領を助けたんですか？」

正田はため息をつくと、僕の顔を睨み返してきた。

“決まつていいるだろ？・・・・・・・・人類を滅ぼすためだ”

「ええ。ですから、その理由をお伺いしてんです」

“・・・・・・・・大統領と話したか？”

「はい」

“なら聞いたはずだ。人は醜い。汚い。生きる価値がない。だから滅ぶべきだ。理由として十分だと思わないか？”

「そんなはずはない！－！」

叫んだのは隼だった。

「あんたは、一部の人間の、一部の部分を、人間全体であるかのように戸に言つてるだけだ！」

“だとしても、真実だ。誰かの一部であるなら、全ての人がそれを

持つているのだから”

「そんな馬鹿な！皆が同じ可能性を持つているだけでものを持つていてわけじやない！」

二人は激しく論じ合っていた。僕は妙に静かな気持ちでそれを眺めていた。

どんな議論も僕には、もう関係ない。

答えなんて、とっくに決まっているのだから。

そう、僕が“Loki”を名乗った、その時から、揺るがないものがある。

人は滅ぶべきか、否か。

答えは、  
“  
Y  
e  
s  
”  
だ。

## 第六十八話 僕は“Look”だぜ？

「俺は…………仲間を殺されるのが気に食わなかつただけだ」

僕がそう呟くと、議論していた二人がぴたりと口をつぐんだ。

「だから、あんたらを止めた」  
「コンピューターが稼働しているときの、独特の音が聞こえてくる。

そう、僕のもつとも大きな理由は、それだつた。神に誓つてもいい。僕は、仲間を護りたかったのだ。

が、視界の隅で、“Odin”は右手を持ち上げたのが見えた。そして銃声が響く。あるいはとか彼は、正田が映つてゐる画面を撃ち抜いたのだ。当然、通信は切れ、システムはダウンする。明かりさえもなくなつた。

「おま…………！馬鹿野郎！マジで死ぬぞー？」

隼が慌ててシステムを立て直そうとしていたが、“Odin”はそ

れを無視した。暗闇の中、彼の齧すような声が聞こえてくる。

「…………… “Look”、芝居なやめよ!せ

「…………… 何の話だ? “Odin”」

その時、隼が再起動を成功させ、明かりがともる。彼は拳銃の狙いを僕のこめかみに定めていた。

「分かつてんだろ? お前の下手な芝居をやめろって言つてんだよ

「芝居なんざいつひやいねえぞ。そして、嘘もついてねえ。俺はお前や“Tour” そうだよ、お前だよ、隼。姉貴や、未来を死なせたくないかった

“Odin”の腕は微動だにしなかった。彼は冷たく言った。

「それと同時に、人が滅びるべきだと考えていたってのか?」

「…………… そうだ」

隼が唖然として僕を見た。

「何……………哲、お前……………！」

「……………悪いな。俺はそう思ってる」

「

僕は“Odin”を睨み返した。

「知ってるだろ？ “Loki”が、世界を滅ぼすんだ」

「まさかテメー……………」

「そう、最初っからそのつもりだ。俺が世界を“黄昏”に導くってね

引き金にかかっていた“Odin”的指に力が入る。ほんやりと、“ああ、これでジ・エンドか”と思った。“情けねー終わり方だな”と。ところが驚くべきことに、彼は銃をおろした。憎々しげな表情さえ、消えてしまっていた。

「……………どうした？」

「……………“Loki”。俺達の武器はピストルじゃ  
ない」

僕はにやっと笑った。相棒の言いたいことが、手に取るように分か  
つた。

「おいおい、俺は“Loki”だぜ？お前、それを承知で、銃使わ  
ないで、俺と勝負するつもりか？？」

「忘れるな。俺は“Odin”だ」

“Odin”は拳銃をぐるっと回し、腰だけでぶつ放した。

「ゲ！？」

鼻の頭に、何か熱いものが通った。遅れて火薬のにおいが漂つてく  
る。鼻と鼓膜がジンジンしていた。

「テメエ……………ホントに撃ちやがったな……………  
……………？」

「ほら、お前なんかいつでも殺れる。“Loki”、もう、やめとけ。お前がいくら意気込んだところで、所詮、一人の人間に過ぎない。全人類を敵に回して、勝てるとでも思っているのか？」

僕は肩をすくめた。

「俺は俺の正義に従うだけさ」

僕はふらつと立ち上がり、操縦室から出て行った。

二人とも、追っては来なかつた。

ただ、“Odin”的舌打ちだけが、扉をくぐり、僕に追いついた。

ふと窓をのぞくと、美しい地球が、無限の闇の中に浮かんでいた。

無意味なかもしれない。最後の最後で立ちはだかるが、僕の護り

たかったものかもしれない。

ただ、僕は凌ぎ切った。

とりあえず、護り切れたのだ。

それで満足することにしておつ。

それから、世界をニュースが駆け巡る。

“日米が互いに宣戦布告。再び世界大戦か？”

混乱が、恐怖が、世界に満ちる。この戦争は間違いなく、核を使った戦争に、人を滅ぼす戦いになるからだ。しかし、次に世界に降りかかるたのは、核ミサイルではなく、とんでもないニュースだった。

“日米両首脳が行方不明”

笑い話である。戦争を始めた一人が、消えてしまったのだ。正田も大統領も、忽然と消えた。もともと戦争に乗り気ではなかった両軍は停戦に合意。人々も呆れるしかなかつた。その5日後。

“臨時首相に日向氏が就任。米との講和へ”

月から奇跡の生還を果たした日向は、そのままうちに国会に戻り、アメリカとの和解を果たした。何がなんだか分からぬうちに始まり、終わつたのだ。

そして、世界は落ち着きを取り戻す。大統領も正田も、ついに発見されなかつた。彼らが見つけ出されるのは、ずっと先の未来だ。ただ、それは別の物語だ。

ところで、月からの帰還を“奇跡”といえるのには理由がある。

## “人類初めての試み、月面移住計画失敗”

“戦争”の混乱の中、ルナ・ドームからの通信が途絶える。終戦の後すぐ、日向は調査隊を送り、そこにいた人員の安否を確かめようとした。だが、彼らが発見したのは、大きなクレーターと、残った放射能だけだつた。全ては無に帰したのだ。そこにいたとされる兵士350名は、名誉の殉職とされたが、もちろん、その亡骸は一つも発見されなかつた。

その後すぐ、調査委員会が設立されたものの、現場が月といふこともあり、捜査は難航した。月から帰還した元・住民達の証言も、大して意味はなかつた。彼らはドームが爆破されたことすら知らなかつた。ただ“軍の”命令どおりにシャトルに乗り込み、ルナ・ドームを離れただけだつたのだ。

そんな中、爆破の寸前まで月にいた上、救命用シャトルに乗つて大気圏に突入、太平洋に軟着陸し、生還した一団がいた。その“第二ド・サー・ティーン”的セカンダリーナンバー”と呼ばれた奇跡のメンバーの中に、日向もいたのだ。彼らもまた、真相を知らなかつた。それは事実だ。しかし、勘付いていなかつたというと、それは嘘になる。誰一人、それを口にしなかつただけだ。

それらのニュースは、世界を駆け巡つたが、真相を伝えることは、とうとうなかつた。

いや、一人、もつと言えば一人、本当に真相を知つていたものがいる。

石井哲は、モニター越しに羽下兼に話しかけていた。

「どうして正田を殺した？そんな話は聞いてないぞ」

兼は頭をぽりぽりかいた。

「…………復讐だよ。昔の“相棒”のな

哲は不満そうにしながらも、それ以上は追及しなかった。兼はその顔をにらみつけた。

「お前こそ、何故全てを吹き飛ばした？あれはお前が一番嫌いな手じゃなかつたのか？」

哲はにやりと笑つた。

「復讐だよ

それから兼も哲も、黙りこくつてしまつた。

「…………それで？」

長い沈黙の後、兼が問いかけた。

「世界を滅ぼすんだつて？」

「違う

哲はつめいた。

「地球を還すんだ。人間以外の何かに」

「そうか」

兼は興味がないようだった。それは当然のことである。哲と違つて、彼には、譲るべきものなどない。そんな彼にとつては、世界が滅びるかどうかなど、どうでもいい話なのだ。

一連の騒動が過ぎ去つてから数カ月後。とある新聞の三面に、ある研究データが掲載された。それは地球上の生命があと8年で滅びるという結論に至る、衝撃的な記事だった。

あらゆる角度から、あらゆるデータを取り、考えに考え方抜かれたその予測は、確かに起こりえるもの、いや、明らかに実現してしまうものだった。

ところで、その日の数多くの新聞の一面は、人気女性歌手が、別の人気グループの男性メンバーと結婚したというゴシップを伝える記事だった。その中で、そのことについて質問された関係者はこう答えていた。

“あの二人が十年持てば奇跡だ”

くだらない記事ではあった。しかし、まさにその通りなのである。

完

## 後書き（前書き）

後書き、といつよつ、自分の反省です。

あまり意味はありませんが、言訳をしたくなるような文章なので、  
とつあえず載せました。

暇な方はどうぞお読みください。

さあ、月～ルナ・ドーム～、ようやく完結です。

正直、最後の方、完全にやる気を失っていました。f(^\_^；

理由はいくつかあります。

一つは、登場人物を多くしすぎたこと。

今、読み返して全員の名前を書き出す気力もありません。笑  
そのせいで、それぞれの登場人物のいる意味がほとんど失われてしましました。

二つ目は、ストーリーをまとめられなかつたこと。

と、言うのも、書き始めた当初はただ単に、“月”、という隔離された場所で、政府が国民を減らす、つまり虐殺していく計画”を“巻き込まれた普通の少年少女”が止めるために戦う、というだけのものでした。

終盤の“詩織”的存在や“筒井”と“羽下”的くだり、果ては“Loki”、“Odin”でさえ、存在しておらず、執筆した時の思いつきで書いてしまったものです。そのせいで焦点がぶれ、非常に読みづらいものになつてしましました。

そして三つ目。それぞれの登場人物像が非常に曖昧になつてしまつたことです。

結局、哲が何を考えていたのか、正田は何がしたかったのか、洋介は・・・・・隼は・・・・・あげていくときりがありません。

最終的にこのよつな、田隠しをしたままふらふら歩いていったような小説になり、まじと残念に思つと同時に、自分の力不足を痛感させられています。しかし、じつして、無理矢理にでも完結させたおかげで、田隠しを外せたと思います。

田を見開き、まっすぐに歩いて出来た作品が、いつか皆様の田に留まることを願っています。

最後になりましたが、完結までお付き合っていただけたこと、本当に、ありがとうございました。

田中 遼

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4483d/>

---

月～ルナ・ドーム～

2010年10月8日12時08分発行